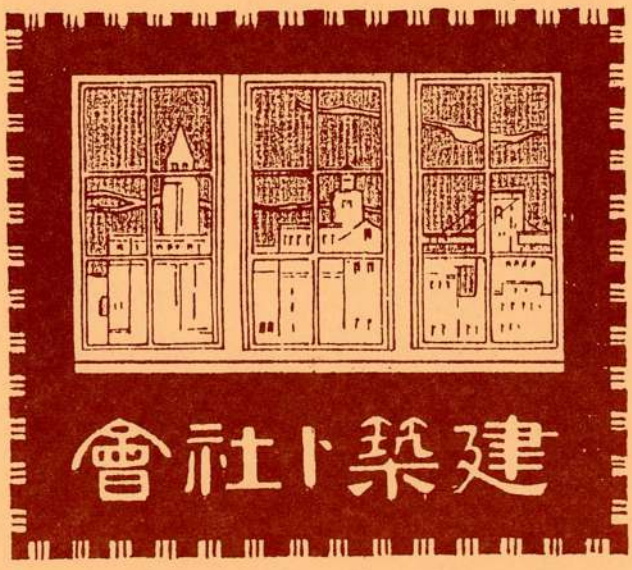
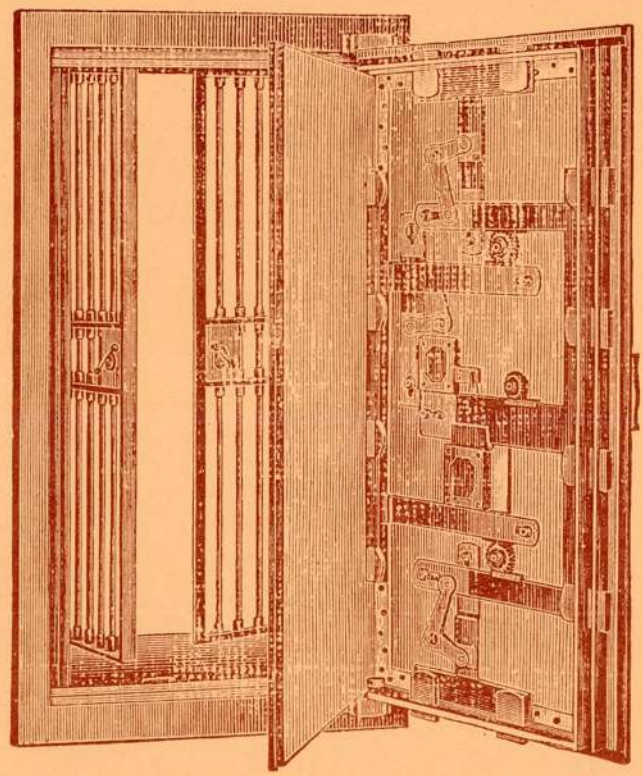


第七輯第十号

日本建築協會

大正十三年十月一日

耐震
耐火
理想鐵扉の出現



金庫
金庫扉
製造界の權威

大谷金庫店

店主　大谷榮之介

顧問工學博士　細木松之介

獨逸人技師　ア・シューハルト

營業所　東京市京橋區岡崎町二丁目
　　京都市松原通東洞院東入
　　大阪市東區淀屋橋筋（道修町）
　　神戸市楠町六交叉點西

工場　東京第一工場　東京市京橋區佃島壹丁目
　　仝　第二工場　仝　深川區東元町
　　京都分工場　京都市松原通り大宮西入

現出器房暖的想理

THE AUTOMATIC
Gas Steam Radiator

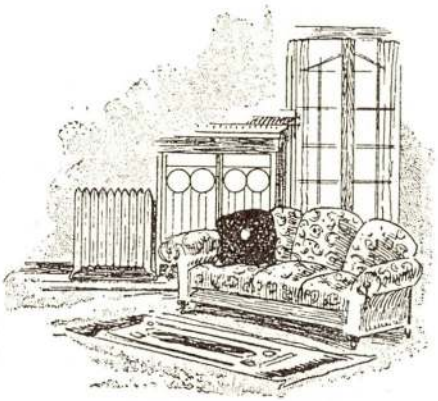
MANUFACTURED BY

Automatic Gas Steam Radiator Co.
U. S. A.

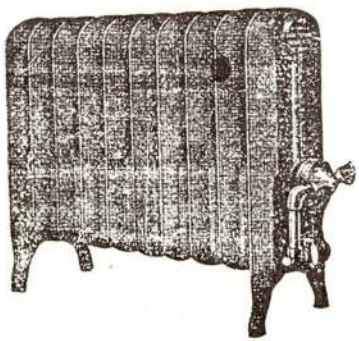
經費節約　取付簡單
衛生第一　體裁優美

詳細最寄支店ニ御問合被下度候

日本總代理店
內田商事株式會社
神戸　東京　大阪







建築と社會　第七輯第十號目次

口絵
◇大阪野村銀行堂島支店
◇須磨基督教會堂

巻頭……昔き殘る

論說

破壞は建設の始……文學士　黑田鵬心・二
都市計畫に於ける地域制……工學士　宮本長治・七

研究

建築設計と希臘建築に於ける對稱及均勢の「ハンビッチ」氏法則……伊藤正文・三

住宅

住宅贅言……大庭草太郎・一七

都市

大阪市及接續町村に於ける衛生地區の乳兒死亡に及ぼす影響に就ての一考察（一）……楠原祖一郎・二〇

資料
虛無御坊から明日庵へ……工學博士 天沼俊一・三
——續埃及遊記(九)——

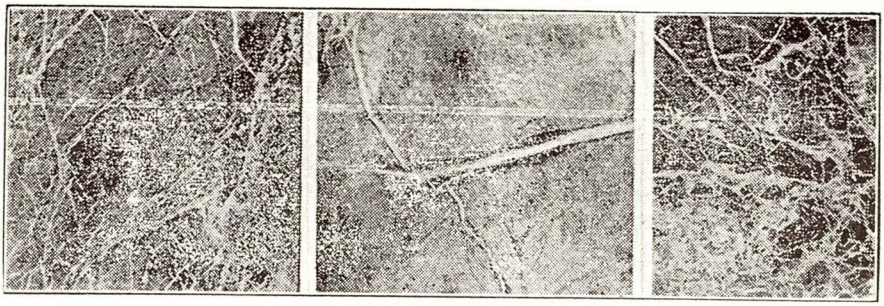
史傳
弘仁期の美術「室生寺」の研究……池田谷久吉・四三
フランクビイギルプレス氏の死を悼む……渡部圭吾・四四

漫錄
雲岡石佛寺(二)……京都臨濟大學教授 大屋德城・五七
頽るゝ花……廣岡峰太郎・六六
戲場漫筆……足立圓次郎・六九
郊外に住んでの雜談……阿部二見亭・七三
繩……別所悌一・七七

創作
建築界の最近重要記事……八七

時報
會報
◉大日本建築協會九月中記事……

大和錦 (A)　　白瀧 (A)　　白瀧 (B)



錆色青磁色ニ白模様　　薄青磁色ニ濃青磁色並ニ白模様　　青磁色ニ白模様

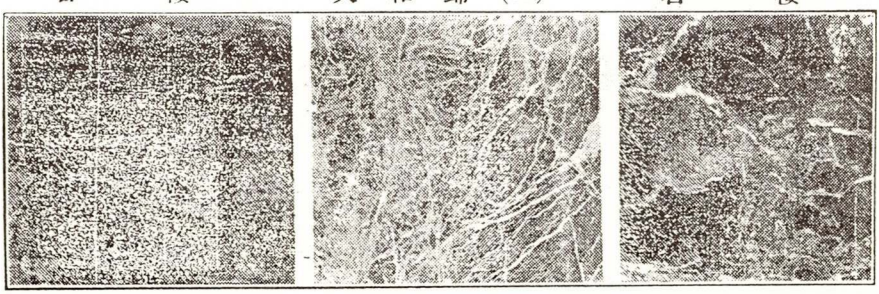
本　　店　　鳥取市立川町一ノ五九
東京販賣所　　東京市日本橋區小網町三ノ二四(電大手七一一六)
大阪販賣店　　大阪市北區芝田町一〇六番地電話北一六七〇
採掘地　　鳥取縣八頭郡若櫻町字赤松

旭大理石商會

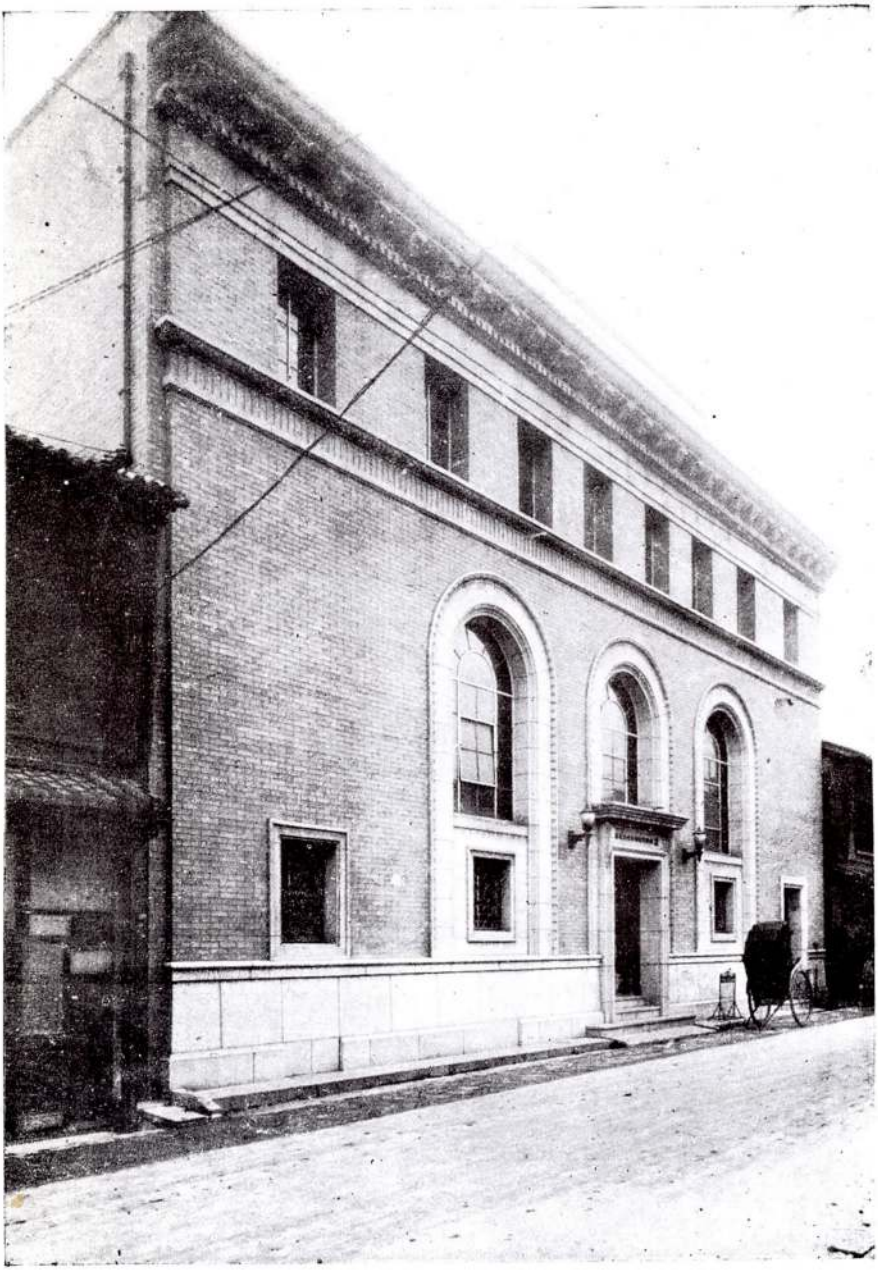
蛇紋石

大材採取　富豐量礦
耐火　耐酸　價格低廉

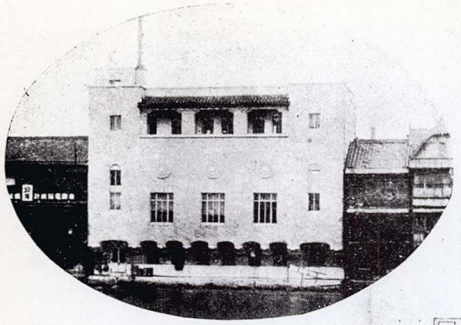
若櫻　　大和錦 (A)　　若櫻



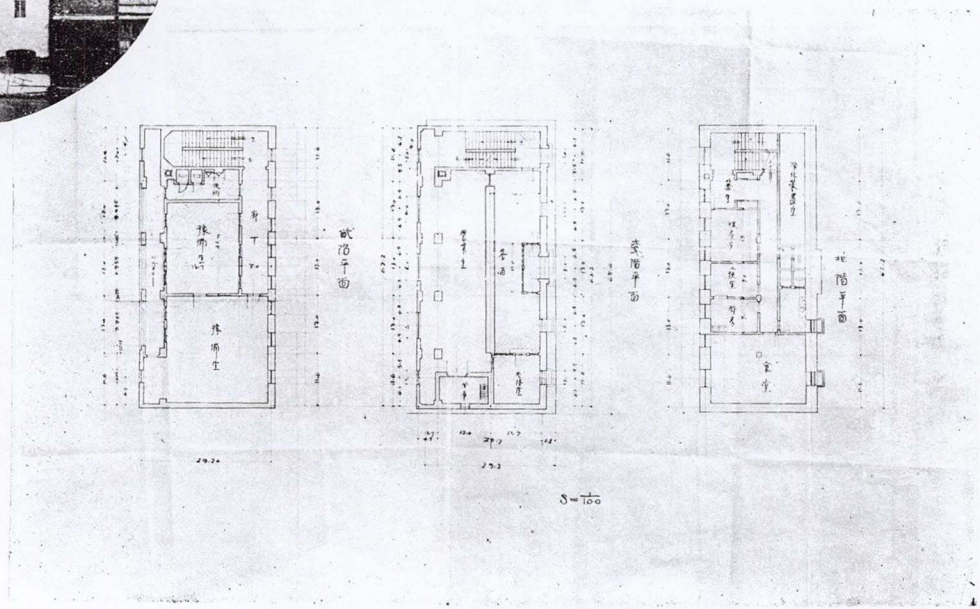
濃青磁色ニ朱色模様　　錆色青磁色ニ白模様　　濃青磁色ニ朱色模様



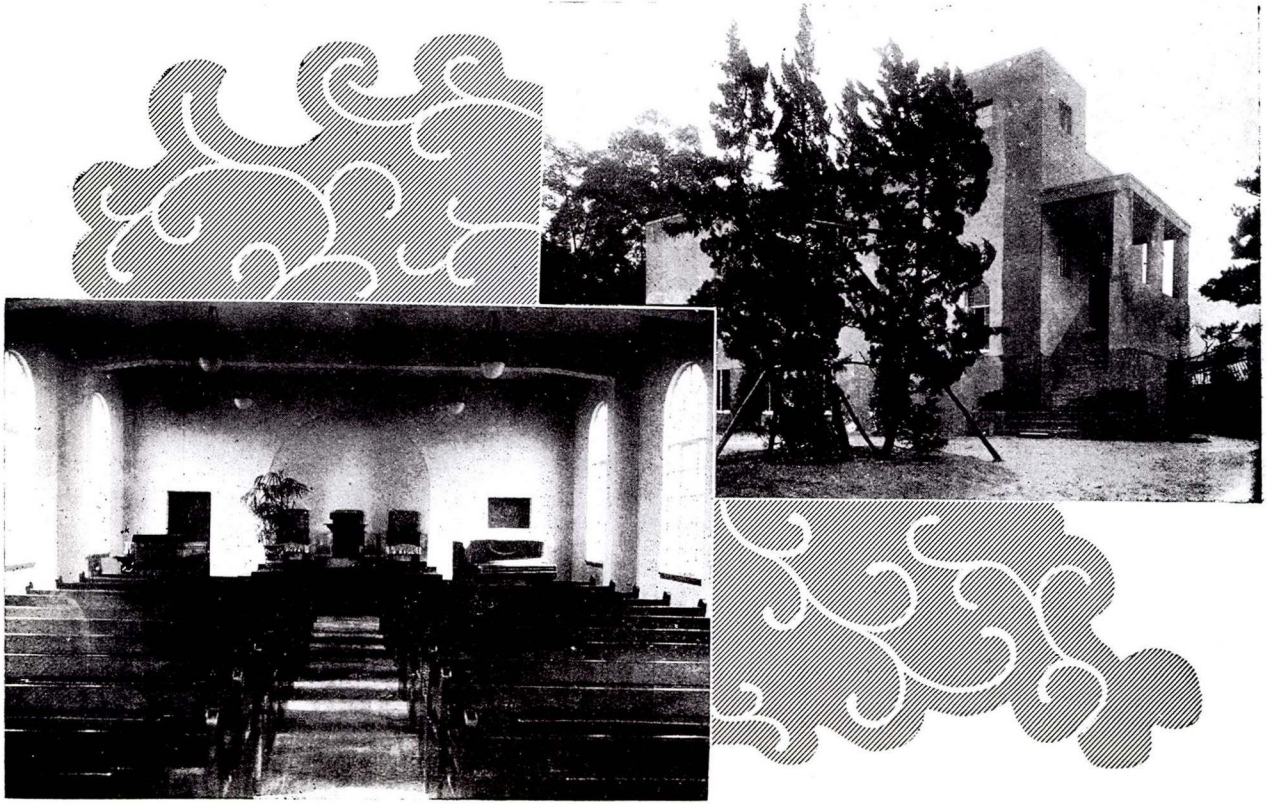
大阪野村銀行堂島支店



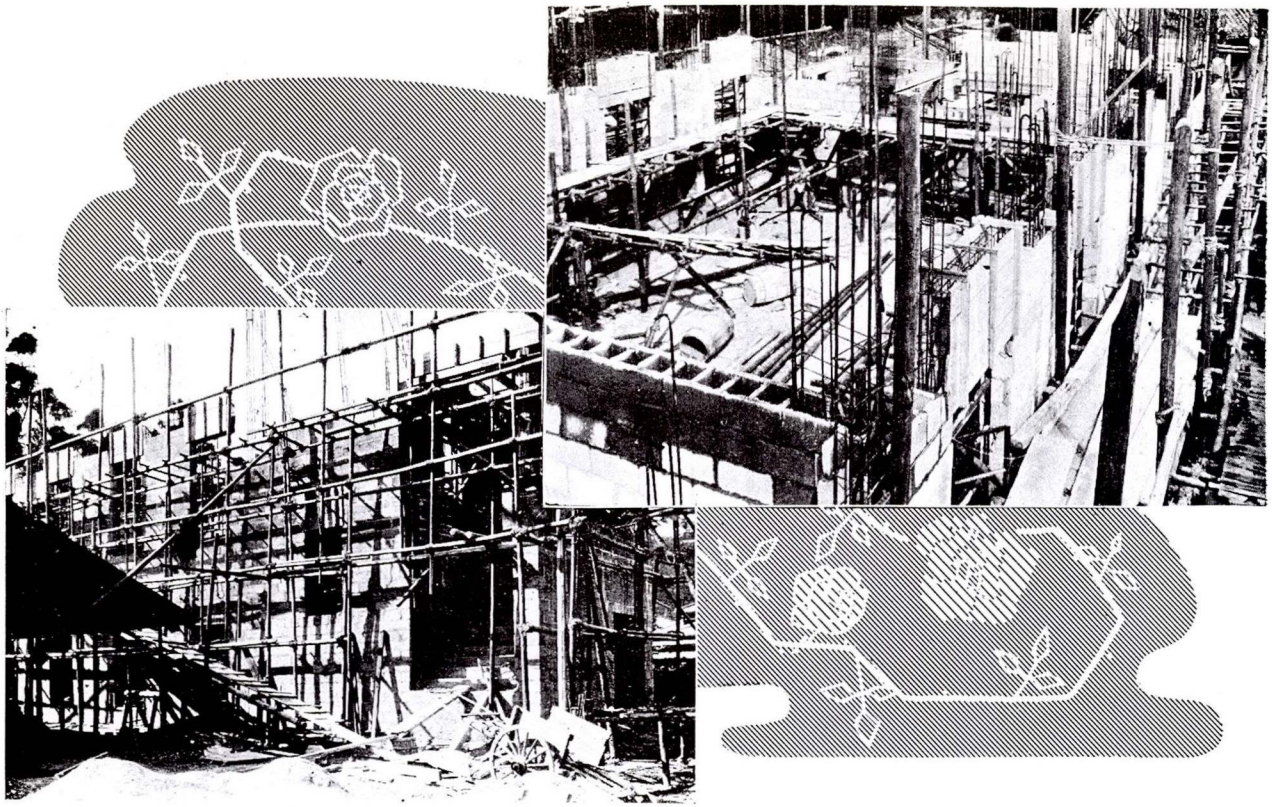
見望のりよ川島堂



（二　の　そ）



須磨基督教會々堂　（中村式鐵筋混凝土建築）



工事過程（その二）

當協會發行の雜誌『建築ト社會』は、時世の進展に伴ひ、內容外觀共に堅實なる發達を遂げ來りまして、今や我國に於ける斯の種刊行物としては、常に第一位に在ることの自他共に相容すに到りましたことは、會員各位と倶に同慶の到りに存じます。就いては、益々斯の機運に隨調するため諸種の案件を有つて居りますが、先づ以て、取り敢へず本誌は來る大正十四年一月號より**四六倍版**に改定し、茲に更めて躍進の第一歩を附けむと致して居ります。仍て、それに相當する表紙圖案を弘く募集することに致しましたから、別記御熟覽の上御應募被下いますやうお願ひ致します。

大正十三年十月

大阪市北區堂島濱通一丁目堂島ビルデイング三階

日本建築協會

『建築と社會』表紙圖案懸賞募集規程

（一）題　字　建築と社會、第八輯第壹號、日本建築協會　大正十四年一月一日ト適當ニ配列記載スルコト（從來「建築ト社會」の「ト」を「と」に改む）

（二）寸　法　四六倍版　竪二五糎（日本約八寸二分五厘）　横一九糎（同約六寸二分七厘）

（三）着　色　二色（紙地色ノ外）

（四）圖　面　原圖紙ヲ用ヒ、現寸トス

（五）意　匠　隨意ナルモ本誌ノ特質ヲ表現スルニ足ルモノトス

（六）賞　金　一等一人壹百圓、二等一人五拾圓、三等二人貳拾圓ヅツ

（七）期　日　本年十月三十一日午後五時迄ニ當事務所（到達スルヲ要ス、但シ郵便送附ノモノハ同日發送ノ消印アルモノニ限リ審査開始マデ受附ク

（八）版　權　當選セル圖案ノ版權ハ當協會ノ所有トス

（九）審　査　當協會ノ理事會ガ依囑シタル特別審査員ノ合議ニ依リテ當選ヲ決ス

（十）符　號　圖面ニハ適當ノ符號ヲ附シ別ニ符號住所　氏名ヲ記入セル半紙四ツ切リノモノヲ封書ニテ差出スコト

（十一）發　表　審査ノ結果ハ當協會大正十三年十二月例會ニ於テ發表シ賞金ヲ授與ス

（十二）圖　案　應募シタル圖案ハ返却セズ



葺き残す瓦積まれる草の花



破壞は建設の始

帝都復興の曙光

文學士　黑田鵬心

一

多くの場合『破壞は建設の始』である。

目貫の場所の大半を燒き盡した去年の大震火災は、帝都東京市にとつては、誠に大なる破壞であつた。江戸時代の代表作の一つで、儒敎建築の貴重な例であつた湯島の大成殿を始めとし虎之門の舊工部大學、本郷の法文科大學、ニコライ會堂など、十數個の好建築が亡びた。千年來木造で一貫して來た我が建築界に始めて洋風が輸入された最初を記念すべき建築は殆んど全滅に歸したのである。その外、最近竣工の大建築から工事中のものに至るまで、多少の損害を蒙らないものが無く、又小建築に至りては實に三十餘萬戸を燒失した。かゝる現象は大都會にとつて實に有史以來の大破壞と云つて差支ないと思ふ。

此の大破壞を眼前に見た者は、實際其の損害の程度の大なる

に驚いて、再び復興するのは果して何年の後であるか、或は復興し得るか否かすらも疑問とせざるを得なかつた。

併し『破壞は矢張建設の始』であつたことが、今日滿一年を經過してみると明かに分る。

二

東京市は五百年以前に太田道灌によつて開かれ其の後德川氏の居城となつたが、元來漸次發達して來たので、街路の整然たる部分は、僅少の區域で、大部分は雜然たる不規則の配置となり、道路の幅員の如きも、固より電車も自動車もない時代に出來たので甚だ狹少のものである。漸く明治維新となり、皇居が定められ、政治、文化の中心となつてからも、明治時代の間は、多少見られる建築が建てられ、姑息な市區改正が行はれた位のもので、所謂近代的の都市計畫は未だ行はれず、大正時代となつてから、二三十個の建築が漸く都市の美觀に役立ちかけた位のものであつた。

既に出來上つた大都會の改造は云ふべくして中々行ひ難いものである。最近數年間に都市計畫や建築や公園などについて書かれたり話されたりした事は可なり盛んであつたが、實行は其の百分の一にも及ばなつた。それは實行には經濟問題や其の他の難問題が横はつてゐるからである。それに業を煮やして新たに帝都を經營すべしと云ふ、遷都論さへ唱へた建築家があつた位であつた。

そこへ去年の大震火災が見舞つたのである。それは實に大破壞ではあつたが、同時に大建設に對する都合のいゝ條件を作つて呉れた。そこで今度こそは理想的の都市計畫を實現すべしと云ふ論が盛に起つた、私などもこれを絶叫した一人である。在來の都市が破壞されたのであるから、新しい都市計畫を實行するのに之れ以上の好機會はないのである。もはや遷都論などは必要がなくなつた譯である。(其の際起つた遷都論は將來の地震の爲めで、都市計畫の方からの理由ではない)

時の内務大臣は丁度東京市長の經驗もあり、都市研究にも熱心な後藤子爵であつたので、復興院を起し、可なり理想的の都市計畫を樹立した。其の後不幸にして最初の計畫は縮少せられ、復興院も復興局となつたが、猶震災前に比ぶれば、根本的の計畫で、若し大震災が無ければ、とても實現出來ない程度のものである。

三

建設の第一段は、都市計畫である。都市の建設は先第一に、都市計畫から定めてかゝらねばならぬ。然るに全く不意打にかの大破壞が來たので、建設の用意が十分出來てゐなかつたのと、計畫の縮少から變更を餘儀なくせられた爲め、都市計畫の確定に可なりの時間を要した。これは復興審議會などと云ふ屋上屋を架する時宜に適しない方法を執つたのも主な一理由であつたらう。兎に角、災後兩三ヶ月を閱して、復興計畫が確定する頃には、バラック建築の復興が中々盛んに行はれた。

此のバラック建築も復興の第一歩ではあるが、新しい帝都建設には役立たないものである。何となれば眞の建設はバラック建築ではない。先づ都市計畫を確定し、路線、公園、廣場等の配置を定め、建築地域を決定するのが建設の第一段で、第二段が所謂本建築である。しかもバラック建築は、此の建設に役立たないのみならず、寧ろ邪魔をする。第一にバラック建築の爲めに都市計畫が早く出來ない。かの區劃整理即行反對などと云ふ江戸子にあるまじき馬鹿げた運動の起るのもバラック建築の爲めである。第二に本建築をする爲めにはバラック建築を壞さねばならぬ。折角地震で壞して、更らに又人爲的に壞すの愚を敢てせねばならぬ。

震災後バラック建築が意外に早く出來るのを見て復興々々と喜ぶ人の情は察すべきであつたが、そんなものは本當の復興ではない。寧ろバラックは眞に止を得ない臨時のものに止め、他は都市計畫の確定

を待つて本建築にかゝるのが本當の復興であり、建設である。併し本建築等は、前にも云ふ通り第二段で、本建築にかゝる前に第一の都市計畫が必要なのである。これが意外に遲延したのは返す〳〵も遺憾であつて、バラック建築が早く出來たのも、都市計畫の確定が遲れたのが一因である。

宣戰布告と同時に敵の軍港を夜襲するのが兵法の奥儀とすれば、海軍大將たる山本首相は、何故疾風迅雷的に都市計畫を定め、震火災の餘燼未だ收まらない、路線の杭打を始めなかつたのであるか。不意打の破壞に、不用意の建設が出來なかつたと云つても、一ケ月あれば出來たに違ひない。一ケ月後に杭打に着手すれば、バラック建築は斯う迄に澤山出來ず、今頃は杭打も濟んで、本建築等がボツ〳〵始まるであらう。勿論バラック建築の復興は今日の如く盛んではなからう。併し眞の復興がより易く起つたらうと思ふ。何となれば建設の第一段たる都市計畫が早く行はれるからである。

併し何れにしても既に都市計畫も確定し、杭打も始まつてゐるのであるから、建設の第一段は實現しつゝあるのである。

四

建設の第二段は本建築であるが、これも都市計畫に關係なき所ではドシ〳〵行はれ始めた。一時悄然として空中に聳へてゐたコンクリートのエレベーターも、近頃は盛んに活動してゐるものが多く、新たに外圍を作つて壁張工事や室内工事に忙しい建築も多い。これらは工事中のものであるが、竣工したもので大損害を受け、本修繕にかゝつたものもある。前者の例としては、銀座ビルデイング、國光ビルデイング、丸之内ホテル、邦樂座、千代田ビルデイング等があり、後者の例には、帝劇、丸ビル、郵船ビル、三越などがある。

これ等は何れも本建築で、建設の第二段となり、本當の復興であるが、其の樣式は前の計畫を踏襲す

るので何等新しい點もない。唯材料、構造の方のものは、大震火災の經驗によつて、新規の試み、少くとも耐震、耐火に對する一段の研究が積まれてゐる譯である。併し從來の鐵骨鐵筋混凝土構造でも多くのものは、去年位の地震には耐へる事がわかつたのであるから、これに多少の改良進歩を加へればよいので大した變化はない。唯從來の木造建築や唯の煉瓦建築が今後防火地域に於いては、總べて鐵筋混凝土建築となるであらうから、量の方から云ふと大進歩となる譯である。即ち木造や煉瓦の建築が破壞されて、鐵筋混凝土建築が建設される譯である。これから新しい都市計畫によつて路線が確定し、區劃整理が濟めば、新しく設計されたこの本建築が續々起工される事と思ふ。樣式の事は本文の問題外であるから、別の機會に於いて述べやうと思ふが、此の方ではバラック建築にも一寸面白いものがある。

五

多くの場合の通り、帝都東京に於いても、去年の大震火災による『大破壞は、即ち大建設の始』となつてゐるが、其の建設は漸く昨今に至つて始まり、眞の意味の復興は漸く災後滿一年を經過して其の曙光を現はしたに過ぎない。やゝ遲き恨はあるが、今後の急速なる進展を希望して筆を擱く。（九月十三日於東京）

大なる國の歡喜を菊白し

都市計畫に於ける地域制

工學士　宮本長治

（一）地域制の趣旨

近代都市の急激な發展は、主として商工業の勃興に起因すると云はれて居る。言換ふれば商工業の發達は都市發展の主要な原因として、都市に人口の集積を招來することになる。之を自然の成行に放任するならば、此集積した人々の住宅や、益々殖えて行く商店、工場　其他有ゆる種類の建物が、都市の隨所に濫設されるに至ることは免れ難い。其結果として生出される相互の不利不便は、實に始末に了へぬものとなるであらう。工場は其取扱ふ物品に依り、又其營む作業に依り、或ものは騷々しい響を立てる或ものは有害な瓦斯を發散する、或は惡臭を放つ、或は粉塵を撒布する、火力を用ふるものは煤煙を吐出す、更に火災や爆發の危險を伴ふものも少くない。又原料や製品を運搬する荷車の通行に依つて、之亦有難くない音響を聞かされるのみならず、附近の交通狀態を惡化する、之等のことは一として、商店住宅にとつて非常な迷惑でないものはない。殊に住宅は吾々人類生活の安息所である。屋外で奮鬪に疲れた頭や身體を、のんびりと休息させ靜養させるのが、住宅の使命とでも言へるならば、夫が年中騷々しい響に惱されるとか、或は有害な瓦斯に襲はれるとか、其他上述の如き脅威を受けるといふことは、全く住宅としての眞の價値を沒却されたものと言つても可いであらう。然らば工場の側から見て、此混在することに、さして苦痛を感せぬかと言ふに、之亦少からざる支障を伴ふのである。工場としては其作業や動力の關係に依り、種々の施設を要する。其他一般に原料製品の運輸が重要問題であるから、鐵道、運河等の便を必要とするのであるが、之等工場に共通であるべき重要施設も、住宅や商店の間に雜

然と介在する工場では、到底滿足に充實することが出來ないし、又一個ノ〳〵の工場に、別々に施設を完備することは、極めて不經濟なことであつて、結局工場としての能率が上らないことになるのである。

住宅と商店との關係は、工場程でないかも知れぬが、略同樣の利害の衝突が考へられる。

斯の如き相互の不利、不便を除いて、夫々の機能を充分發揮させる爲に、地域を定める。即住居の爲には、住居地域を定めて、其安寧を保護し、商業の爲には、商業地域を設け、之に適應する施設を整へて、其利便を計り、工業の爲には、工業地域を選んで、夫に必要なる諸種の施設を完備し、製產能率を增進する。斯くして都市生活全體としての福利、向上を計る、といふのが地域制の趣旨である。

以上述べた所は、建築物の用途に依つて地域を定める、用途地域制に就てゞあるが、此他に建築物の高さや建築面積も亦、無限に放任しては、衛生上保安上重大な弊害を生ずるのであるから、適當の制限を要する。而して之も土地に依つて其要求の程度を異にするから、地域を定めて、高さや建築面積に制限を附する。高さの地域制、建築面積の地域制も考へられるのであつて、歐米殊に米國の都市に於ては用途地域制と共に盛に用ひられて居る。然るに之等は大體に於て、用途地域と其要求が合致するといふ見地からだらうと思はれるが、我國では、市街地建築物法に用途地域制のみを規定し、其各地域に應じて、建築物の高さ及建築面積に、適當の制限を附して居るのである。

（二）都市計畫に於ける地域制の地位

都市計畫に於て、前述の趣旨の下に、地域を指定すると共に道路、公園、上下水、鐵道、運河等の事業を計畫實施するのも、等しく都市生活の福利を增進する目的に外ならぬのであるから、有ゆる都市計畫施設も、地域指定と相俟つて計畫されるのでなければ、果して何れの土地に如何なる施設が適切であるかゞ決定されぬ筈で、從つて其効果を全うすることが出來ない。少くも各地域の概略の見當なりとも定め、夫に應じて適當なる計畫を立てるのが順序であつて、此考慮を省くことは、寧ろ本末を誤るもの

と言ふべきである。此意味から、地域制は有ゆる都市計畫の指針となるべき、最重要なる基礎的施設である、と言つても可からうと思ふ。最近米國に於ける二百に近い大小都市の都市計畫が悉く地域制を基本として取扱はれ、恰も地域制の都市計畫であるかの觀あるといふのは、寔に故あることと首肯かれる。

更に卑近な例として、都市を一の住宅に譬へるならば　都市に於て前述の各地域を指定し、住宅、商店、工場を分離すべき要求は、住宅に於て寢室、食堂、浴室、炊事場、便所の如きものを混同すべからざると、同樣であつて、つまり都市計畫に於ける地域制の地位は、住宅設計に於ける間取に相當すると見て可からうと思ふ。

住宅を建設するに當つて、敷地なり其内に於ける家屋の配置が大體決定したならば、住宅自身の設計として、先づ第一に考ふべきは其間取である。間取は住宅設計に於ける生命とも見るべき基礎的計畫で之を決定せずに、柱や壁の工事を進める譯には行かぬであらう。都市に地域制なくして、從來の如く秩序もなく膨脹して行くことは、住宅に大切な間取が決定されずに、無暗に家屋が建つて行くのと同樣ではあるまいか。

（三）地域指定の方針

さて地域を指定するに當り、其選定の方針としては、各土地に對して、大體次の二樣の考慮を要するであらう。

一、位置、地勢、風向其他の自然的條件に順應し、土地の性質上　將來何地域として發達すべきであるかの歸趨を洞察しなければならぬ。

二、從來發達の沿革及現在の狀態を尊重しなければならぬ。

之は要するに、現狀を尊重すると共に、夫に捕はれ了ることなく、理想を實現することに努めねばな

らぬ、といふことに歸する。即徒に理想に凝つて、現狀を打破する樣な選定方針は、產業の發達といふ點から見ても、亦一般經濟上から考へても好ましくないのであるが、併し從來の發達が、既に秩序なき混亂狀態に在る以上、夫に捕はれ過ることは、地域制の効果を甚しく減殺することになる。極言すれば地域制なきと同樣の結果に陷るかも知れぬのであるから、之は都市全般の上から見て、各地域の配置上或は一部の不便を犧牲に供しても、成るべく合理的なものに選定しなければならぬ。而して我國都市近年の亂雜なる發展の結果として、前述の理想と現狀とが、往々にして一致せぬことの多いのは止むを得ないが、之を如何に取捨すべきか、其適切なる判斷が地域指定の上に最緊要なる點であらう。

四　大阪の地域指定に就いて

大都市の膨脹發展は、近年益々急激の度を加へ、殆ど底止する所を知らぬ趨勢である。故に之が對應策として、地域の指定は、一日も早きを要する緊急施設と言へる。此必要から六大都市に於ても、年來調査を急いだ結果、東京、橫濱、京都、神戶、名古屋の五大都市では、既に夫々の地域指定に關し、都市計畫地方委員會に於て議決を了し、（東京、橫濱は震災の爲再審議の由）或は內務大臣からの諮問案を審議中であつて、殊に京都では內閣の認可を經て、本年四月から之を實施して居るのである。獨り大阪は疾く此調査に着手しながら、未だ成案を得ないのは遺憾であるが、之は大阪が我國隨一の商工都市として、工場の發展特に著しいものあると共に、從來之が所在に對する統制的規定なき爲の當然の成行として、隨所に亂雜なる發達の道程を辿つた結果、地域選定の理想と土地建物の現狀とが合致しないといふ困難を、他の都市よりも一層多く荷うて居る爲であつて、都市計畫大阪地方委員會では、內務大臣の原案作成の參考に資すべく、特別委員を選定して、今や頻に此立案を急いで居るのである。

然るに一面に於て、都市計畫事業が政府の財政整理の大方針に累せられて、其實施に稍難色ある所から

『地域指定のみを急いでも、之に伴ふべき都市計畫事業が沮まれる樣では、實効が擧らぬのみならず、却て市民の苦痛を增すのみである』との聲を聞くこともあるが、眞實斯樣に考へての言とすれば、之は甚しい謬見と言はねばならぬ、何故ならば地域制は前述の如く都市計畫の基礎的施設であるから、他の都市計畫事業に一歩先じて、確立されるのが當然であるのみならず、我國の市街地建築物法は地域指定を俟つて、始めて完全に其効果を發生する樣に、規定せられて居るのであつて、假に之に伴ふべき都市計畫事業が遲延するとしても、單に法規の完全なる活躍に依て建築物の用途を制限し保障する丈でも、地域指定は重大なる意義を爲すからである。況して地域制に依て建築物の用途を制限することは、決して市民多衆の苦痛を增すものではなくて、却て其公安衛生を保護する所以である。建築主個人に對しては不便苦痛を與へることがあるかも知れぬが、夫が公衆の爲の防衛であるならば致方がない。小なる個人の利益を或る場合には犧牲に供しても、一般都市生活永遠の福利を計るのが、都市計畫の大精神であると言はねばならぬ。（九月二十七日稿）

芣山に晴れ澄む池の蛙きく



建築設計と希臘建築に於ける對稱及び均勢の『ハンビッヂ』氏法則

ジエー、ケー、エー、ケーン氏が如上の題によつてアメリカンアーキテクトに載せられたものを譯して紹介することゝする。此ダイナミカルプロポーションに就いては嘗て安井武雄氏が雑誌「柊」に發表され、ヨリ以上詳かな説明があつた筈である。

伊藤正文

過去數世紀の間、希臘美術の意匠の根柢であつた法則、特に對稱と均勢との法則は殆ど理解されてゐなかつた。此意匠の優秀であることは誰しも認めてゐる所であつて此點に關する充分なる意見は異議のない事である。併しながら此驚くべき優秀さ（excellence）――殆ど完全に近い程の實例を持つ優秀さ、例へば Gaudet は彼の著 "Eléments et théorie de l' Architecture" の中に云つてゐる "le Parthénon……C'est, Vons le savez, la perfection meme" ……と――の根本的の素因に

關して與へられる反對の立場の說明があるが、それは此等の關係から摘出したる異論の餘地のない一つの根本法則とされる構造上の法則である。そして意匠に於ける此驚くべき完成は其時代の希臘の建築家が持つてゐたすぐれたる建築的材能の單なる結果としてのみ說明された。

しかしながら最近に我々の手許に屆いた報告を以つて、吾々は滿足すべきものとして此說明の基礎にしてよいものではあるまいかと思はれる。

此等の作品は鋭い建築上の感受性が伴はれたる構造上の原則に用ひられる知識のコンビネーションに依つたに過ぎぬものではあるまいか。

若しくは當時の建築家が、比較的吾々に知られず用ひられぬ、意匠上のある方則を會得し使用して、理解力が高められてゐたか。後者の場合であるとするならば吾々は人類の努力の歷史に對して比ぶべくもない程度の僅かな勞力であつたと理由づけて說明出來る。

實に二千年以上の前の人人によつてなされた斯の如き努力の、僅かな例が、後世を通じて、知識と目的への熱中と、藝術への感受性とを認めてゐる以上には研究されずに捨てられてあつた。

數世紀前の人人には我々の職業の有名な人もそれ程に貴ばれなかつた。人類はペリクレス、ヒイディアス、イクチノス時代以來彼等の見聞は非常に廣ろげられた。數世紀間蓄積された知識は組織立てられ、我々の偉大なる敎育施設によつて廣められた。最早や我々の業務に附隨したる技巧まで未知の難問を與へるものはない筈だ。プランニング、コンポジション、圖による表示法等多分希臘時代に夢想だにし得なかつた程度に發達してゐる廣く精密なる知識が確固たる基礎を作り上げた。しかし吾人は吾人が非常に嘆賞した作品の作者に對して知識的に引け目であるとは考へられぬ故に又彼等の意匠や均勢の問題の理解力が或場合に吾人のそれに優るとも云ふ事も許すことが出來ない。

そこでこういふことを想像するに難くない——此等の作品の優秀であることは吾人に等閑に附せられてゐたある方則の知識とその應用に對する大なる測定によるものであると云ふ事は已に暗示せられてゐた。茲で二つの適切なる問題が自然に起つて來る。

第一、此觀念或は法則から何が出來るか。

第二、希臘ではその知識を有し、それを用ひたと云ふことは何う云ふ可能性によるか。

此等のいづれにも答へ得る所の、すべての可能性に於ける一つの方法は、クラシックギリシアの作物に就て弘い宏平な態度で注意深い研究と實驗を爲すことである。

希臘に於ける記念的建造物がローマのそれや後世のものとはある重要な點に於て異ると云ふことはすでに大分前から多數の人によつて認められてゐた。クラシックギリシアの作品の均勢（プロポーション）を說明せんとする爲に、――特にパルラノンのそれに就ては――線單位のモデウルの使用を根據として、或は他の線單位のプロポーションによつて測らうとしたが失敗であつた。

最も科學的な說明は Penrose と Lloyd のものだが此等も確信に缺けてゐて不滿足のものであつた特に殆ど大抵の場合は結果に於て多かれ少なかれ近似的のラフなものであつた。今よく知られた所によると、ローマ及其の後の作物の多くは、ある two dimension を適用されてゐる、或は建築上で云ふとモデウルの使用によつて廣い範圍にまで統一されてゐた。しかし希臘のペリクレアン時代の最もよい實例は多少とも統一的の簡單な手法にあてはまらない。所が此等の作品の間に於て何か統一されるべき原則によつてゐない筈はないし、然らざれば廣く完全を期することは決して出來ないわけである。此點が最も重要な事柄として吾人に光明を與へるもので、『ハンビッヂ』氏に依て爲された驚くべき觀察の結果によつて明かにされた。

最初、數世紀間吾人は全く新しい觀念、又は精神的立場と呼ばれたる我々に與へられるべき認識に對して注意した。希臘の意匠の原則を以て、武裝された此問題に肉薄するべく必要な新しい精神的の武器であると云ふとは眞實である樣に見えた。

最も簡單な形式に於て云ふと此觀念は線單位によらず、面單位によつて割合を測る觀念である。

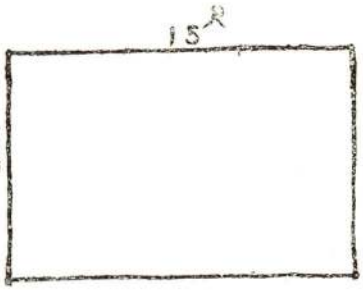
測定に就ての吾人の材能は非常によく發達し、理解されてゐて、吾人が實際に又自然に行つてゐる以外の測定法を認めることは困難な位である。

併し希臘人には此才能がなかつたと云ふ事がわ

かつた時に、彼等は我々の用ふる方法でない方法を用ひなければならなかつたと思はれる。彼等の測量道具は幼稚であつて、その爲には"Measuring cord"か、ロープをたよりとせざるを得なかつた尚更吾人が現在よく承知してゐる算術の科學は當時知られてゐなかつた。此は重要な點である。

從て、測定とか、均勢(プロポーション)とかの問題に向つては希臘人の精神程度は情況に多く支配されてゐた。

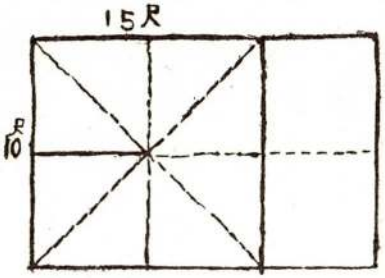
丁度こんな精神狀態に對する觀念は希臘人やその先覺たる埃及人に用ひられた測量の科學の始源と發達を考察することによつてわかるわけである。測量法即ちロープによつて爲される"Cording of temples"と云ふ方法は最古の時代から初められたものだ。埃及人の手によつてコーデイングは非常に發達したサイエンスとなつた。埃及の文書の中に此方法に關して多くのことが書かれてゐる。埃及の寺院をコーデットした測量者は希臘人には"Harpedo-naptai"又は"Rope stretchers"として知られた又一面に幾何學の技師として考へられてゐた。此科學の知識は紀元前六世紀頃埃及人から希臘人に傳へられ、初め頃、彼等によつて建築に適用された。即ち有名な"Duplicatiou of cube"の問題として歷史に表はれてゐる。希臘人の手によつて此科學は速に發達し完成され、且つ、形造られた。



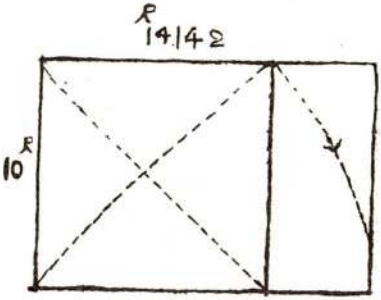
第一圖

彼等の建築のコンポジションに於けるプロポーションの關係的原理の基底をハンビッヂ氏の研究から明になし得た。何うして之が算術の知識を有せざるものが、ロープの方法によつて測量をしてその結果から考究したことにより實際により以上の理解が出來たことであらう。

扱てこうゆう矩形のプランの大さに就て知り度いと希望されたと想像しよう。今日その大さ或は面積は次の積によつて見出され得よう。



第二圖



第三圖

10尺×15尺＝150平方尺

算術の知識なく此大さは此狀態では決定し得ないしかし希臘人に知られた方法は、

次の樣に、矩形の一端の正方形の大さに對して矩形の大さを考へ合せて見る。

そこでこのプランは正方形と二分の一の矩形（十尺平方の大さの正方形の）とであると云へる。又は五尺の幅を有する正方形の二つ振りの幅と同じくその三つの正方形の幅だけを長さとする矩形としても見られる。之が即ち希臘の方法である。勿論此形のプランは無數にある。プランの他の形のものも容易に此方法で測り得る。

此方法では個有の重要な比例の特色が、此型の矩形プランに見出される。

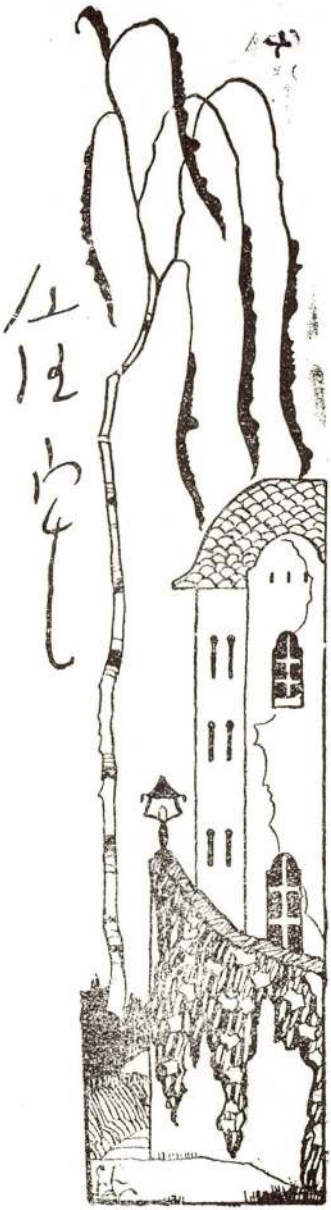
次にその大さ即ち面積が次の樣な算術によつて決定され得るとする。茲に小數が、希臘人に明に故障となる。（十六世紀までは小數は用ひられなかつた。）そこで矩形の一方のエンドで正方形を形作ると、長邊は此正方形の對角線に等しいことがわかる。

そこで希臘人は言葉で此プランを云ひ表すことが出來る。即ち十尺の邊を有する正方形の對角線をサイドとし正方形の邊をエンドとする矩形であると。此種の他の矩形も斯の如きものである。

（未完）

住宅贅言

大庭草太郎



……（一）……

簡易であれと言ふ法則は、全らゆる種類の生活様式のうえに於いても、最も緊要な條件でありますが、建築上に於いても、住宅の内部に於いては殊にさうであります。例を食堂にとつて、バアバンクが切言してをりますが、食堂に於ける不用で邪魔な骨董品の陳列は、それが他の部室に置かれてある場合よりも一層わるく見えると言ふことや食卓の上の混雑すること、またはその上に物の數が多過ぎることから起す亂雑な氣分の起るのを努めて避けなければならないこと等を勸めてをります。人心の僞りなき安住は、極めて簡易なる明るい周圍、壓迫なき静かな部室に於いて、最も自然になごやかに得られるのは自明の理です。聰明な

消磨は、決して、氣遣ふやうにはその本然の美を滅らしませぬ。裝飾的でない悲みは、裝飾しすぎた悔いよりはよほど忘え易いものです。混雜を簡易に處理することは難かしいことですが、簡易なものをうまく複雜に用ゐることは愉快なことです過剩が贅澤の意味から、簡易は眞實の豐富の意味です。牧師シャルル・ワグネは彼の數多い談話集の中で、『簡易なる快樂』といふ題で次のやうな意味のことを言つてをります。

『芝居へ行つて最も面白く見物する客はどういふ人々かと俳優に訊いてみると、彼等はそれは普通のお客だと答へます。この理由は捉へるに難かしくありません。かういふ人々には芝居は特別事で鼻につかず、一向に退屈はしませぬ。そして、そのうえ彼等にとつては觀劇は一種の立派な休養です。彼等は勞働の汗に依つて得た金錢の價値をよく知つてゐるやうに、今その金を出して買つた芝居見物の價格をよく辨へてゐます。のみならず、彼等は決して劇通でもなく、女優と特別な關係のあるでもなく、また劇場の内幕は一切知つてゐませぬ。彼等には萬事が眞劍のやうに見えてゐます。で、彼等は純粹な快樂を感ずるのです。然るに、懷疑派は高土間に陣どつて鼻眼鏡を光らせ乍ら有頂天になつてゐる見物を侮るやうに見渡して、『芝居のわからない奴なんか、倶に語るに足りない。』などと言ふのです。而も、この芝居のわからない彼等こそ眞正の生活をしてゐる人で、彼の鼻眼鏡の懷疑派は人工的產物ある無邪氣な快樂に醉ふこの能きぬ憐むべき人なのです。』

光線と空氣とに厭くまで充分であること、能ふ限りの清潔を保つこと、其他の種々なる住宅への要求のうちで、今最も要望されなければならないのは、なんと言つても、住宅總體が聰明に恩慮深く簡易であれと言ふことです。簡易は美と清淨との基底です。生活が純眞であれと希へば希ふ程、私達は私達の周圍の一切を能きるだけ簡易にするやうに心がけなければなりませぬ。

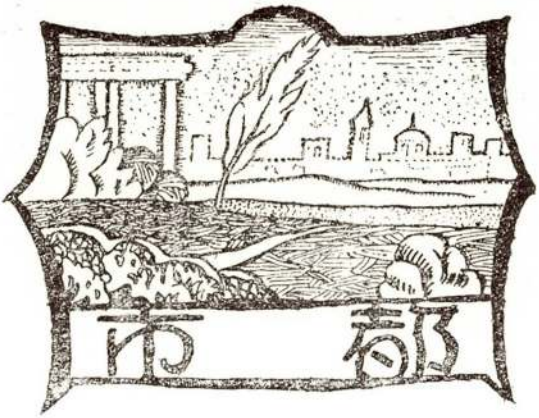
……（一一）……

その死の瞬間まで、自らに與へられたる人生をまことに力づよく一杯に生活し終せたストリンド

ベルヒは、彼の數多い著書のうちのどこかで『音樂と花と子供との生活』を彼の理想の生活であると言ふことを言つてをります。言ふまでもなく、單に生存してゆくためにだけなら、私達は音樂や花や子供を必要としませぬ。相當なパンと寢床とさへあるなら、私達でも牛と同じやうに充分健康で、數十年をとも角も生存してゆくことも能きさうです。牛はモツアルトや『運命シンフォニイ』等を有たないでも充分幸福で、腹一杯の藁を食つてダリヤやハイヤシンスに背を向けて熟睡します。從つて、牛はその暗らく狹い牛小屋奥で、一生涯を充分生きがひのあつたやうに生存し通すのです。

生活してゆくと言ふことは、私達にとつては、牛がその惰勢で生存してゆくと言ふことゝ、決して、同じではありませぬ。生活は、とも角も、私達にとつては自らの個性の不斷の激しい創造であります。個性の日夜の厭くなき創造は、永劫的な火華と散り輝いて、私達を私達自らの藝術をもつてとり卷きます。生活の眞意義が確立さるゝところ、そこは同時に藝術の價値の重さの千古に立證さるべきところです。ほんとうの意味での激しく忠信なる生活者は、また、不斷に優れたる藝術の砂金を掘り當てつゝある人である筈です。生活はこゝで、高い藝術の境へまで必ずひきあげられなければならないわけです。藝術を生み得ない人間は多分人間以下です。大空の美を、音樂の美を、草の花の美を、最後まで理解し享樂し得ない者は遂に、眞珠を嚙みくだいた豚の奴隷です。藝術は生活だからであります。

住宅が單なる小屋や、無意味な道具と金との倉庫であつてならないのは當然です。私達は私達の住宅を、私達自身と同じやうに、生活あり生長あるものとしなければなりませぬ。死んだ過裝飾は住宅を窒息させます。部室の內部の沒情感は住宅を氷らせます。生命が新鮮な情熱をもつて、住宅とその居住宅とを一樣になごやかに包んでしまふやうでなければなりませぬ。住宅の有つ雰圍氣が、香り高い藝術のもつ雰圍氣と同じものであることが望ましいのです。藝術は生命です。生命は生活です。かうして、こゝに私の言ふ住宅問題は、すでにその技巧と組み建てとの問題を離れて、生命と生活との問題へまで來てをります。



大阪市及接續町村に於ける衛生地區の乳兒死亡に及ぼす影響に就ての一考察（一）

楠原祖一郎

本論を構成する諸項目

一、緒言——二大阪市及接續町村における人口密度及一人宛平均所有坪調査——三大阪市及接續町村に於ける生産死亡調査——四大阪市及接續町村に於ける一歳未滿の乳兒死亡調査——五非衛生地區に於けるその狀態に對する私見——六政策論——七結論、

一、緒言

一言にして都市問題と稱するも、是れを別言すれば都市問題とは『都市をして市民の爲の都市たらしむるべく』考究する問題を指稱するもので、畢竟するに其の都市が都市に住する市民の爲めに『住心地よき都市』たらしめんが爲めに研究せらるゝ問題であつて、從つて其の都市問題として派生さるゝ問題が、幾通にも分派し得るけれども、結局は『市民をして住心地よからしむるべき』都計を建設するにあるのである。

併し乍ら、今日都市として數へらるべき幾多の市街があるが、一つとして其の都市の市民をして安住せしむる事の出來得る都市のないのは、畢竟するに一般市民が、都市問題そのものに無知識なるによるのか、又都市當局者が都市改造問題に留

意せざるにもよるのか、その時、その都市に於て種々異別なる原因が存在するであらうけれども、私の考へる所では、都市當局がかなり都市問題に留意しつゝあつても、それを翼賛する市民の代表機關たる市會は是れを重要視せざるか、又は一般市民が自己の代表者たる市會議員を督勵して、間接に都市當局に向つて其の自己の住みつゝある都市の改造に銳意するやう輿論を喚起せざるか、重點は其の何れかにあると思ふのである。又別の意味では本邦の場合に於ては、國家的見地に立つて今日都市の經營は國家的に重要なる事業である。されば都市の經營は法律を以て國家が都市を經營するに利便を得るやう施設を考究しなければならぬ。然し當分の中は國家は其自治體——都市——をして之に當らしめ、國家は之に直接せず補助金を支出して、當事者たるその自治體に行はしむる即ち都市計畫——都市改造——に關聯する都市を國家が指定して、是の指定されたる都市が都市計畫法たる法律に依つて自己の行ふべき事業に對して、諸種の國家的保證を得てゐるが、さて此の本邦の實情が果して都市改造問題に有力なる利便を與へ、又有力なる作用がそれ自身他動し得たと考へてゐるのであらうか。惟ふに内は都市改造を經營する當事者たる市會又は市民に於て、都市政策に無關心であり、都市當局者の都市改造政策に對して具眼的の批評を爲す能はざる狀態であり、外は一國家が、都市改造は國家的に重要なる事業なれども暫時其の直接經營は其の都市に於て有する特殊の事情を參酌して、其の都市の經營者自體が其の事業を執行し、而して國家が之に補助をする位に止め、而かも其の補助たるや事業執行年度に應じて補助さるゝに非ずして、事業資金の金利位の補助を長期に亘つて支出する方法を採るが如き決して都市政策に合致した考へを持つてゐるとは考へられない。而かも大阪市の如き大都市經營は其他の中小都市の經營と相違し幾多の事情が存在するために中小都市に於て留意する必要なき施設までが、大阪市にては留意する必要があるのである。然るに此の重大なる都市の改造經營の主要資金たる公債の發行をさへ、政府は容易に許可しそ

うにない。内務省では國家の事業として執行する事を主眼として、都市計畫施行都市たる事を指定するが、大藏省ではそれを顧念せず、中央政府の有する公債政策に障碍を來すから、地方自治體の必要なる事業に對しても、其の資金たる公債の發行を許可せず、尚それのみならず、此の事業資金の償還財源として有力視せられてゐる土地增加稅徵收に關する勅令を、果して政府は發行する意志があるのか否か、それさへ今の所で不明なる狀態であつて、都市改造と云ふ重大なる使命を負荷してゐる都市就中我大阪市の如きは、內外ともに都市の改造に對して不利益なる關係に、目下の所置かれてゐると見做さなければならぬ。東京方面の大震災當時は何等理解のない人々までが、異口同音に大災の再來を虞れたが、それも只だ虞れると云ふ程度に止まり、何故に虞るべきであるか、如何にすれば此の災害を防止し得るか、如何にすれば速かに此の危險なる生活を安樂ならしめ得るかを考念せず、無理解に畏怖するに止まるのみで、斯くの如き無理解なる市民を有する事は、都市經營の當局者として實に、其の有する政策を實現せんが爲めに大なる支障となるものである。然かもその震災の杞憂も日一日と薄くなり行けば、殘るは只だ其の日送りの逸樂に過ぎず、都市計畫の事業は今如何にして行はれんとしつゝあるか、そうした事に就て何等の考慮をも拂つてゐない。而して都市改造の事業が行はれたとすれば、市民として如何程の福利を增進し得るか、それが行はれず今日の儘で益々亂雜に都市が擴張されたとすれば市民として如何程の悲しむべき損害を享けなければならぬか、又現に如何なる程度に於て此の種の悲しむべき損害を受けてゐるか、此の問題を論ずる事は蓋し都市問題中の主要なる部分を論ずる事となると考へる。そこで私は考へるに、亂雜なる都市の擴張に伴ひて大都市の周圍部も亦實に亂雜に擴張されて行くの傾向から、市民として受け又は受けつゝある損害の裡に於て、何が最も重要なる損害かと云へば、生命の保證を受け得ない損害が最も重要なる損害であると思ふ。即ち後天的の現象によつて、生命に及ぼすべき危險の度が、其

の亂雜に擴張される程度に應じて大であると云ふ事を私は切言したい。その生命に對する危害の裡でも、生命の萌芽とも見るべき乳兒のそれに對して降さるゝ危害は、實に何物にも比すべきものなき程重大なる危害であると考へる。而して其の原因は何れにあるのか。要約して言へば、亂雜なる都市の膨脹に伴ふ不衛生地區の擴張が重大なる原因であるとも言へる。其他家庭的の小なる部分的の原因もあると思ふが、大きな立場から見れば、不自然なる不衛生地區の擴張こそ大きな障害となつて生命の萌芽が發育し得ず、中途にして枯死するのであると考へる。之は私は曾つて——大正九年の一月中旬——大阪朝報紙上に於て私見を連載した事があるが、私は今本誌に於て全く別な立場から本問題を取扱ふて見たいと考へる。

二、大阪市内外接續町村に於ける人口密度及一人當所有坪數調査

凡そ、その都市が比較的市民に餘裕ある生活を營ましめつゝある都市である否か、を檢別する事は困難なる事に屬するが、普通學者間に用ひらるゝ檢別の方法は、その都市の有する富の總量を市住民の數にて除した結果、その高低を見て其の當否を決定するのであるが、然し私見では富の總量のみを以てそれを測定する事は、種々なる點から考へて見て、決してそれは妥當なるものでないと考へる。最も富の總量を知悉して其の程度を決定する方法は非であると云ふのではないが、私は市住民の住居形式を以て是れを測定せんと考へるものである。即ち一人宛所有の平均坪數の廣狹は、克く其の市住民の生活に餘裕あるや否やを判別し得るものであると信ずる。之を換言すれば、其の市住民の活動範圍に餘裕あれば、從つて勞働生産力も增進するが、猫額大の所で活動してもその結果は、前者に比して遙かに遜色あるものであると思はれる。從つて私見では勞働生産力集積の結果たる富の靜的方面——市の有する富の現在の總量——を以て測定の基準とせず、富の動的方面——市住民の發揮する勞働生産力の擴張の程度——を以て測定の基準とすべきであると考へる。從つてかゝる見地に立てば、面積と人口の關係を調べ而

して一方里に於て居住する人口數乃至一人宛所有坪數を見て、各人の勞働生産力發揮の限度を限定する方法を採る事が尤も妥當であると見るのである。

私は此の見地に立つて、大阪市内外の人々が其の密度及び、其の一人當の平均所有坪數を見て、是等の範圍に於ける人々が、果して如何なる程度の餘裕を持ち得つゝあるや否や、此の結果生活形式の高低が測定されるであらうし、其の衛生狀態も判別する事が出來、本論の目的とする乳兒の死亡調査の豫定的論述たらしめ得ると考へるのである。

よつて大阪市及接續町村——將來大阪市域に編入さるべき豫定の下にある町村——の中、其の各市町村が如何なる事情の下に置かれてゐるか、最近の統計は最も有力に物語つてゐると思ふから、之を左に揭ぐる事にする。

人口密度及一人當所有坪數表

順位	町村名	一平方哩平均密度	一人宛所有坪數	順位	町村名	一平方哩平均密度	一人宛所有坪數
一	中津町	●七二、二四一	一、八	一一	生野村	一一、一四一	七〇
二	豐崎町	●七一、九三二	二、一九	一二	榎並村	一一、〇七四	七一
四	大阪市	●五五、五一五	一四、二〇	一三	墨江村	七、一三六	一一〇
三	傳法町	●四九、〇七五	一六、二一	一四	住吉村	五、七八二	一三五
五	鷺洲町	●四八、一五一	一六、三一	一五	神路村	五、七八二	一三五
六	今宮町	●三六、九二六	一六、三三	一六	榎本村	五、二三三	一四九
七	鶴橋町	●三二、七五〇	二一、二四	一七	城北村	四、八六二	一六一
八	安立町	●三一、七五〇	二四、二五	一八	田邊町	四、五五五	一七一
九	中本町	●三〇、三三九	二六、六	一九	小路村	四、〇一九	一九五
一〇	玉出町	●三〇、一二九	二六、二七	二〇	古市村	三、七九九	二〇六
一一	粉濱村	二四、三一六	三三、二八	二一	清水村	三、五二三	二二一
一二	鯰江町	一九、五一一	四〇、二九	二二	北百濟村	三、三一五	二三七
一三	天王寺村	一九、二〇九	四一、三〇	二三	長居村	二、二四三	二四一
一四	平野鄕町	一七、〇九五	四六、二一	二四	依羅村	三、五四四	二〇七
一五	城東村	一七、〇四五	四六、三三	二五	喜連村	二、七四三	二一六
一六	稗島村	一三、四四一	五八、三三	二六	南百濟村	二、一九一	二六〇
一七	津守村	一二、四一八	六九、三四	二七	敷津村	一、一九二	六五九

右の統計によつて見るに大阪市は其の周圍部町

村と合して三十四ヶ町村の中で、人口密度又は一人當所有坪數の上から云つても第三位に位してゐる。就中中津町、傳法町の如き、人口密度の上から云つて實に驚くべき數字に達してゐる事は、統計を按ずるものゝ直ちに看取し得る所である。

凡そ一人の人間が居住する爲めに如何程の坪數を換言すれば、空間を必要とするか、乃至如何程あれば、其の理想と迄行かずとも人間的に必要なるやの限度に就て普通衞生學者の定說によれば、普通一人の身體を圍繞する空間は五〇〇乃至六〇〇立方尺あればよいと云ふ事になつて居るが、我國の室の大きに現せば、天井の高さ八尺又は九尺で、疊數が二坪(四枚)でよいと云ふのであるが、素より之は絕對の標準でなく、地理的關係に於て廣狹の變化がなければならぬのである。而して勿論之の數字は其の最低限度を示したものであつて之より以上であつてこそよいが、之れ以下では最早や人間として住む能はざる程度のものである。

併して是の標準から見れば、中津町、傳法町の如き最惡の土地でさへも一人當の所有平均坪は十一坪卽ち疊數に換算して二十二枚を有する事になるのであるから、其の狀態が、衞生學者の標準に比して極めて良好のやうであるが、而し之を以て現在の非衞生地區たる之等の地區の改造をして急を要せざるものと解する人にあれば、私は實に悲しむものである。何んとなれば、大阪市に於ける或る地區、殊に一昨年の冬以來のペストの流行を以て市民を脅威したる田島町の如き及び其の附近一圓は一人當平均二十六坪を有するのであるが、それでさへ、斯くの如き恐るべき現象を呈したのである。衞生學者の云ふ五〇〇乃至六〇〇立方尺は、周圍の事情が衞生學上不可缺の要件を全部具備する場合に於てこそ首肯し得れ、前記各町村の如き、衞生學上最惡の狀態に於かれてゐる所にあつては、其の一人當の平均所有坪數十一坪たるや極めて心細い事と云はねばならぬのである。殊に之は統計の數字であつて實際は之より惡い狀態に置かれてゐるのであるから、その現狀たるや實に思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

又普通衞生學者の立場から見て、一エーカーに

つき居住すべき人員の割合は二十二人以上であらねばならぬと云つてゐるが、然し諸種の事情から見て、學者の云ふが如く實現しない場合もあるが實際家の立場から云へば、一エーカーにつき四十人の居住狀態を以て現下の事情に應じて正當なりとする立場から見れば、我大阪市の如き九十八人も居住し、約二倍強である。然し巴里の一四八、伯林の一三三、東京の一一一に比すれば成績が稍々可良の方であると見なければならぬ。

前揭出統計によれば一平方哩に居住する平均人員三萬八以上の町村は十ケ市町村で、此の市町村は何れも一人當平均所有坪數は十一坪乃至二十六坪を所有するに過ぎない。

現下の都市形成の必然性から見て、一人當の所有坪數の百坪以上なる事を望むは些か無暴であるが、少くとも住宅地區に於ては三〇坪乃至五〇坪を設立する事を以て最も望ましき狀態であると考へる、何れ私見は纏めて政策論に讓つて、本項に對する論評は之位にして止めて置く事とする。

三、大阪市内外接續町村に於ける生産死亡調査

次で述べんとする問題は、大阪市及び其の内外に於ける生産と死亡の狀態である。凡そ生産兒凡べてが洩れなく成長し途中にて病死する事なき場合があると想像すれば如何なる社會國家と雖も、それは忽ちにして人口問題に就き國家的に重要なる危機に迫られなければならぬであらうか、人口過剩の自然的調節機能が、絶へず吾々の上に作用するを以て、一ケ年に生産さるゝ若干の乳兒中勘なからざる數に於て死亡するのみならず、其他のものに於ても諸種の障碍によつて死に逝くものゝ數は可成の數に達するが、是れは何れも如何なる狀態に於ても、必ず其の狀態に達すべく何等かの原因があるのである。

私は此の原因なるものに對して種々なる見方がある中から、特に社會衛生の上から考察する。即ち社會衛生の上から見て、その原因を探究する事が最も妥當であると考へるものである。普通死亡するに先ち必ず疾病の伴ふものとされてゐるが、その疾病なるものは社會衛生上考察すべきもので

個人的衛生から考察すべきものでないと考へるから、今私が大阪市内外の生産死亡調査表を掲出するに際しても、その意味から掲出するので、人口密度の上から見て、其の或る地區は如何なる結果を統計の上に現示してゐるかを知悉せんが爲めである。

今大正七年より大正十一年に至る五ヶ年間の平均數を示せば大體左表の如くである。

此の統計によつて見ても、人口密度の高き地區は特異なる影響を受けてゐる事が知了されるのである。

自大正七年至大正十一年五ヶ年間平均數

種別 / 市町村	生産		死亡	
	實數	千分比	實數	千分比
大阪市	三五、七七〇、四	二四、九九	三一、九五一、〇	三三、三
傳法町	三六九、〇	三二、四〇	三四四、六	三〇、七二
豐崎町	二、一六七、四	二四、九一	一、六八七、二	三三、四三
今宮町	一、八九〇、二	四三、八四	一、六四〇、二	三八、〇四
玉出町	五六一、二	三六、四九	四三七、四	二八、四四
粉濱村	二九九、六	三六、一七	二七、四六	
津守村	二六六、八	三八、五三	三五、三八	
鷺洲町	一、四八七、六	三七、四一	一、二六一、六	二八、七二
中津町	七四六、六	三三、二〇	五五五、八	二四、七二
稗島村	三二三、二	三三、五四	三四三、二	三五、六二
中本町	一、〇三四、四	三四、五七	九六、五	三二、二五
鯰江町	六三一、〇	四〇、〇〇	四四三、二	二八、〇三
板並町	三二一、六	三七、〇四	一〇一、二	一六、九二
平野鄕町	四二四、四	二九、一七	四八、二	二九、四三
鶴橋町	一、六〇六、六	四七、九一	一、〇五七、六	三一、五四
田邊町	二〇二、八	二八、九七	一三二、八	二五、五二
安立町	一八〇、四	三九、四三	一五六、六	三四、二三
天王寺村	一、二三六、〇	三六、二三	八八一、四	二八、四〇
生野村	二六一、〇	二八、一九	三八九、九	五七、〇三
神路村	一九四、六	三七、八五	一九三、〇	三七、五四
城東村	四三一、六	三四、三五	三一六、〇	二五、一五
小路村	一四七、四	三九、五三 ×	七三、八	一九、七九
榎本村	一九九、二	三〇、四〇	二一一、六	三二、三〇
城北村	二六四、二	三六、六三	二三九、四	三〇、八六
古市村	一六四、六	四二、一八	一一七、〇	三〇、四三

清水村	一〇〇、八	四二、〇八	×	六七、八	二七、六三
喜連村	×	六六、〇	×	五一、〇	二八、〇三
北百濟村	×	九九、八	×	七三、六	二四、九四
南百濟村	×	六六、八	×	五一、八	五、九八
依羅村	一五一、八	四四、〇八	×	八八、〇	二五、三九
長居村	×	九〇、八	×	七九、八	三一、〇五
墨江村	三四五、四	三七、一三	三二〇、〇	三四、三九	
住吉村	一八八、〇	三三、七七	一八二、六	三一、七六	
敷津村	八八、〇	三五、九一	×	七三、四	二九、九五

● 印は生産及死亡各率の特に高き町村

× 印は生産及死亡各率の特に低き町村

右に掲示せる如く生産の方では五ケ年間に於ける一ケ年平均數は大阪市の三萬五千七百七十人餘を筆頭に、豊崎町の二千百六十七人餘之に次ぎ、今宮町、鷺洲町、中本町、鶴橋町、天王寺村等の各町村は何れも一千人以上を超過してゐる。而して死亡數の方に就て見るに、大阪市の三萬一千九百五十一人餘を筆頭に、豊崎町の一千六百八十七人餘之に次ぎ、今宮町、鷺洲町、鶴橋町の各町村は何れも一千人以上の死亡數を示してゐる事が判る。尙亦×印によつて示せる生産及死亡の各率の最低の町村に就て見ても、數字を辿れば直ちに判明する事であるが、前記最高率の町村と比較して見れば、如何に相互の間に衞生上の差異があるか敢へて茲に說明を下すまでもない事であらうと思ふのである。

而して之れだけの事は以上の統計を判斷した結果斷言し得ると思ふ。卽ち大阪市は接續各町村と事情を異によるから同じ程度に論ずる事は出來ぬが其他の各町村の中で豊崎町、今宮町、鶴橋町、鷺洲町等の如き人口密度も極めて高い地區であるが、生産率も他より遙かに高く、又死亡率も高いと云ふのは、如何に是等の地區は社會衞生の立場から考へて見て、考慮を要すべき衞生狀態の下に置かれてゐるかゞ略推知され得る。從つて是等の地區內に居住してゐる人々は克く生み克く死亡せしむる人々と云ふ事が出來る。其他之に達する爲めに表面に現し得ない事情もあらうとは考へられるが、然し大體の傾向と云ふ上から見れば、前記

の意味の事が斷言し得らるゝと私は考へるのである。而して私はかく論ずる事によつて、是の推論の方法が妥當でないと論ずる人があるかも知れないが、それは一平方哩平均密度七萬若しくは三萬と云ふ莫大なる人口の裡に居住する地區の死亡率と、殆んど田園の中に點在する接續町村の、僅々人口密度一平方哩に就て二三千人から五六千人位の地區の死亡率とを同じ方法の下に論ずるのは妥當でないと見られるかも知れぬが、私は決して方法的に推論を誤まつてゐるものでないと信ずる。何んとなれば、それは方法的に非衛生地區と可良なる地區との對照であり、その對照の結果相互の隔差を發見するのであり、然してその隔差の發見によつて必然的にそれに對する政策論が生れて來るからである。

さて以上の大體論に依つて、接續各町村に於ては過去五ケ年間に於ける一ケ年平均生産數及死亡數並びに各々の率を知悉する事を得た。次で乳兒に對して如何なる影響が及ぼされつゝあるかを次に論ずることにする。

四、大阪市及接續町村に於ける一歳未滿の乳兒の死亡調査

大都市に於ける乳兒の死亡は、都市社會問題中極めて重要なる意義を有する研究題目であり、隨つて又都市社會施設の上にも、乳兒に對する保護施設が必要缺くべからざるものである。

凡そ天命の盡きんとする所、如何なる手當を講じても無爲なるべきは、幾多の實例によつて肯定さるゝ所であるが、而し死に逝くもの全部が天命の盡きたる結果としてゞあるとは考へられない。生活に餘裕のある家庭に生れ不幸にして疾病の犯すところとなつても、その家庭では意を盡して療養の途もあらうが、それで死に逝くものは或は死に際せる運命によつて、かくなされたるものとも云へるであらう。然るに輕易なる疾病に犯されたとしても、それに對して速かに必要なる手當を加へ得る途なき家庭に生れたる乳兒は遂ひに救はるべき運命にあり乍ら、救はれずして死に逝く。吾々は眞に其の研究の對照とし、施設の客體と見るのはかゝる家庭に生れたる乳兒を意味するのであ

る。而かも此の對照となるべき家庭の集中する所の非衞生地區に於て特に其の母は多く生み多く死せしむる傾向があるのは、前揭の統計の克く示してゐる所である。

此の問題は今日の廣い意味にて用ひられてゐる社會問題の中、社會組織に深く根ざした問題ではないのであるから、只だ家庭の父たり母たるもの〻自覺さへあれば、都市の社會政策當局の留意と相俟ちて、立派に解決し得る問題である。然るに一年は一年此の問題が更らに考慮を要すべき方面に開展して行く傾向の著しきは、家庭の罪か、又都市當局の罪か、原因は私見ではその兩者にあると思ふが、實に悲しむべきものである。

次に乳兒死亡の實數と、その百分比を揭出し、非衞生地區に於ける死亡數の跡を辿つて見たいと思ふ。

一歲未滿の乳兒死亡調査表

市町村	乳兒死亡數	百分比	市町村	乳兒死亡數	百分比
大阪市	六、七二一、〇	二一、〇四	中津町	八一、八	一四、七二
傳法町	九九、〇	二八、七三	稗島村	七八、六	二三、四八
豊崎町	四〇一、〇	二三、七七	中本町	二四八、二	二五、七二
今宮町	四八三、八	二九、五〇	鯰江町	一六九、八	二六、四〇
玉出町	一一一、八	二五、五六	榎並町	二三、四	二三、一三
粉濱村	四八、二	二一、二〇	平野鄉町	九五、二	二三、二三
津守村	六〇、六	二三、四五	鶴橋町	三二四、六	三〇、六九
鷺洲町	二三九、〇	二一、二一	田邊町	三七、六	二八、三二
安立町	四五、二	二八、八六	清水村	二三、六	二四、八一
天王寺村	二〇、四	二三、八七	喜連村	二三、〇	二三、五三
生野村	六七、〇	二七、一九	北百濟村	一六、六	二二、五五
神路村	五一、〇	二六、四三	南百濟村	一一、二	二一、二一
城東村	八七、八	二七、七八	依羅村	二九、四	二三、四二
小路村	二〇、〇	二七、一〇	長居村	二〇、六	二五、八一
榎本村	六〇、二	二八、四四	墨江村	九二、六	二八、九四
城北村	五〇、六	二三、三九	住吉村	三五、六	一九、五〇
古市村	三五、〇	九、九一	敷津村	二一、六	二五、八〇

●印は死亡率の高き町村

×印は死亡率の低き町村

右に示す統計に據つて思ふに、『人口密度の高き地區は從つて其の乳兒の死亡率も高し』と云ふ普遍率には合致して居らぬが、今宮町、鶴橋町、鯰江町、傳法町の如きは此の普遍率に合致して居ると見ることが出來る。然し茲に考慮を要すべきは他の大阪市域に接する東部の各町村中、人口密度も少なく、一人當平均所有坪數も西北部の各町村より遙かに高き町村と見らるゝ神路村、城東村、小路村、榎本村の如き、乳兒死亡率の高きは、其の原因の何れに伏在するや。

之は惟ふに、西部に大阪市と云ふ一大不淨地域を有し、加之土地は比較的低濕であり、絶へず西風によつて工場地より煤煙の飛來を受け、從つて空氣分子中に不純なる分子を發見し易きを以て、この影響を受けつゝあるものと私は考へる。乳兒の死亡率を高むる原因中、土地の低濕なると、空氣分子に不純なる混雜物を含むものをも其の大なる原因と見得るは、衛生學者の指摘する所である又市の東南部たる、玉出町、田邊町、墨江村、長居村の如きは、やはり東部諸町村と比較的相似たる原因によるものと見得るが、東南部諸町村の水質は不良であるが爲めであることも其の原因の一と見なければならぬ。

さて數字上から說明を加ふると、死亡率の一等高きは鶴橋町の三〇、六九にして、古市村の二九、九一、今宮町の二九、五〇、墨江村の二八、九四、安立町の二八、八六、榎本村の二八、四四等の順位にあり、大阪市の如きは比較的低位にあるのである。然し之は過去五ケ年の一ケ年平均數であるから、其の一年一年の實跡を辿れば、今少し複雜なる數字が現れるであらうと豫期される。兎に角何れの町村に於ても、衛生狀態の良否を不問、年を趁ふて益々是の悲しむべき數字の擴張は餘程考へさせらるゝものと思ふ。前言に少し述べたる如く、生れたる乳兒の全體が、其の數のまゝで發育するが如き事は人間の到底なし得る所でなく其自然的暴威の襲來によつて、脆くも斃るゝのは自然の數であるとしても、生を此世に受けたる以上は、萬難を排して此の生命の萠芽に荒き風をあてざる樣努力するのが、家庭としての義務であり、之を援助する所に社會事業の尊さがあるのである。（續）



虚無・御坊から明日庵へ

——續埃及遊記（九）——

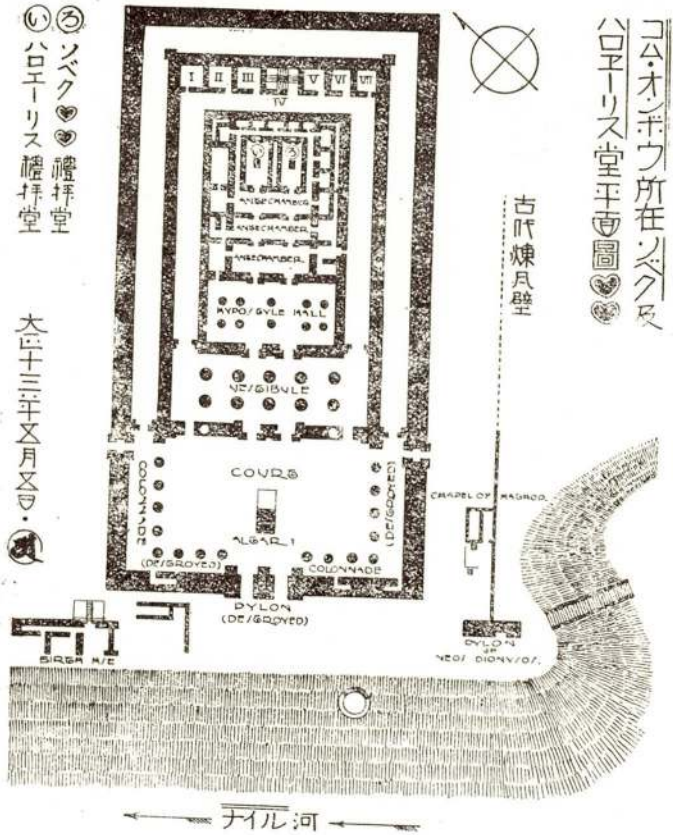
工學博士　天沼俊一

十月三十一日　（火曜・好晴）

昨日午後室内で無爲に暮したのを取返すのと、此の氣持のいゝ宿の附近を少し散歩してみやうといふのと、二つの理由から今朝は早起してそこいらを歩いてみた。七時半に朝食をすまし、八時二十分に宿の直ぐ前から所謂Trollyへのつた、相客はなくムスタファとたつた二人きりだつた。

トロリーとは元來工夫等が物を運搬する爲めに線路の上を轉がす四輪車である、と許り子供のうちから思ひ込んでゐたのに、亞米利加では夫れが大きな電車であつたので頗る面喰つた事があつたが、こゝのは一頭挽の馬車鐵道であつた。丁度明治三十年の頃新橋品川間に出來たのと同じく小規模で、夫れの座席が八つてあつたこと記憶してゐ

るが、今日のはたつた四つであつた、そして途中乗降の客があるではなし、發車後停車するとなく約二十五分かゝつて御坊が丘の終點に達するを得た。



いふ迄もなく此所に御坊堂が建つてゐる。宿を出ると堂は遙に見ゆるが、側へ來てみると河に面す沙丘上に位置し、風景絶佳、河畔の諸堂中形勝の地を占むると當堂の右に出るものなし、だから我國なら差向き模範美女なる辨才天を祭るべきに、埃及では鷹頭人身の Haroēris と鱷頭人身の Sebek とを祭つたのである。而も此の兩神が我出雲國美保關に鎭座ましませる國幣中社美保神社本殿の樣に相殿造の神殿に永い年月中よく暮してゐたのであつた。

神樣の御座所は石壁一つで直に隣合せになつてゐる、其鷹と鱷とは當國の神話によると仇同士であるのも面白い。カーナックのアモン堂は其大さに於て、エドフウのホーラス堂は完全に保存せられた

る點に於いて、共に甚だ有名であるが、ナイルに沿へる御坊が丘に西南面して建てられた相殿造は例へ隨分ひどく壞れてゐるにせよ、類例のないところでは恐らく天下一だらう。

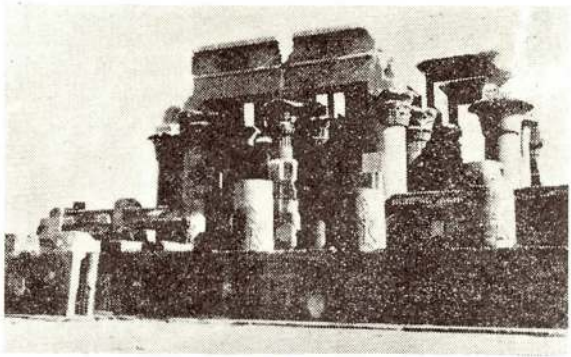
相殿造は早くいふと長屋である。長屋ではあるが洵に堂々たるもので、こんな立派なところに仕んで居られた神樣は、朝夕河を上下する帆船を眺めながら、至極平和に其日其日を送られたのであらう、羨しいお住居と申上奉るよりほかない。遠慮のないところ景色の大きい丈け確かに美保神社よりよろしい。ところが有爲轉變は世の常で、いつか神社は忘れられ、邸もひどく破損した許りでなく、大部分土砂に埋まつて了つてゐたのを、十九世紀の末葉にすつかり堀出して大修理をした。そして列柱室の後側の壁の外側には煉瓦の控柱を立てゝ崩壞を防いでゐる有樣である、堂壁の一部には左の修理略記が刻まれた大理石板を嵌め込んである。



Nile 河畔御坊堂全景

TEMPLE D'OMBOS
DEBLAYE ET REPARE
PAR
LE SERVICE DES ANTIQUITES
DE L'EGYPTE
DE XV JANVIER AU XXV 'AVRIL
MDCCCXCIII

堂は其平面圖で明らかであらうが、入口から奥迄で別々になつてゐて、各室共入口は必ず二つづゝ付いてゐる。先ず正面からいふと入口の大門にも二つあつたのだから、門其物が完全に殘つてゐたら定めて面白いだらうと思ふ。大門を入れば型の如く中庭があるが、此の中庭から玄關への入口



御坊堂正面

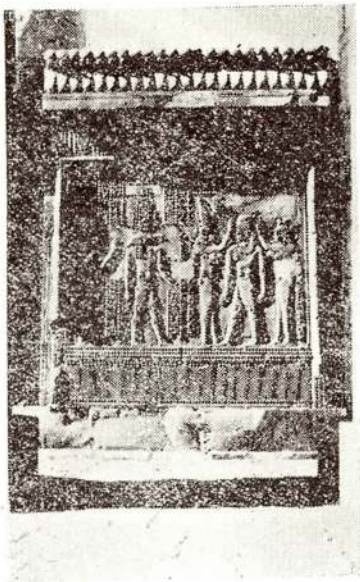
には柱が五本―今完全に三本――建つてゐるから、丁度中央に柱があり其兩側から入る様になつてゐる。だから物は全然異るが、何となしに法隆寺中門の様な佛がある。

少しく脇道にそれるが、法隆寺中門は何故四間三面二戸にしたが、側面三間は恰好上さうしたとしても、四間二戸はどうしたものか、御坊堂と中門とを一所にする次第ではないが、此所に祭れるハロエーリスとセベクとは其間に輕重はない、だから同じ様に二つ入口を作つた事いふ迄もあるまい。一方寺で最重要な建物は金堂と塔婆であること勿論である。此の金堂と塔婆とを東西に並べて建てた以上、入口を二つにして東のは金堂へ、西のは塔婆へのつもりで、あの様な意匠の門を建てたのではあるまいか、と考へてはいけないだらうか知らん。何分他に遺物がないのだから、そして書いたものもないのだから、確かなことは到底判りかねる。

玄關内には十本の柱がたつてゐて、其何れもが開花又は棕梠葉柱頭で、壁面の彫刻も亦頗る美事である。圖に示せるは向て右の入口の右の裏側ので、中央のはPtolemy XIII即ち Neos Dionysosで、其左右は上埃及と下埃及の女神で、此王を祝福してゐるところである。どうして夫れが判るかといふと、女神の戴ける冠のうち、圓錐形の様で末端小球形に終つてゐるのは、上埃及の白冠で、前低く後ろ高くして尖り、其中部より斜上に末端螺旋形に卷縮せる棒が出てゐるのが、即下埃及の赤冠である。だから此場合は向て左が上で右が下そして御大は復合冠（Double Crowu of Upper and Lower Egy pt）を戴いてゐるのである。其左

は鱷神のSebekで、次はHathorであるが、最後の女神丈けは眞黒に蔭になつてゐてよく判らぬ。

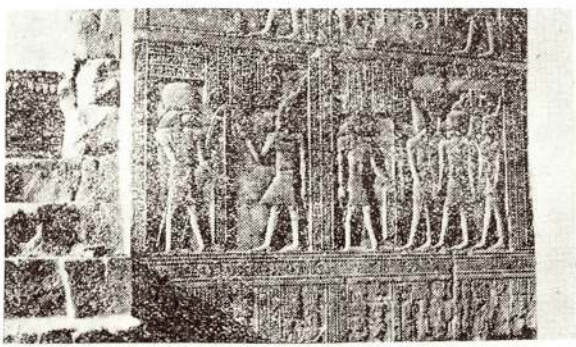
も一つの浮彫は列柱室へ入つた直ぐ右手の裏側のもので、案内記に說明がないから間違ふかも知れぬが、左端は頭上に日輪(Solar Disk)を戴ける鷹神で、夫れから一つ隔て右は鱷神であること明らかであらう、即ち此の二神がOmbosの主神であつたのだが、後に小亞細亞から所謂西域地方を



御坊堂壁面彫刻(其一)
右端はトレミー十三世を上埃及下埃及の女神が祝福せる處、其次は鱷頭人身のセベッ神、左端は(蔭になつてゐるが)女神ハソール

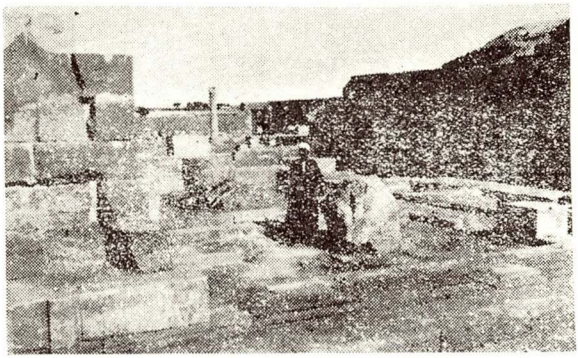
經て支那に入る間に、漸く進化(?)して鷄と猪となり、酉の亥として方角の神になりすまし、西方と北北西に納まつたと考へるのは少しく亂暴かも知れぬと思つてゐる。

列柱室の後ろには前室が三つあり、其第三室の後壁に入口が二つあつて、右即ち北側のは鱷左即ち南側は鷹の神殿であるが、其床の中央に黑花崗岩の臺座があつて、昔しは其上に神體が安置してあつたのである。插圖にある黑衣の人物は鱷神安置の臺座に沿ひて立つてゐるのである。



御坊堂壁面彫刻(其二)
左端は鱷頭人身のSebekで共にOmbosの主神、一つ置いて右は鷹頭人身のHaroeris,

歸りは待たしておいて馬車鐵道で、往きと同じくたゞ一走り、晝食をすませて午後一時アスアン行の汽車へのつたが、相不變大變な砂で何とも仕方がなかつた。コム・オンボウからアスアン迄二十六哩、二等運賃二十四ピアスタア半、此間沿道村落の土民の泥土家屋の外觀は甚だ面白かつたが、寫眞は到底撮れなかつたから、大急ぎで汽車の窓から寫生したといふよりは寧ろ記憶であとから描いた――のを少し掲げておく。汽車は二時半に着すべきのが一時間延着した、即ち二時半に漸くアスアン驛の歩廊に立つ事が出來た。

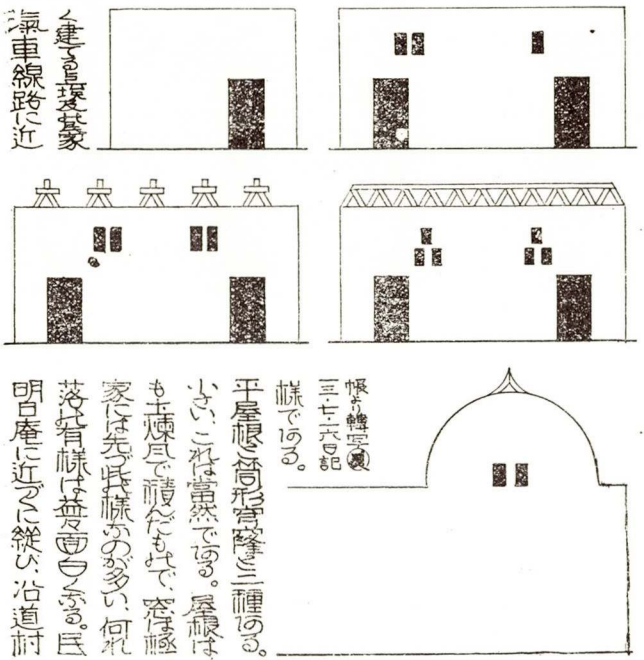


御坊堂內陣

私は豫てルクソルから、此地のSt. James Hotelといふのへ一室保留の手紙を出しておいたから、大概大丈夫であらうと思つて此宿へ行つたところ宿屋は漸く三日前から營業を開始した許りで、客は一人もなく、階上の角の往來を隔てゝ河に面せる第一號室へ入つた、こんな好都合な事は再びあるまい。一寸念の爲に記しておくが、埃及では大概の旅館季節以外客が少なく、從て收支償はざるが故に休業して了ふのである、だから休まぬ家は特に『年中無休』と斷つてゐる。

暫く休憩してから河畔を下流の方向に散歩をした、こゝは片側町で兩側に巾廣き人道をとり、街路樹としてはアカシアが植えてある、町の建物は何れも堂々たるもので、學校や官公衙らしく、人車道共すつかりPaveしてあるから、洵に立派で且つ綺麗である、だから亞細亞の東端に位し、花彩島と稱せられ、近頃一等國のビリッコケに昇進したといふ日本國の何れの大都市の目貫の場所より遙に〳〵氣持がよろしい。

であるから、いゝ氣になつていつ迄も眞直に歩いた。其實汽車の窓からみておいた回教徒の墓地へ行つてみやうといふ下心であつたのである。初めからそんな事を言つたが最後、双六の骰子以上の案内人は直に否決して了のである。やがて案同人はもう歸らうといひ出した、理由としてはどこ迄歩いても大概こんなものだ、而も一歩一歩場末に近くなるといふので、如何にも尤も千萬の理由である。そこで私は先刻汽車の窓から見えた墓地はもう此邊ではないか、こゝ迄來たのだからもう近いだらうと言つたところ彼は意外に大人しくそれなら此の邊から右に曲ると丁度よからうと言つたから、さうしたらそこで沙漠は。遠方に村が見え、近景に椶梠樹等が生へてゐて、大分に熱帶氣分が出てゐる。



彼は次の様に説明した。此村は先年の世界大戰爭迄は頗る繁昌してゐたが、村人は其後或は開路市へ或は蘇丹地方へ思ひ思ひに移住し、今は一人も住民がゐない、と。

埃及に於ける田舎の村の家々は、ナイルの泥土煉瓦で築造したものであることは既に屢々記したのである。そして其建つてゐる地は

沙つぱらである、全然想像であるが、多分地價なんか隨分安いのだらう、或はたゞかも知れぬ、そこへもつて來て建築材料たる泥土煉瓦は、河の土を採つて來て四角に固めて並べておけば直に乾いて所要の煉瓦がいくらでも出來る。だから勞力さへ惜まねばいくらでもたゞで得られる、だから勝手に自分のすきなところの沙つぱらを堀り、自分でこしらへたSun dried Mud Brickを積みさへすればいくらでも家は出來る、いはゞ子供の土いぢりを少しく大規模にやる位のことである。だから殆んど只々で家が建つ、だから一村全部を沙の中へ『奥津棄家』にしたつて、たゞ勞力丈けの損で金錢上の損害なんかちつとも無いのだらう。まさか、かう簡單でもあるまいが、大概似た所だらう。



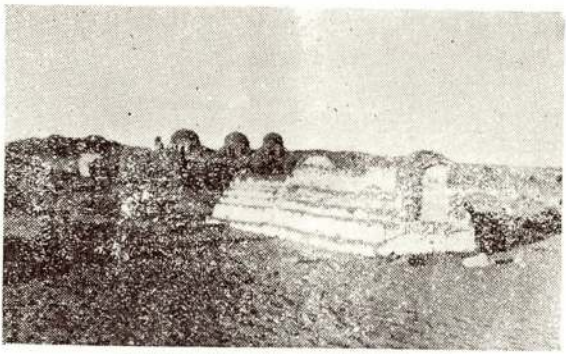
明日庵近郊の廢村　左前方に生ぜるは Dom 樹

夫れから希望の墓をみた。面倒だから案内人にはこの邊で待つていろといつて、附近の部落に待たせ、私一人墓地に進んだ。此時は最早夕方で、大陽は大分地平線に近づいてゐたから、割合に弱い光線が平たく特殊の建物にあたつて、一種の淋しい東洋氣分を感じたのであつた。

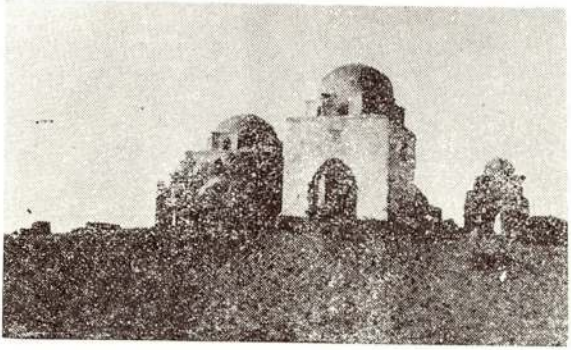
此墓には二種の墓があつた。其一は平面が細長い方形で、立面は段形をなし、端邊は兩方共切妻形に終れるもので、他は尖拱型の入口を有せる方形の構造物で、上に頂塔を有せる圓蓋を頂き、墓標は床の中央にありて、其形前者の如し、だからこの方は先づ廟と言へる。この二つは挿圖に出しておいたから、形は夫れで知られ度い。尙後者の頂塔は其平面內擺線の如き輪廓を有し、而も夫れが異常に發達して上の圓蓋よりずつと大きい。そして其頂塔に小窓があいてゐるのは、規模に於いては比較にならぬが、東羅馬建築を直に思ひ起

させるもので、東洋氣分が出てゐて大に工合がよかつた。

㈢墓は此の位で割愛し、元のところへ歸つてみた晩過る、だから其申出に賛成して見に行く事にした、どうせいぬかはなのだから、いくら見たつて少しも損はない。



（一其）墓數回るけ於に郊近庵日明



（二其）同

道路の巾は開路市エル・アザア寺附近の夫れより大分に廣いが、こちらの方が遙に暴夜氣分が出てゐる。こゝこそ一層『暴夜物語』の挿繪其まゝであつた。併し開路市のほど賣りつけ樣とも せず案内人も亦買へとも言はず至極無事平凡に通り抜けて六時歸宿をした。

今夜泊り客は私一人と見え、食堂は誰れも居ず淋しかつた。夫れでも私一人に對してヌビアの給仕人が二人つきりであつた。室内裝飾が薩張駄目だつたから問題にならなかつだが、これで少なくとも窓の頭が馬蹄形で壁紙がサラケン式だと大分に工合がよかつたらうと思つた。兎に角こんなのは正に開闢以來の出來事であつた。

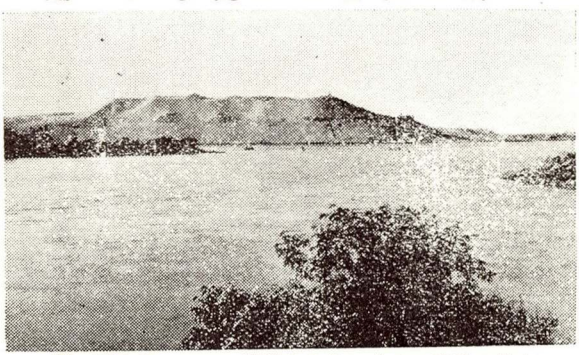
夜はいゝ月夜であつた。夜になつてから川に面

ら、案の如く彼は麻痺(しびれ)をきらしてゐた。そしてもう直にバザーをみて歸宿しやうといつた。もう此時は大分夕方になつてゐたから、寫眞をとるには

して窓から非常に冷しい風が入つて來た。窓に近い寢臺に轉がつてゐると晝間の暑熱を忘れる。埃及へ來て以來初めてのいゝ心持の靜かな夜であつた。それに名物の蚊は一疋も來ないから尚更申分はなかつた。少し奮發して玄關上の露臺へ椅子を出してそこで涼んでゐると、前にエレフアンタイン島を隔てゝ古代窟墓のある丘を後方に望み、其頂上にたてるSheikh's Tombは月光を浴びて青白く人の子一人通らず、エレフアンタイン島には燈火一つ見ゑず、其繁れる森は青黑く、泥を含んで音をもたてず大樣に緩く流れてゐるナイルの河は如何にも阿弗利加第一と頷かれる。天晴れ雲なく皓々たる明月は天に懸り、四邊が靜まり返つてゐたこの大きい景色は、未だに忘れる事が出來ぬ程深い引象を殘したのであつた。

私は、もう十年餘も前のことであつたが、所用あつてある月明の夜、奈良市の西郊なる唐招提寺を訪ふたことがあつた。境内に入つて諸堂をみたとき、新田部親王邸の建つてゐた頃より、鑑眞の來朝、招提寺の建立、其沿革が順々に頭の內をかけ巡り、暫く芒乎と立つて古を偲び、一種異樣の感に打たれた事があつた。ある年、法隆寺の慈恩會を拜觀し、大講堂內に一夜を徹した時も、同じ樣にいゝ月夜であつたが、心なき雇人共が大聲を出して喚いたり、夷狄の服裝をした人が橫行したりしてゐたから、夫れ等が邪魔になつて此時は遺憾ながら左程時代逆行が出來なかつた。

印度で佛蹟巡拜をした序に、タージ、マハル見物の爲アグラへ滯在した時も、丁度滿月の前後で連日連夜の好晴であつた。案內記にも月夜の遊覽を勸めてあるし、宿の番頭や食



明の庵の聖ゼームス館階上よりの眺め、遠景に見ゆNile 西岸の丘は其中腹に古代窟墓がある、左方はElephantine 嶋の一部、近景に繁茂せるはAcacia樹

堂の給仕頭も連りに此の好機を失せぬ様、一度月下のタージを思ふ存分觀賞し給へといつたが、猫も杓子も行くのでいや氣がさして止めて了つた。どうも時代逆行をやるには私はいつもたつた一人でなくては思ふ様に行かぬ。

處が幸な事には、今夜は全く總ての條件が滿たされてゐた。だから心中幾度か自身の幸福を感謝しつつも此の光景に對し思ひを埃及六千年の歴史に馳せ、いゝ氣持になり心中何の不平も心配もなくなつて了ふ事が出來た。

突然ムスタファが出て來て、もうお休みなさい明朝また早いからといふ、時計をみたらいつか十時が過がてゐた。今餘りいゝ景色だからみてゐたのだといつたら　彼は今に遊覽季節になると、月夜の晩は滯在の旅客が思ひ思ひに船を浮べて川を上下する、だからこの前等は中々賑かです、といつた。さうすると私は僅に二週間かそこいらの事で邪魔物のない靜かな淨らかな夜景を心ゆく迄に觀賞することが出來たのであつた。これが幸運でなくてなんであらう（大正十三年六月十四日稿了）

入堂の法衣透く日や萩の花

弘仁期の美術『室生寺の研究』

曼荼羅社同人　池田谷久吉

緒言

欽明天皇十三年我國に佛敎渡來以來、さしもに榮えた南都六宗も弘仁期に際して新に唐より天臺眞言の二宗傳來し弘法と傳敎は各々、紀伊高野山に近江の比叡山に據して修業弘通に及んで稍凋落衰頽の機運に遇し我が建築の方面に於ても平地から山岳へと推移し其の配置も在來のシンメトリーを打破して臨地適應の自由なものとなり其の代表的なものとして金剛峰寺・延曆寺、仁和寺、觀心寺、室生寺等が建てられた。

然し當時の遺物は其の後數度の災厄によつて滅亡され現今殆んど何處にも其の姿を留めない事は惜しむべき事である。

當代の特徵の概說としては前代天平の豐麗にして明るい氣分を失つたに代へ極めて陰鬱な森嚴にして莊重なものとなり弘仁期は美術史の上に天平から藤原への過渡としてたしかに意義ある一區畫を描いたといつてもよい。當時の建造物として現存せるものは僅に、室生寺の金堂と五重塔あるのみにして當代の代表物として珍重すべきものである。

位置

奈良縣宇陀郡室生村にあり、牡丹を以つて有名な初瀨の觀音から東方四里、室生山の麓にて四方山に圍まれ背後は山間の森林中にあり前面は溪流に望んでゐる。

室生山はもと噴火山であつて今も尙龍穴といふ噴火孔を殘してゐる。此の山内の岩窟を凡て九穴と稱し前を流るゝ溪流の淵池を八海と名づけてゐる。

沿革

人皇四十代、天武天皇白鳳九年（紀元一三四〇年）役の小角の開基になり、次いで四十九代光仁天皇寶龜年間奈良興福寺の賢憬僧都によつて伽藍建立、大いに寺運隆盛に赴いたが其後漸く衰微したのを五十三代淳和天皇の天長元年（紀元一四八四年）幕春弘法大師女人の爲に堂塔を建立再興に盡したのが現存のもので目下新義眞言宗豊山派に屬して俗に『女人高野』の稱がある。

建造物の配置と其の遺物

前代即ち奈良朝時代の建築に比して大いに伽藍の配置が變化し從來の都市佛教に對する山岳佛教の興隆は伽藍の配置に於て在來の美しき嚴正なる『シンメトリー』を打破して山間に適應すべき臨地自由の形を取る樣になつた。



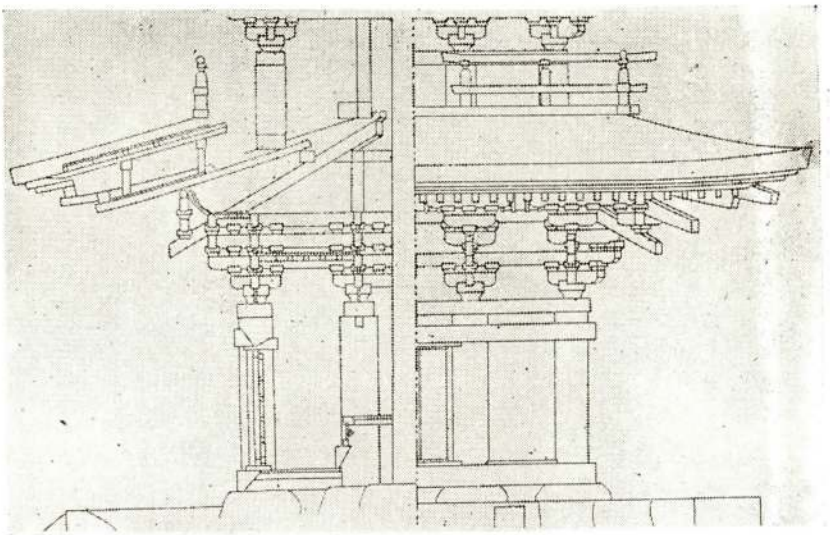
五重塔

先づ寺域の前を流るゝ溪流に架けられた橋を渡ると僧房があり少し上ると彌勒堂がある。その傍を少しまた上れば金堂があり、金堂の後方の段上には灌頂堂がある。それからもかなり上ると五重塔があり、尙も八丁程山を登ると奥の院、即ち開山堂（御影堂）がある。

五重塔、金堂と共に弘仁初期唯一の遺物で天長元年の創立である。

方三間の五重塔で地上直に低き石壇上に建ち自然石の礎石を用ひ、全體の形狀は頗る少さきものである。即ち初層は八尺〇八分、塔身の長さ（柱石より露盤の下迄）三十八尺〇九分、相輪の長さ十五尺〇四分、合計五十三尺一寸三分といふ非常に少さいために俗に『弘法の一夜造り塔』と云つてゐる。

組物、三手先にて肘木長く奈良の唐招提寺金堂のものと類似してゐる。構造としては至つて幼稚



五重塔下層組物詳細圖

なもので一般にふくみ極めて小さく敷面大にして繰形は稍剛健の感がある。殊に隅角には鬼斗もなく普通の巻斗を隅に置き（薬師寺東塔と同一手法）、大斗低く、巻斗の喰込少なく背が高いので柱に比較して組物全體が高すぎ從つて塔全體の高さは高すぎる樣な感がするが、屋根勾配は頗る緩やかに出來てゐるのみならず、軒の出が深いので全體としては釣合もあり安定をよく保つてゐる。

屋根は檜皮葺もこれが爲に一層の輕快を加へ二層以上にはかなり背の高い勾欄を廻らしてゐるが當初の樣式を殘してゐるものは僅かに五重のみで即ち地覆と平桁との間に横に二本の連子を入れてゐるのが注意すべきだと思ふ。五重以下各層のものは後世の修補を經てゐるので勿論當初のものではないらしい。

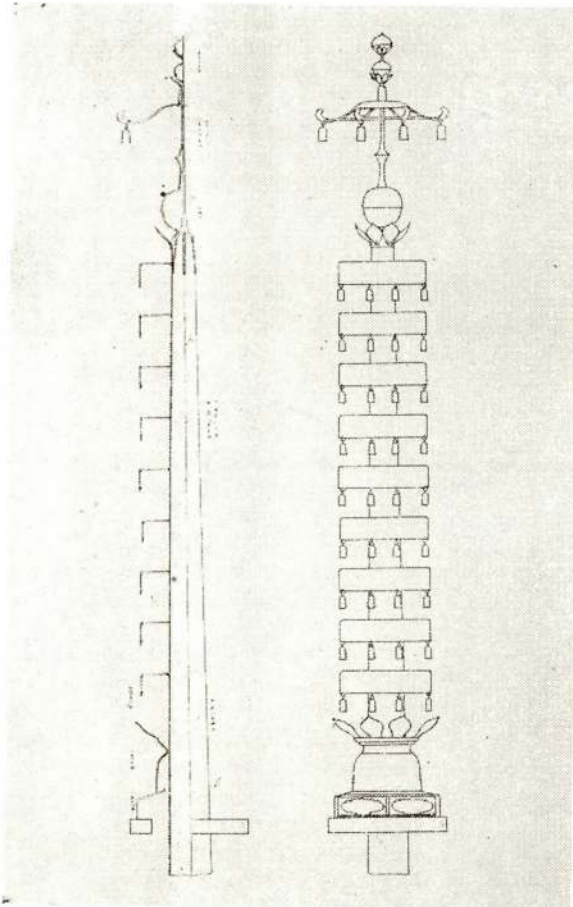
軒は二軒、地垂は丸く飛檐垂は角を用ひ、垂數は後世にては無論各邊共同數であるが、此の塔に限つて各層共各一邊は池の三邊より一本宛數を增してゐる。又裏板は地垂の間は竪板張、飛檐の間は横板張になつてゐる。然し斯樣に不秩序、大ざつぱな仕事でも少しも見る者の目にも觸れず惡感を起させないところに當時の工人の苦心と手腕とを深く考へさせられる。

柱は割合に太く初重の間二尺九寸五分に對し柱の徑九寸四分ありて其の比一〇に對し三・一八となり然かも『エンタシス』を有し推古、奈良兩朝の手法を踏襲し初層の內部床は板張とし天井は二重の組入となつてゐる。

臺輪は柱の徑より小く其隅留は法起寺の塔と等しく三枚重となし頭貫のせいも甚しく低いことも特徴とすべきである。

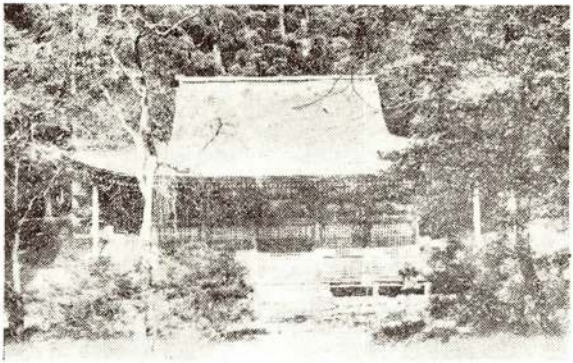
尙、軒屋棰の端は白鳳期海龍王寺五重塔模型に似て外部に向つて切つてゐる。

相輪は此の塔以外には類例のない珍奇のもので普通の塔では相輪の最上輪に水煙即ち唐草模樣等の透し彫にして金屬造版を四方に作り其上に寶珠を載せてゐるが、其の水煙がなく其代りに寶蓋（蝙蝠傘を擴げた樣なもの）と寶瓶（フラスコ形）とがある。圖の如く頂上に寶珠のある事は普通の相輪と同樣であるが其下に寶蓋があつて六方に手を擴げてこれに風鐸を附け其下に寶瓶が蓮座に載つてゐる。其他は他の塔の相輪と同樣である。胴輪には風鐸のあるものは他にも例があるがこの相輪には露盤、覆鉢、受華寺が鑄物で



五重塔相輪詳細圖

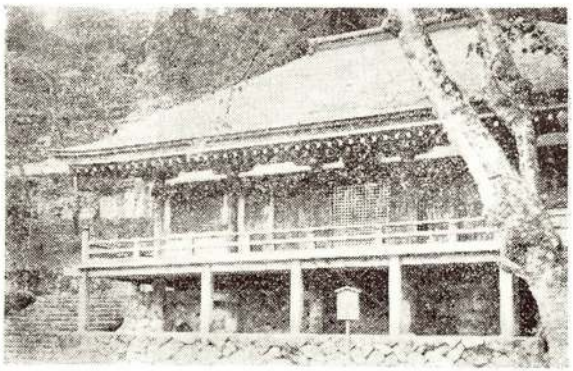
他は鐵骨銅板で出來てゐる。一說に此の相輪は空海が支那より將來したとも傳へられてゐる。二松は創建當初は全部銅打板であつたが受華以下は後世補修になつたもので注起寺の塔と其の範を共にするものである。堂は鍍金をしてゐたらしく其の痕跡を存してゐる。宵水煙の代りに寶蓋、寶瓶を有する相輪は我國にては之は唯一のものであるが支那の雲岡には之に類するものがある。



灌頂堂

建物の裝飾としては色彩の上に留意し外部木部は丹塗にて木口は黃土を塗り壁及棰間には胡粉を塗り內部の蕃輪以下には塗を塗つてゐる。

要するに此の五重塔は第一に形が頗る小さいので可憐の情を起さしめ屋根は檜皮葺でしかも緩やかな勾配の爲に輕快な感を與へてゐる。比例から見たときは高さが少し高すぎる樣であるが森林背景とし大自然の中に小さい容姿を聳えてゐるので美しい調和を見せてゐる。



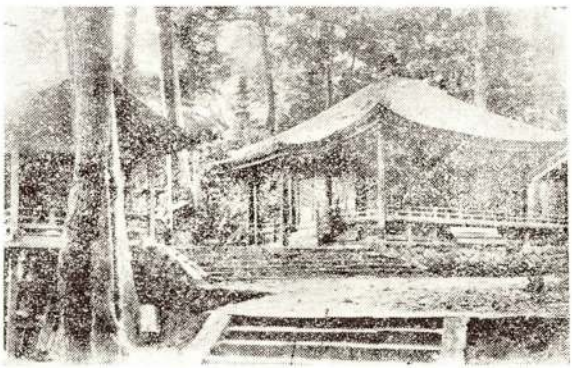
金堂

一般構造、手法は奈良時代と同一であるが凡てが輕快に出來てゐる。

灌頂堂（悉地院と云ひ當寺の本堂である）天長元年空海再興の儘とも傳へられてゐるが其樣式、手

法、構造等から考察するときは當時のものではなく鎌倉中期のものである。

平面は方五間、四方に廻縁を圍繞し石壇上に建ち隅棟には甚だしい反轉を附け、屋根は單層入母屋造りの檜皮葺にて勾配緩急よろしきを得、美しい姿態である。前方二間を外陣とし床は總拭板張にて前方に板唐戸を以つて内外陣を仕切り後方に板唐戸を以つて内外陣を仕切り後方三間五面を内陣とし中央兩側には各二本の柱を建て柱間には板張りの障壁を作り相對峙して密嚢建築の典型的樣式たるべき有名なる兩界曼荼羅を掛ける樣にしてゐる。此の手法は河内國親心寺本堂及天野山金剛寺の本堂等にも見ることが出來る。軒は二軒にて繁棰を用ひ前面柱間は悉く蔀戸を使用し側面及背面には棧唐戸板壁を用ひる等和樣唐樣二派を混有してゐる。



奥の院

斗拱の木割一般に雄大勁健にして和樣二手先斗拱を組みて支輪、尾棰を備へ巻斗に挟める實肱木の形狀等一種の特長ありて頭貫鼻の繰形には天竺樣特有のものである。

尚其他妻飾等にも鎌倉時代の特色を發揮し和樣に天竺樣を加味したものを更に一層の進歩を來たし和樣新派なる一派を創成してゐる。

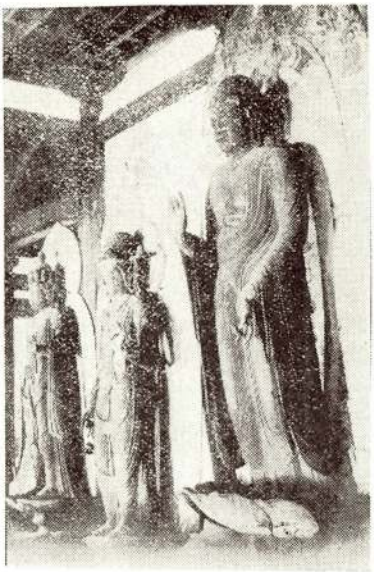
天井は外陣の純和樣折上小組天井にて内陣は高雅簡潔にして然かも優秀なる小組格天井用ひてゐる。

内陣中央に安置せる厨子は所謂『春日厨子』にして全體の形狀、格狹間の飾金具、基殿等に至る迄全部極めて完全に當代のものを保存して遺物中に於ても貴重なるものである。

金堂。灌頂堂と等しく天長元年弘法大師の建立と傳へられてゐるが是れも其の構造形式等から見て當時のものでなく、賢慶僧都の創建後弘仁末期の再建とも見られる。

埃嚢抄には嘉祥二年に懸興繼の再建したものとも記されてゐる點から考へても弘仁期のものであることは信じられる。

平面方五間、屋根單層四洛造柿葺、床は板張となつてゐるが創建當時は五間四面の入母屋造り檜皮葺にて床は土間であつたものを寛文、元祿時代に新に前面に一間通の禮堂を增築し更に內陣に大なる厨子樣のものを作り現存の有樣にしたものである。內外陣に架け渡された大虹梁に用ひられた墓股斗尻に



釋迦　文殊　十一面觀音

多武峯麓

干時寛文十二壬子三月十二日

飯盛村中村源次郎政春

此ノ堂破損仕候大工也

又他の斗尻に

此升形之木ハ當山ノ木也本堂爲修理功之畢工夫欲此升形作而切成所木之本未上下四方共少〻異無之而本末釘忽然而有之工夫各不思議希代之爲思畢仍爲後代傳記之畢

寛文十二年壬子二月廿一日　住持沙門空尒　眞鏡間工夫作者

と書いたものがある。軒は二軒の繁棰には地棰、飛椽棰とも木口稍長方形のものを用ひ何れも多少の反りあり柱には『エンタシス』なく大斗の大きさは割合に高く丸桁の斷面眞圓に出來てゐる。これは奈良東大寺轉善門、唐招提寺金堂、法隆寺東大門等の桁に類似してゐる。この點は前時代の形式と見るべきである。組物は頗る簡單なもので柱の上に大斗を載きその上に肱木を仕掛け桁は丸造りのものを用ひてゐる。天井は內陣小組格天井、外

陣は化粧屋根裏にて內陣（中央三間二面）後方には佛壇を設け佛像を安置してゐる。この佛壇は唐招提寺金堂のものに似て周圍のみが高く內部の床は內陣の床と同一の高さである。背後中の間には板壁を設け其れに『帝釋木曼荼羅』を彩畫してゐる。其の構圖、筆致は優秀なるもので、此の前面に釋迦加來、及左右に藥師、文珠、地藏、觀音等の佛菩薩を安置してゐる。

此の建築は創建以後修補改築甚だしいので當初の容姿を變化してゐるが全體のプロポーションよろしく大斗の形狀、肘木の組方、繫虹梁の曲線、柱等は最早や前代の形式を脫化して來るべき藤原時代のデリケートな性質の先驅をなしてゐる。

手法としては五重塔よりは少し遲れて當代の特色を充分に發揮してゐる。尙前面一間の禮堂は棰繁虹梁等の所用材の樣式が本殿と全然別個のものでゐる點から奈良の二月堂の如く明瞭に時代の相違せることかわかる。

御影堂（奧の院）五重塔から七八丁餘北へ老樹の中を幾段もの石段を登りつめると石塊を積み重ねた



藥師地藏

樣な巖の西に建ち東は山を負ひ三方は數百丈の谷底に迫つてゐる。創建年代は詳かではないが鎌倉時代のものである。

正面三間、側面四間に向拜を附して後面縱破風作りの廂の間を設け屋根單層の寶形造檜皮葺にてその形狀、勾配緩く頗る變化あつて全體の權衡は少し高さが低すぎる樣に思はれる。

軒は二軒の疎棰にて柱は圓柱を用ひ木鼻には天竺樣の繪樣彫刻及向拜柱上の虹梁に用ひられた蟇股の形は見るべき價値がある。

組物は簡單なる大斗肘木にて柱間中備へは美し

き板蟇股を配し周圍は高欄付廻椽を繞らし屋上の露盤は現在石造のものを用ひてある。恐らく當初のものでなく後世補修のものだろう。



彌勒菩薩

彫刻に就いて

室生寺は弘仁期建築藝術に於て其の價値大なるのみならず彫刻、槍書に於ても數多の遺物を有つてゐる。故に建築と共に是等の研究も便であると共に無駄事では無かろうと思ふ。

釋迦像及四體佛：(藥師、地藏、文珠、十一面觀音) 是等は金堂に安置されてゐて、釋迦を本尊とし左に文珠、十一面觀音、右に藥師、地藏を各脇侍としてゐる　何れも木彫に着色し豐滿なる立像に弘仁時代のものではあるが釋迦と文珠とはその體軀に縫へる天衣の手法、同一であるが他の立像とは些か異つてゐる。

釋迦は高さ十尺其の他のものは約八尺位のもので釋迦の衣文には斷面雄健にして角のある幾多の平行せる襞を現はし餘程形式的に出來てゐる。彼の唐招提寺地藏堂の地藏の形式が之に似てゐる。

光背の形狀は舟底形に出來てゐて釋迦と地藏とは同一のものにて他の三體は舟底形に珠形のが附



如意輪觀音





釋迦地藏光背繪

加せられてゐる。釋迦、藥師の光背には胡粉地に唐草、寶相花等を彩色し其の間には菩薩をシンメトリーに配列されてゐて當時のものとしてはかなり大作の部に屬して貴重な作品である。

彌勒菩薩、寺傳では弘法大師作となつてゐるが天平時代のものである。高さ三尺一寸木彫の小さいものだが勁健な彫法を施して引き締つた胴には強い水平線を入れ裳裾の衣文は奈良藥師寺東院堂の觀音之像の如く最も薄く平行に出來てゐて男性的な內に溫和なる表現である。光背は普通には珍らしい形式のものに唐草模樣の透彫を精緻巧妙に配列してゐる。

如意輪觀世音菩薩、灌頂堂內鎌倉時代の春日厨子內に安置されてゐる、天長年間本堂創建の際安置されたもので意匠卓抜なる臺座、蓮辨の上に座し圓形の光背を持ち其の姿勢は河內國觀心寺のものによく似てゐるがどこともなくよほど見劣りがする。其の面相の表現實に豐滿にしてプロポーレヨンよろしく整備してゐる。

釋迦像金堂に安置せる座像にて文珠菩薩と合樣の形式に出來てゐる、制作は弘仁期のものである。

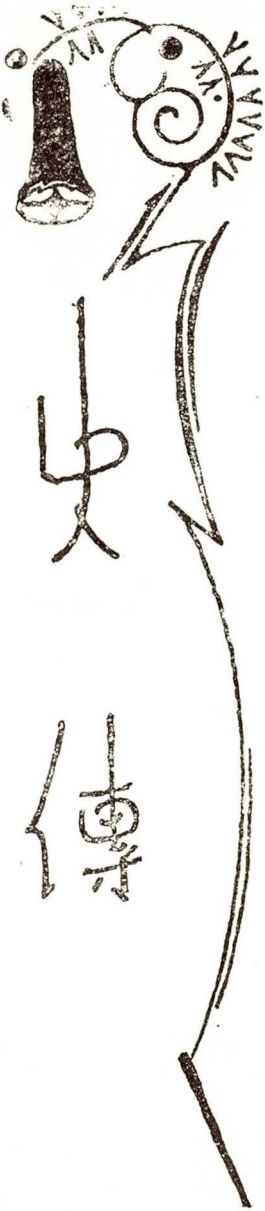
金堂壁畫帝釋天曼荼羅、內陣後方に極彩色にて描かれて居

て中央には帝釋天を本尊とし脇侍を左右に描き上部には佛菩薩を多數描いてゐるが何れも剝落甚だしいので詳細に見ることが困難があるが諸佛菩薩の面相は雄健の氣溢れ衣紋の描線は剛健、素朴にして一種の氣韻を帶びてゐる。

時代は建築と同時に作成されたもので弘仁時代の中期以後のものである、是等は藝術的價値問題よりも當代壁畵の遺物として貴重なものである。

釋迦、藥師光背繪、金堂『帝釋天曼荼羅』及本尊彫刻と共に當代の貴重なる作品である。何れも極彩色を施し釋迦には七體、藥師には九體の溫和なる面相の菩薩座像を描き衣文は朱を用ひ太き赤黑の線で力強く隈取りをして影隱を附けてゐる。この樣式は藤原時代に至る迄よく用ひられたもので強い感のするものである、尤も釋迦も藥師も時代は同一であるが藥師の方が生き〳〵としてゐる地藏、文珠、十一面觀音等には極彩色を施して唐草模樣等を描いてゐる。

白菊の咲きかさなりて月寒や



フランク、ビッギルブレス氏の死を悼む

渡部圭吾

建築工事施工界の恩人 Frank Bunker Gilbreth 氏は去る六月十五日に享年僅に五十六歳で逝去せられた。建築工事施工に携つてをる吾々は氏の逝去に對し限りなき哀悼の意を捧げ、更らに略歴と功績とを再錄して氏を追想したいと思ふ。

氏の晩年の活動は能率技師として他を擯んで華々しいものであつた。それで氏の初期の研究のやうに建築工事に關係したるものゝみではなく、寧ろ工場能率に關係するものゝ方が多つた。けれども建築工事施工の能率增進に關する研究者として氏は今尚先覺者として崇拜せらるゝばかりではなく第一人者であると私は信ずる。氏は一八六八年七月七日に『ニューエングランド(New England)』の『ヘヤフイルド(Fair-field)』に生れ『ボストン(Boston)』の小學校を了るや機械業に携り徒弟より工場長となつた。一八八五年始めて技師として實務に關係し一八九八年には陸軍技師團體から要塞築造の顧問を囑托せられてより深く現場の組織と人事とに研究し、『チーラー』氏に次ぎ『エマーソン』氏や『ガント』氏と並び稱せられて、科學的經營法に關

する一大權威となつた。その後兵學校の技師長となつたこともあつたが罷めて能率に關する研究に沒頭し同研究に關する會合の會長や理事として今日に至つたのである。氏の著書は凡て理論から割出したる實務と實驗の結晶である。氏の最初の出版は一九〇四年で Field System と題し建築土工工事の現場に於ては如何にして工事計劃を立て如何なる順序と如何なる注意とを以て工事を進捗せしむべきかを敎へてをる一九〇八年には Concrete System を著はし工事組織より混凝土工事の計劃型枠、鐵筋の加工より組立に至るまで詳細に說き更らに混凝土の打方實施結果迄で平易に解り易く說明してをる。一九〇九年には Brick laying System を著し舊來の煉瓦積方法を如何に改良すべきかを敎へ最後に煉瓦積に關する動作研究のこと迄で記してをる。越へて一九一〇年には Motion Study なる書を公にし更らに煉瓦積に關する能率增進の各要素の研究より工具の改良、材料器具の配置、運搬の改良『トロ』注ぎの方法等に至る迄で詳細に說明してをる。同書中伸縮自在足場職人の姿勢に關する研究、工具の配置等の改良より煉瓦積に於ける Pick and Dip Method では十八個の動作を四個二分の一とし Stringing Motor Method では十八個の動作を一個四分三に省略し職工の能率を三倍以上にせることなどは今尙何人も記憶してをる所である。一九一一年には Primer of Scientific Management を書いたが簡結にして要を得てをることは『テーラー』博士の Principle of Scientific Management と比び稱せらるゝ名著である。何れも建築施工界の大改革を惹き起したもの許りで就中動作研究の如きは建築に關係せぬ人々からでも讀れた有名のものである。更らに動作研究より疲勞研究に進み、氏の夫人との共著では Fatigue Study, Applied Motion Study, Motion Study of Handcaped 等を世に出してをる。

動作研究の方では現今尙比びなき研究者で氏の研究に係る『クロサノイクルグラフ（Chronocycle-graph）』は能率の研究せらるゝ所には必らず此器械を見ざる所なしと稱せらるゝを見ても如何に氏の世界的であるかゞ解る。最近では斷ざる研

究で『ステレオサイクルグラフ(Stereo-cycle-graph)』となり『ステレオクロノサイクルグラフ(Stereo-chrono cycle-graph)となり遂に『オートステレオサイクルグラフ(Auto-stereo-cycle-graph)』となつた、尚これのみならず活動寫眞の二重映畫を應用して職工の動作を調ぶる等苟も職工動作の無駄な部分又は効少なくして疲勞せしむるが如き動作ならば如何なる微細な運動も省畧しようと努めた。而も研究に入るや必らずその核心に觸れざれば止まざるの熱心さがあつた。

最後に操返して述ぶるが建築に關する尤も偉大なる功績は煉瓦積に關するもので、工場能率に關する顯著なる功績を殘した改良の例は『ニューインググランド』の『バット(Butt & Co.)』會社の仕事であつた、又後世能率研究の爲めに沒することの出來ない功績は『クロノサイクルグラフ』の完成であろう。(終)

芋掘るや積藁に子供のせてあり

漫錄



雲崗石佛寺（二）

京都臨濟大學教授　大屋德城

此處に石窟寺に關す一般的說明を挿入しよう。

雲崗石富寺は高さ二支里の丘の側面を開鑿して造營したもので、當時大同府に都してゐた魏の文成帝の時に、僧曇曜の奏に依て造られたものである。初め五窟を造り高七十尺から六十尺の大像を雕つた。而して、魏は孝文帝の大和十八年に洛陽に遷都したのであるから、此の間四十年に亘つて次々に增鑿されたものである。其の證據は近年發見された第七窟の銘文に依ると、大和七年八月卅日に邑師法宗が邑義信士女等五十四人と協力して石龕形像九十五軀及び諸菩薩の像を敬造したといふのであるから（銘文略す）愈以て一時に竣功したものでないことが分る。孝文帝が初め造營された趣意は先帝（武帝）の廢佛に依る罪障を懺悔し、福業を修する爲で、武帝の廢佛は太平眞君七年西曆四四六年であり文帝の即位は興安元年（西曆四五

二）で、斯年詔して佛教を復したのであるから、此の頃から石窟の造立を發願したものと見ゆる。

凡て石窟寺の制は印度に見るところで、アジャンター、エルーラ等の石窟は今日でも有名であり佛教東漸と共に、西域から支那に傳り、敦煌の石窟寺は前秦の建元二年（西暦三六六）に成り、涼州の石窟寺は東晋の隆安元年（西暦三九七）に成つてゐるのであるから、雲崗の石窟寺が此れ等の系統を受け、先側に據つて、大體の形式を踏襲して居ることは明白である。朝鮮慶州吐含山の石窟は此れ等を模して、巖片を接合して石窟の形を造り、我が法隆寺の五重塔内に巖窟の樣を造出してあるのと、恐らく窟寺を表現した積りであらう。

唐代の石窟寺は道宣の記すところに依れば、東は僧寺で靈巖寺といひ、西は尼寺で（名を出さぬ）各石を鑿て龕を造り、千人を容れる大窟が檜比して、佛像の數量が測り難いとあるから、其の雄大な姿が察せられる。其の後數次の重修を經て現今に及んでをる。故に破損も甚しく、泥塑を厚く塗つて原形を留めぬところもあるが、現存の諸窟で當初の一班は察せられる。

石窟寺は我が伊東、關野兩博士、歐人ではシャーバン（佛人Chavannes.）氏等が夙に研究紹介せられ、續いて大村氏、松本（文）、常盤の兩博士、太田、木村、中川、小野等の諸君が視察研究されて、論文や著書もいろ〳〵出版せられ、又圖錄も發行され、近日此の窟が有名になるに從て、日、歐、支の識者が巡拜に出かけるものが多くなり、大同府の東華棧では、夫れ等の人たちの留めた名刺が二綴もある位で、從て石窟の番號や、名稱なども各好みに依て命名されてをり、甚だ混雜して居る次第である。

石窟の大なるものは、石窟寺の建物を中心として、中央から、西風にかけて連つて居り、中窟や小窟が夫れ等の左右上下に點綴してをる。東方にも亦大中小の多くの窟があるが、一概して、中央及び西方に比しては遜く見劣りがする。關野博士は主なる窟二十四個を數へ、シャーバン氏は二十個を數へ、寺でも二十位の窟は分つてをる。（平面圖を載せたいが、予は建築の專門家でないから、

夫等專門家の圖を參照されたい)。

次に問題と爲るのは、此れ等石窟の內容たる彫刻の樣式であり、系統であるが、諸家に異說があつて、今に決定を見ない。併しながら、之れを大別すれば、大略左の四說に歸着するやうである。

(一)或る部分は拓跋魏氏の特有の藝術であるとする說

(二)健陀羅系統の藝術であるとする說

(三)中印度系統の藝術であるとする說

(四)健陀羅系統を主とし之に中印度系統を交ゆる藝術なりとする說。

何れにしても、年代からいつても、一時に全體が出來たわけに非ず。洛陽遷都後と雖も、諸窟の追刻がなかつたとはいへぬし、遷都迄に打切つたとしても、最初から四十年位の期間はあるし、且又之に從事した技師や工匠も澤山あり、且つ時代に於いても、別時代の技師や工匠があり得るのであるし、尙又佛敎東漸の歷史からいつても、此頃から隋朝の始るまでは、潮のやうに、種々な思想の經典を持つた飜譯者が印度や中央亞細亞から、支那へやつて來たのであるから、其の彫像の粉本に就ても、雜多なものが齎されたと解する餘地がある。つまり雲崗の石窟は此れ等の多くの藝術の潮流が渦いて成つたものと考ふ可きであるから、問題を單純に片づけるわけにはゆくまいと思ふ。予も聊か研究した點もあるが、此には『支那巡禮日記』の中から、雲崗の部分を抽出して、載せたのであるから、夫れ等のことは他日に讓りたいと思ふ。

× × × ×

寺で稱へて居る窟名を左に出して參考に供する

石鼓洞　寒泉洞　靈巖寺洞　阿彌陀洞
釋迦佛洞　準提閣　佛籟洞　阿閦佛洞
毘盧佛洞　接引佛洞　離垢地菩薩洞
文珠菩薩像　萬佛洞　接引佛像洞普賢
菩薩像　接引佛像　阿閦佛洞　白佛耶
洞　千佛洞

(『大同石佛寺』より)

× × × ×

十五日　雪　起きてみると雪は大に積もつてゐる。そしてまだチラ〳〵降つてゐて、到底霽れさうにもない。昨夜南京虫は一つも出なかつたが、此の雪では寫眞も實測も困難であるが、尚更困つたのは拓本である。外村君は前回撮殘した寫眞の方に掛り、予等三人は拓本に掛る。池田佐原の兩君は印肉の拓本だから水を要せぬが、予は本式の拓をやらうとするのだから、水が入るので、乾燥に時間がかゝり大に閉口である。小僧の續存は案內顏に立振舞つて村の洟垂小僧を引張つて來る。十二三から十五六の腕白が黑く汚れた顏をして、羊の皮の袖無に似た物を着、沓を穿いたのがゾロ〳〵ついて來る。銅元の一枚二枚を遣れば・喜んで家から梯子を持て來るやら水を持つて來、墨を磨てくれるやら、ソレハ〳〵大變な騷ぎで・此村に金まき男が天降つた樣に、ホクホクして居る。

西方には蜒々として連る巖壁を穿ちて、多くの大窟と巨像がある例の露出大佛と稱せられる大露佛の附近を中心として、大きな窟と夫に劣らぬ巨像が澤山ある。坐像、倚像、立像などの諸佛、層塔門楣、臺坐、光背等の裝飾模樣、唐草、天女、麒麟模樣から多くの千佛像など、正しく諸佛來集の佛土を出現してゐる。

樣式には種々の變化があるが、一番多くて眼だつのは或人が拓跋魏氏の創作といつた露佛のやうに背の高い顏の長いクリ〳〵した鈍栗眼のキツイ顏した佛像である『挺然たる丈夫の相』大古記錄にある通り、如何にもキツい強さうな地方的な蠻味を帶び硬たい表情の佛像である。殊に粗雜な沙岩質の壁だから、風雨に荒れて、線の消えかゝつたのや、中途から崩れかけたのが、如何にも寒い荒涼たる塞外の風物と相應して、北方の強たる魏の文化を偲ばせる。生氣は籠つて居るが、謂はゞ藝術としては硬い感じのするもので、唐の佛像のやうに圓滿な豊かな柔い藝術ではない。龍門奉先寺の大佛のやうな慈光衆生を照す柔い感じは少しもない。佛像の面相が魏帝を模したといふ傳說があるやうに、今も此村の住民は何れも背が高く、顏の構へといひ、眼のクリ〳〵した鈍栗式なところといひ、此等の像の面相に生き寫であるのをみ

れば魏人の理想的武人を以て佛像に移して、其敢爲勇武の颯爽たる風采を刻出したものであらう。佛像の手足にしたところで、中々大きくて荒つぽいものである。諸窟を順禮して往くと、露佛のあたりを中心として、西へ西へと段々小窟と爲つて終に無くなつてしまふ。諸窟の前に沿うて小徑があつて、時々は斷崖と爲つて登るに困難なところも少くない。元は石窟であつた物が崩壞したのや石窟の外部が風化してころげ落ちた岩片を集めて石塀をこしらへてある。中には未だ千體佛などの彫像が殘つて居るのもあるが、或物は岩片が大きくて、とる譯に行かぬし、又隨分酷く荒れてゐて取る價値のあるものは殆ど無い。佛頭も一つめつかつたが、大きな岩片の一部に爲てゐて、剩へ面部がズンベラボーに磨れてゐるので、拾ふ氣はしなかつた。旅客が往々佛頭を盜んでゆくといふ噂で、和尚も『日本人が澤山佛頭をもつて往たといふて居た』予が破片の中に好い彫像の頭でもないかと熱心に探して歩くのを見て同伴の諸君は『佛さんの頭をねらつて歩くので、天氣もようなるまいと冷して居る。其實みんな何か記念物はないかと探して居るのは同一だ。併しどうしてもついて居る佛頭まで敲く勇氣(?)は美術家諸君にもないらしい。

窟前に立て前方を眺めると　雪に埋れた川向ふの丘は眞白く連り、其下を春淺い川の水が黃い濁つた波を擧げて流れてをる。眼下の部落は雪をかぶつて、處々に枯木が寂しさうに立つて居る。犬や牛や羊や豚がゾロ〳〵ノソ〳〵と遊んで居る。村の男や女が珍らしさうに一行を眺め、腕白どもはワイ〳〵いつて見物に登つて來る。

多くの窟の中は百姓の粉引小屋に代用されて牛がノッソリ粉を挽いて居る窟もあり、又下の方の村民の物置小屋に代用されてをる窟もあり、全く美術といふ考もなく、佛像といふ信仰心もない。我等は村の小供達に案內されて、夫等の私有のやうに爲つて居る物置小屋を覗いて歩いた。戶毎に二三疋の猛犬が居て、ワン〳〵吠立てるには頗る惱された。此れ等の中では楣間に鵝鳥や水牛に騎つた豪怪な一群の印度諸神を彫つたシーンが一番

印象的である。

予は岩壁の小佛像を拓し、獅子坐を拓し、可成の成功を收めたが、風は餘りひどくないが、寒くて水の乾きがわるいのと、對象が大きいのと、凹凸が多いので、到底水張式の拓法では、十分効果を收めることが出來ぬので、水張式は一時中止した。池田佐原兩君は印肉式の拓法だから、精細にはとれぬが、ドンナ懸崖や天井でも、大體さう造作なくスグやれる。ソコデ三人協力して、此方法で可成澤山とらうではないかといふことに評議一決して、梯子や踏臺など出來るだけ子供達を賴んでもつて來させて、懸崖の佛像も、天井の飛天も大分拓した。殊に天井にはよい天女が澤山飛んで居るが、之は紙をあてゝ頭の上を眞下から敲くので、流石の池田君も閉口して餘りよいのがとれなかつたのは殘念である。併し隨分とる事はとつた。

窟の內には往々馬糧(?)の枯草が積んである。夫等を踏み越え々々々、外村君は寫眞機を運んで上部の室內で撮影をやつて居る。『うまくやつたかゝよいのがあるか』と、窟の上下で聲をかけ合ひ、石徑のたえた危險な巖壁を何度も〳〵上下した。

斯樣にして、けふは終日見學や拓本や撮影に暮して了つたが、さて雪は相變らず降つたり止んだりして、結局降續いて居る夕方には宿舍の脇の佛殿で、予も涅槃や出城を印肉で拓したが、あまり思はしくはゆかない。須彌壇の唐草を水張式でやつたら、ベッタリ泥塑がついて來た。

暮れると、ランプを點けて、客室の壁に今日の獲物を張附て互に批評し、眺合つて樂しんで居る今夜も又ゴロ寢をせねばならぬ。雪は止まぬし、大に當てがハヅれて困つたが、やる可き事は先づ豫定の通にやつたが、これからどうしやうといふ段になつて、明日午後から大同へ還らうではないかといふことに評議一決した。

十八日　晴　不思議や日が出て、あか〳〵と雪の丘や雪の村を照してをる。一同雀躍して、昨日が斯うであつたならと、今更乍ら殘念がる。併しけふも半日はあるのだからといふので、夫迄にゆつくり見る丈けの物を見る樣にせうといふ意氣込で、又西の方の諸大窟の順禮を始める。斯程の偉

大な藝術を産出した母胎宗數のグローリーを幾度も〳〵讃美する子供達はけふもゾロ〳〵附いて往く。小僧の續存が『おれのとこのお客樣だ』といはぬばかりに、多くの子供の中で、威張顏に紅い頰して洟すゝりしながら、頭領顏してついて來るのも滑稽味がある。雪は少しづゝ消えて、路がジク〳〵し出す。崖の昇り降りは昨日よりは滑つて都合がわるい。民家の窟も又覗いたが、例の門楣の三面六臂の印度諸神の彫像が異敎的なマジックな調子をそゝる。露出の大佛は不相變朝日を受けて、昔を語り顏に端然と膝を埋めて、趺坐して居る。奥まつた方の窟内には、日光が屆かぬので佛像も寒さうな顏をして坐つて居る。よく〳〵みてをきたい頭に入れてをきたいと思ふ。氣に爲る樣式の差異などシッカリ印象を殘したいなどゝ考へてみて歩くと、却つてボーッとして了ふ。何といつても印象に殘るのは、巖角を占めて、ドッシリと坐つて、クワッと眼を見開いて居る露出大佛と其附近の大窟の諸像である。此等の蜂窟のやうな重り合つた諸窟を、村落の方から見上げると又一入の趣きがある。望遠鏡で窟々の大佛を眺めるのも又興味が多い。或る家の塀を少し切り凹めて一つの佛頭が祀つてあつた餘りよい作でもなかつたが、窟から出たもの丈は確かであつた。欲しくなつたので、銅貨を出して子供に與へ、もらつて來ようとしたけれど、子供がいかぬといふやうな表情をして、何とかいふので思止つたが、併し今でも左程憎いとは思はぬ。

寺の東の方は窟も小さくて、あれ方も酷く、西方に比ぶべくもあらぬが、一應はみてをかうと思つて巡拜した。中にはよいのもあるが、大抵はつまらぬもので、あれ方は頗る酷い。殊に佛頭の無いのが多い。主題も多寶佛塔出現(法華經)や、維摩文珠不二法門の問答(維摩經)や、千佛像や、天女や、西方と變りはない。下の路は大同府へ往く別路と爲つてゐるので、村人が駄馬等曳いて、雪の上を渉つて往く。窟の數は大分あるが、崩れかけたのが多く、大してよいものはめつからなかつた。寺へ還つて、晝食をしたが、天氣は益々好くなつて、日はあか〳〵と照り、雪はむら消えと爲

つた。

荷物だけを一頭の馬に積んだ。馬が不足するので、人間は歩いて往く事に決めて寺を辭した。和尙と小僧が門まで送つて來る。村の子供たちもついて來た。石佛古寺の額を見返りつゝ、東方諸窟の下の路を大同府へと向ふ。

さらば雲崗よ。

石佛寺よ。

昨日からの雪は殘つてゐるが、空は一面に霽れて、あか〳〵と太陽が顏を出してゐる。雲崗滯在の二日は雨でなければ雪、雪でなければ曇で、一向に晴れた氣持もしなかつたが、出發するけふの日はこんなに霽れて好い日に爲つたとは何といふ天の惡戲でせう。朔北といふやうな感じはどんよりした空から雪がチラ〳〵降りて來る間に味ふたことであるが、作業には大障碍であつた。

東方諸窟の下に沿ふて、路は大同府の方へ續いて居る。一行は諸窟を拜しながら、雲崗の村に名殘を惜みつゝ高原を辿つてゆく。雲崗の丘の續きの丘がなくなる頃迄、ソコソコに窟らしいものが見える。覗いてみれば空窟だけれど、元は諸像が彫つてあつたのかも知れぬ。路には石——大きな平板の巖片みたやうな——を敷いてあるが、往々夫に何か彫刻がしてあるらしいのが見つかる。凝視すれば、陰々として佛像の如き形相の認められるものが二三はあつた。してみると、石窟諸寺はまだ〳〵現存の處より大同の方へ續いてゐたに相違ない。沿道には少しづゝ村落があるが、大した村はない。觀音堂の少し大いのが一つあつた。

（古記には此の邊迄佛窟があつたといふ）

雪後の高原には、午後の事とて、もはや雪は殘つて居ない。遠く前方の山々は大きな濤のやうにうね〳〵として實際に連つてゐるが、屛風のやうな山脈は頭から雪を冠り、落ちゆく太陽の光線に反射して、其の綿の被子を光らしてゐる。之が大同府の背後を固めてをる大山脈で、夫から右方にも、左方にも、矢張遠い山脈があつて、大同は四面に山を以て圍ふた一の高原らしい氣分の平野にある。北方の强と呼ばれた魏の都——古い廢墟である——と考ゆると、ちやうど、奈良や慶州に遊

んでゐる——もつと大規模ではあるが——感じがする。荷物を負ふて先發した馱馬と後になり、先きになりつゝ、大同府の方へ下つてゆく。田圃は遠く連つて、畝にはまだ雪が殘つて夕日に光つてゐる。大同の城壁があかく聳えてをる方を左方に迂回して——之が捷徑であらう——麥畑の中を横切り、黄昏に城内に入つた。東華棧に着くと、大きな犬が尾を捲いて迎に來る。多くの番頭達が湯を持つて來て、もてなし振りを示す。一同はやれ〳〵とお茶に喉をうるほしてホツとする。

今夜は此に一泊して、明日は汽車で北京に還る豫定である。(了)

(正誤)第九號所載の分

水宴は小宴　肅々は蕭々　園廬は園廬の誤

裸木に月の出でたり露の原

頽る、花

他三篇

——建築叙情篇（六）——

廣岡峰太郎

A　頽る、花

頽るゝ花に、恨みは無からうといふことだ。
晩春の夕べ、そこはかとなき、靄のおくがに、
醸さるゝ新緑の匂ひを感じる中にあつて、雨蛙はしきりに鳴く。
頽るゝ花の、頽るゝに、恨み多ければ、期するは無からう。
新緑は萌え出で、青葉若葉は繁らふ。
花の延長だ。甦る美人の潜在だ。
誕生より、涅槃への諸相を通じて、眞なるもの善なるもの、而して美なるものゝみが、光芒を放つであらう。
何等の、否定も無く、懐疑も無く、凡てを抱擁して終ふ境地に、建築の律調は、澱渕たるであらう。
藝術だ、藝術境だ。
頽るゝ花を通じて、旺んなる華の、藝術に、直面して、眞なる、善なる、美なる建築藝術の本質への、不断の心性の、凝視を痛感する。
頽るゝ花の淋しさ、はたやるせなさ！
静寂の中にあつて、音もなく頽るゝ花の、神秘さに、紅塵の世の人々よ！
妙なる、清しき瞳を開かう。

五月四日

B　さみだれ

桃の花散り、木蓮咲き、花の夜は　語り明かし
語り明かさぬとも、誰れか、さみだれに、たゞ暮るゝ夕べの室に、ココアの物懐しき、感覚を、享けざる者のあるべきか。
降るさみだれは、静かなれども、強し。強けれども、優し。

レオナルドの纖細に、ミケランゼロの力に、悠久の美を讃ふ。

美の對照としての、建築に於ても、靜かなれども強く、強けれども優しき、悠久なる生命への、邁進を切望する。

雲は、山野に低迷して、降りこむるさみだれ、雨聲は、雨聲に唱和して、萬物は、靜かなる、息を凝らす。

見よ！宇宙に咲く髣髴たる、睡蓮の花こそは、誠に、當面のスフインクスではないか？

悠久なる、藝術の生命は、さみだるゝ、暗澹たる、宇宙にあつても咲く、睡蓮の花にさへ、シンボライズさるゝのではないか。

我が、建築への、心的なるものを切望するは、既に言ひ古された事であるかも知らないが、怯懦なる、我をして、かゝる言辭を、繰返さしめるのは、既に言ひ古されし事物なるが故えに、一顧をも要しないと、思惟さるゝに至るを、怖るゝが故である。

我の言葉は、或はさみだるゝ宇宙を行く、外道異端の徒の、言ふべき言葉であるかも知れない。

五月九日

C 茶のけむり

我は、茶のけむりを愛す。

我は、鐘の餘韻を尊ぶ。

我は、建築に盛らるゝ處の、理性、感情の訓練を說く。

我は、遊醺的なる功利的なる建築家に依りて、建築の眞精神の、冒瀆に恐れをなす。

建築精神を案ずる者、建築に携る者より他に、甚だしきは無からうが故えである。

我の、茶のけむりを愛し、鐘の餘韻を尊ぶべき事の、殊更らに、凡ての人々に、強ひようとは思はぬが、茶のけむりの、縹渺たる。鐘の音色の、神韻たる趣きを、味解するにつとめる勞を 惜しまぬ程の、餘裕が近代建築家に、あり度きを冀ふは、我のみにては無からうと信じる。

餘りにも、遊醺的に、功利的に、餘りにも、阿諂的に、沒我的に近代人は偏してはゐないか。

近代の建築家は、殊に、自我的でありながら、一面に於ては、沒我的ではないか。

物的なる主張は、自我的に。而して心的なるべ

き製作は、沒我的なるが如くに……。

茶のけむりの、縹渺たる、はた、鳴る鐘の、神韻たる、實相の上にあつて、この小篇の、理想論に、終らざれば幸福である可きところの目的は、そも〳〵何であらうか。

五月十六日

D、EPISODE

——住宅地。

○倶樂部の建物の外觀が、全く蔦の葉によつて微塵の隙間もなく、デコレーションさるゝ頃になると、赤い瓦屋根に、雨後の雲間を洩るゝ、まぶしくはないか、きら〳〵しい日の脚が、一めんに降り注ぐ。

そして、野茨の花が咲き、目の先を、かすめる如くに飛ぶのは、乙鳥と知る程の頃ろになると、我は、自然より、藝術を、建築を對照としての、焦燥感に打たるゝことは、此時期より烈しき時期はない。

机上小閑……

白芥子の花は、靜かに眠れる相なれども、自らなる、花の重みに耐へて、純白なる花瓣は、蕊を抱きて、一莖、一葉の上にも、妙なるものを、感せしめる。

纖細にして、素朴清鮮。

嬌羞を、帶びて至純なるかな……。

贈られしに非ず、購ひしに非ずして、我の机上を飾ることの、無用なる多言を要せずして、既に多少の、由縁なきにもあざるを、思はるゝべし。

路上！（淋しくも遙かなる村へ續ける道なり）に拾はれし、白芥子の花こそは、里人の手を經て、我に觀照の自由を、與へしめしものなり。

我は、思ふだに竦然とす。

自芥子の花の、無慘にも、轍の跡に、蹂躙され、し相を……。

消ゆるは、うたかたの如く、輝くは、夜光石の如くにも、藝術の生命は不朽なるかな。

歳月も歩みを、駐めるのであらう。

古往今來……。

一輪の花をも、人々の愛するが如くにも、萬人の、建築への、愛と涙とを惜しまぬ時代の、想像が許せないであらうか。

五月十七日

戯場漫筆

足立圓次郎

一

始めて廻り舞臺を使用したのは、寶暦八年の冬であります、角の芝居で『三十石艤始（ヨブネハジメ）』と云ふ狂言が上演せられました時で、作者は並木正三であつて時の見物を非常に驚かし且喜ばしたと云ふ事であります。

廻り舞臺で大道具の變化を見せて効果を上げたに刺戟せられて、寶暦九年四月十五日から、中の芝居で、時の作者竹田治藏が新工夫したる舞臺一面をセリ上げる道具仕掛を『奈良都大佛供養』の狂言上演に使用して、廻り舞臺以上の大好評を博したとあります。

寶暦十一年十二月十五日から、これも矢張り中の芝居で『秋葉權現廻船物語』と云ふ新作物が上演せられまして、作者竹田治藏の其の奇抜なる道具立が非常なる人氣を呼んだものでありましてその大切（ギリ）にガンドウを仕始めたとあります。

尚『南水漫遊』に時の有樣を述べて居ります。

大切の幕あきは、造りもの二重舞臺一面の全襖奥屏口（オクビヤウグチ）中二階、屋敷の體（テイ）にて段々狂言あつて後、此の家體（ヤタイ）東西へ引込み、本舞臺一面の土手になり中村佐野八、儲役（モウケヤク）にて、喜藤次役の庄五郎を追て出で、立になり、戸家（トヤ）へ追込むと嵐雛助、傾城花月の役、船岡軍次役の東九郎を追つて出で、立廻りあつて同じく戸屋へ逃込むと、岩田染松、妙（コシモト）松ヶ枝役にて、春山丹下役の染川此兵衛と立廻りしながら出で、戸屋へ追込む、すべて箇樣なる、立廻り幾度もあるは、大道具拵への間なり、右大土手一面に返へし、道具八間のあひだ結構なる御殿、墨塗り高欄付、金襖、眞中に中村四郎五郎、奴佐賀内、本名月本圓秩役にて、吹替（フキカヘ）の裕明をおさへ居る、三桝大五郎、王島幸兵衛役にて、

中村歌右衛門の日本駄右衛門役を取巻き居る、嵐三五郎、月本始之助役、竹中兵吉、松岡監物役にて詰かけ居る、向ふの襖左右へ開く、奥打抜(ウチヌキ)きの大座敷、中村粂太郎、三津姫役、雛助、佐野八、其外一座殘らず仇討の出で立に奥深う列び居るこれ大切打出しの、道具なり——云々

以來現今に至りましても尙其の構造なり使用方法等に多少の改良變化はありますが、大體にをきまして、そのまゝ繼承して來て居ると云つてよいのであります。

今日時々上演せられまする「樓門五三桐」「伽羅先代萩」の御殿場から床下になるセリ上げ「返討崇禪寺馬場」の仇討の場等は最もよく人の知る處でありまして、舞臺變化の古くさいお手際な方法には隨分馬鹿らしい感じがするものではありますが、又一面から、そこに起る歌舞伎氣分の云ひ知れぬ面目さと古典的氣分を味はひ得るものであります。

殊に、春秋に開催せられまする各遊廓の温習會等では、御承知でもありませうが、所謂トコロ返へしなるもので、數多き場面を見せるのでありますから、其の道具仕掛なるものは隨分復雜したるものでありまして、素人で考へる理論では到底出來ないのであります。そこには永年の經驗から手馴れて來た方法で、傳統的な型に依つて居るのであります。無茶な事や危險な事を平氣でやつてのけるのは「芝居の大道具方である」とは、決して僞りではありません。

とにかく、今日劇場に於きましても、所作事等は、この道具の變化に依つて舞臺効果を、より以上に增すものでありまして、文樂座の操人形の道具等は殊に特殊な構造と方法に依る裝置をして居ります、尙詳細の事は伊原青々園氏が「日本演劇史」に述べて居られますから、極く大體ではありましたが、過去に於ける大阪の舞臺裝置進化は、こうした道程をへて、現在に傳つて來たのであります。

演劇の發達と劇場建築の進歩と併行しまして、近來は舞臺裝置(大道具並背景)それに伴ふ舞臺照明が、劇を構成する上に重大なる要素になること

が知られ、且一個の舞臺美術として漸く重視せられて來ました事は非常に喜ばしい事であります。

舞臺全體、それは一個の美術品であり、繪畫であり、彫刻であります。

それら舞臺美術を充分に發揮せしめるには、矢張り、其の基礎にるべき劇場建築の善惡に依つて定まるのであります。

完全なる劇場の建築！

それは、構造にしても、樣式にしても、凡ての學術の進歩、實際に於ける技術の發達せる現代でありますから、至難な事ではありません　が今私の云ふ（希望と云ひませう）完全なる劇場とは無論、建築構造、建築樣式、內部裝飾並設備の完全にあるのですが、今、一つは舞臺の構造並設備を完全にする事であります。

甚だおこがましい言葉ではありますが、今迄の劇場建築中、設計施工共、非常な苦心研究の下に完全を期せられては居りますが、舞臺と云ふものに對する考究は實に貧弱極はまるものです。

私が實際に體驗しましたる劇場『大阪の角座、辨天座、松竹座、浪花座、神戸松竹劇場、設計中のものとして京都松竹座（舊稱明治座）全部大劇場內、角座、辨天座、浪花座は木造一部鐵筋コンクリート造』の中不幸にして完全なる舞臺はないのであります。

然らば、何んな舞臺が完全なる舞臺であるかその舞臺は如何なる、構造、設備の下に設計、施工をなせばよいか。

そこには、素人が豫知せない設備を要するのであります、不思議とでも云ひ度い、道具方の言葉舞臺用語、特殊な社會を形成して居る舞臺裏——を私は、過去五十年の間日常見たり聞いたりしたるまゝを、拙い筆を起して、淺學分才をも顧へり見ず愚見を述べたいと思ひます。（つゞく）

× × ×

郊外に住んでの雜談

阿野二見亭

× ×

『新しき村の仕事をなぜ都會で始めないのかと非難した人があるさうだ。』と武者小路氏が例の調子で言ふ。『金がないからと言ふ答へは一番簡單な答である。しかしそれ許りではない。自分達は資本のなるべくいらない仕事を、生活費のなるべくかゝらない處で始める必要があつたことは事實だ。しかしそれ許りではない。都會でこの仕事を始めなかつたのは彌次馬を恐れることも理由になるがそれも一番の理由では勿論ない。ともかく安く土地を得たいと言ふのが最初の理由だつたとしても今になれば田舍、それも都會から隨分はなれた田舍で仕事を始めたのは大へんよかつた。一番よかつたのは自分達が仕事を自然にすることが出來ることだ。見る人がゐない。だから從つて見せる氣もない少しもこだはらずに勞働することができる。へんに思はれることを心配したり、內心得意になつたり、內心得意になつてゐると思はれやしないかと思つたりする必要がない。僞善者になるとか見えをかまふとか言ふ心配がまるでなく。仕事を自然にすることができ、仕事をするよろこびを直接に純粹に味はふことができる。このことは大變よかつたと思ふ。』

どこまでもあくどく亂れた現代の都市を去つて人々が能きるなら田園に住みたいといふ氣持になる理由はこれで充分である。健康や經濟のためにではなく、卑しい僞善者や見せかけの僞惡者になつてゐらがつたりする以前に、すなほあるまゝの人間として生きてゆかうために、私達がせめては魂の田園へ歸つてゆかなければならない時はすでに來てゐる。ほんとうの生活とは、見せかけと野望とのない、晴れた日の大空のやうにものにこだ

はらない生活を言ふのである。うちらへ向いて一杯に充實した眞劍な生活をしやうと望めば、たとへどんなに皮肉な銀行家であつても、勢ひ突きつめた反省の鋭い生活をしなければならなくなる筈である。都會の場末の家にあるやうなごたごたした過裝飾は、田園へ歸つた人の心にもその住居にも不要になる筈である。生活は、そこで、その本然の無垢な姿へ歸つてゆくのである　土地の定價なことが田園の長所では決してない。空氣の證明で太陽の豊光なことが決して田園の美點ではない田園の都市に優れた特質は、田園には人間の誇張と虚裝と見榮とに感嘆したり嫉妬したり揶揄したりする者が都會に於いての程多く住んでないと言ふことにある　とも角も、人間が他の人間との交渉をより少くしか有たないために、人間がそれだけ僞善者や僞惡者になつたりしない安然に居られるといふことにある。因に言つてをくが、現代の鐵道線路に沿つた十里四方にある村落に於いては文字通りに純眞な愛すべき田舍者を發見することはよほど難かしいやうである。

×　　×

都市を逃れて田園へ轉り住まうとする多くの人々を、逃避者と呼ぶのはすでに當らない。經濟學者でまた統計學者であつたイテマ、ステルネクは都市人の田園への轉住、田園人の都市への移住を同化作用であると呼んで、次のやうなことを書いた。

『近來、村落を改良して一般に都市的の優秀なる地位に至らしめやうと欲し、都市より村落に向つて移住する者が多きを加へるやうになつた。先づ第十九世紀の後半期から、都市の近郷に大多數の移住者を見るに至り、且つ村落より都市に來たる者よりも、都市人の村落に移住する者が遙かにその數を加へ來たつた。かくて、村落人は都市的生活組織の同化するところとなり、都市生活を貴ぶ都市人はこの同化の原動力となるものであつて、とに角都市の利益となるに至る。これに依つて、此の同化作用は都市の利益のために村落から多數の人口を得る補助となり、從つて、都市居住者を村落から得るに至つた。この二重の影響のために

この僻邑の村落的性質は直ちに消滅し、村落の居住者は村落に轉住し來る都市人と全くその趣味及び慾望を同じうするに至る。こゝに於いて、都市よりする勢力ある人々の轉住は便宜ある村落に向つて行はるゝに至る。しかして、これ等轉住者は自からその近郷に都市的習慣を擴布し、從つて都市の習慣及び村落の愉快は茲に結合せらるゝに至るであらう。蓋し、都市人は純然たる都市的性質を有し、その性質は村落人の歡迎する所であるからである。』

こゝに說かれた同化作用の圓滿なる理想的な生長は、もとより望ましいことではあるが、例へば都市生活をし得る程の充分なる敎養もなく、適當なる素質をも有たない輕薄な田舍者が、唯表面の名のみ都市に徒らに寄寓して、不完全な亂れた生活を初めた場合は、こゝに賞揚されたる同化作用は、まことに慘めな混濁作用と墮落し果てる危險を有つてゐるものである。今日までの多くの信ずべき統計に依れば、田園より都市への轉住者の大多數は、田園に於ける生活上の種々なる不安と焦燥と壓迫とに脆くも堪えかねて、定まりたる的もなく、唯うつらうつらと華やかな都市の夜光に憧がれて集合した火蛾にも似たる者であるのはほんとうである。同化作用はすでに毀されやうとする田園にての困惑者は、都市にての一層の慘めな窮迫者と墮し去ることは當然でしかあらぬ。又都市人の田園に轉り住む者の大多數は、都市の激しき不當なる戰ひに心身俱に疲れ傷き、唯僅かに休息と療養とを希つて、田園を求めたにすぎない樣子であるのもほんとうである。從つて、同化作用がこゝになこやかに行はれやうとは、現在の有樣では、まだまだ無理な希望であるらしく思へるのである。即ち、都市の田園と、この兩者俱に未だ充分健全なる發達生長を遂げてゐないからであると考へられるのである。

× ×

迷信を犯罪とは、今も、都市人よりも田舍人に多いであらうとは、誰もが想像することである。筆者の住居は大阪から汽車で約二十分ばかりの郊外であるが、こゝにはすでに都市では求めても聞

き得なは奇怪な噂を、寡聞な筆者もいくつとはなく聞かされなければならないのである。六尺あまりもありさうな、一見不快な土黒い蛇が今も附近の小さな用水式の邊りに他の小さい蛇と倶にうろうろしてゐるのであるが、都市から來た或る青年達が面白半分にその蛇を捕えて殺さうと計つた時どこの村にも大低一人位はゐさうな、文字もよめない『いなりさけ』の婆あさんが、怒つたり泣いたりしてその蛇の助命を乞うたのである。婆あさんの話によれば、その蛇は今からずうつと以前、豊臣秀吉に騙し打ちにされた何某かといふ武士の今に浮び得ない亡念であるさうである。彼は秀吉の世紀から今に至るまで、無念至極だと秀吉をつけねらひ乍ら、毎日、附近の農家の鶏卵をねらつてのらりのらりしてゐるのである。また、村の或る一角に大阪への通勤會社員を當てこんで建てた、四棟で十一軒の借家があるが、ある夜更けこの借家の共同風呂の湯槽の中で、三人の子坊主が袈裟を着たまゝ湯をつかひ乍ら、何某氏の妻君を手まねいたのである。それからしばらくして今度は髪を亂した若い女が湯をつかつてゐたのを見たといふ者も出て來、その怪しい正體をうらなつてもらつたら狸であるといふのである。そして奇怪千萬にも、この圖々しい狸は毎夕石炭でくすべてゐるその風呂場のま下に住んでゐるといふのである。それから三十日もたゝないうちに、その十一軒の借家のうちの八軒までが急いで轉宅してしまつたのである。(この話は極く最近の事實である。狸が怖ろしかつたのでは決してないが、筆者もある都合でそのうらの一軒から今の住居へ轉居した。)その借家主は不意に空いてしまつた借家の家賃を一體に四割値下げしてしまつた。

田園に於ける犯罪は、都市に於けるものよりも一層粗野で慘酷だと言ひならはされてゐるが、おそらくは事實が統計以上の數をあげてゐるのは、田園に於ける私生子の出産數である。或る統計では、出産兒一〇〇に對して、佛國は都市一五・一三田園四・二四、白耳義は都市一四・四九、田園五・八八、デンマアクは都市一六・〇五、田園一〇・〇六、ザクゼンは都市が一五・三九、田園が一四・六四等

であるといふ。が、これらの統計は事實の前には殆んど無意味で、多分、田園での出産率の立が高いであらうとの推斷は決して誤つてはゐないやうである。即ち、田園は人目につき易く嗤にのぼり易いので、不幸な求めない姙娠に度を失つてしまつた田園の娘たちは、多くは誰にも知れないうちに都合して近くの都市へまぎれ込み、『心安い小母さん』の隱れ家か、或はいかゞはしい私立姙娠預り所かで、秘密な赤ん坊の仕末をつけて、厚顏にも再び『處女』になりすまし、故郷の婚禮の場へ歸つてゆくのである。憎い對手を力まかせに裏山へ引きづり込み、散々意趣晴らしをした果ては對手の兩耳を杉の木へ釘でうちつけてそのまゝ悶え狂つて餓死せしめ、或は對手を毆殺して切りとつた首は裏の竹籔深くへ埋め込んでしまつたりする程の慘忍な流血事よりも、優つて慘らしく罪深い田園の犯罪は、この一度は私生子を生んだ女の二度目の『處女』を裝ふことである。

かうして、田園が今もなほ馬鹿らしい迷信や無意味な犯罪などで淫され穢されてゐる間は、現今の都市がその救ひがたい黃金中毒と卑俗と輕薄とに騷がしく血まみれになつてゐるのと同じく多分永久に、その美はしき田園の本然の姿へまで明るく甦生することは能きないであらう。田園の田園としてのまことに健やかな發達への黎明は、田園を金と科學とで美々しく忠實に飾り裝ふことからは決して來ず、單に田園人とのみ言はず、全らゆる地方、階級の人間のすべてが、眞に健全なる人間性への靈性への、人間の神への無條件的な柔順なる復歸からのみ招來されるであらう。

× × ×



創作

蠅

別所悌一

――この物語のあつたやうな村が現在でも日本のどこかにあると言ふことはほんとうである。――

嘯は二十四時間ならずして村外れの小川を越えた隣の地方にまで傳えられた。大變な騒ぎであつた。全く大變な騒ぎであつた。それは村始まつての大袈裟な、全く異常な出來事なのであつた。で七十二才になる庄平老人までが若い者達と同じやうにすつかり昂奮して、その大變な出來事を二三日はまるで有頂天になつて饒舌つたりしたものである。

金星團といふ三十名足らずの旅廻りの曲馬團の一行が、各地での豫想外の不入りの果て、村境の小さい峠を辛うじて越ねて、すつかりみすぼらしい姿で榮川村まで辿り着いたのは最早や九月も末

の頃であつた。鐵道の驛がある町までが約二十里ばかりもあるといふ山深い榮川村には、毎年或る一定の時節を限つてその近在の地方から必ず廻つて來る顏馴染の小人數の興行團の外には、嘗て曰新らしい曲馬團などの廻つて來たことなどはなかつたので、何處からともなく不意に現はれ出た金星團の氣まぐれな一行には、村の人々は、先づ少からぬ驚きと昂奮とを與へられたのであつた。あくどく滅茶苦茶に色塗られた大袈裟な廣告のびらが、直ぐ、狹い村の四つ辻毎に新しく吊り下げられたのは言ふまでもないが、その誇大な馬鹿らしい廣告に依つて、金星團の座員全部が五十數名であること、『アメリカで最新流行の魔術』をして見せること、一行は百九十里も遠方の東京からわざわざこの村へまで來たことなどを知ると、村の人々は一樣に單純な驚きの聲をあげて、まだ見もしない素晴らしい曲馬團の演技者のいゝ加減な噂をし合つたり、その日のための小使錢の苦面をしたりし始めたのであつた。

初日は十月一日にかゝることになつた。朝十時の開演だと言ふのに、朝の八時きつちりにはすでにその古つぼけた天幕小屋の周圍の空地には、氣の早い子供達が大勢集つて騷がしい聲をあげ始めてゐた。今日は畑や山の仕事を臨時にをいて、一年にさう度々はない樂しみを樂しみたいために集つて來た村の人々の姿も見え始めた。九時半すぎには村の若い巡査も人のいゝ笑顏で天幕小屋に現はれた。高原の秋は、まことに、靜かでなごやかであつた。

演技は村の人々には全く珍らしい金屬管樂器と太鼓との混奏された抒情的な音樂に依つて『夢』のやうに始められた。皆んなは片唾を呑んだ。小屋は荒繩に依つて簡單に組立てられた粗末なものではあつたが、十時にはすでに殆んど一杯の人々が內部に行儀よく席をとつてゐた。五人しか教師のゐない村の小學校の上級生だけが七十人ばかりも、今日は校長の特別な取計らひだといふので、その五人の教師と倶に前の方に席をとつて、『東京から來たもの』を熱心に『見學』してゐた。演技はすゝんで皆んなの心待ちにしてゐた綱渡りの番にな

つた。急ぎ足で、若い女が派手やかに跳び出した。五人の小學教師はちよッと間の悪い樣子をしたが他の皆んなは嘘のない激しい拍手を送つた。一見十七八才位に見えて、誰にもちよつと美しいと思はせる樣な白い顏をしてゐたが、その女が、小屋の兩端から强く引つ張られた太い綱の上を歩いて中央までゆき、そこで天井から中央に下つた綱にぶら下り、その綱を素早く攀じて高い天井まで登り、そこから觀衆の頭上に弛ませて張つた小さい網の中へ跳び込んで見せると言ふのであつた。この女がこの曲馬團での一番の藝達者で、また一番の人氣者だといふことが皆んなにはすぐにわかつた。皆んなはこの女が出て來たことにすつかり滿足してゐた。そして期待の一切をこの女に賭けた。

女は紙張りの日傘を片手に輕く操つて、派手な色の靴下を注意深く運び乍ら、靜かに綱の上を渡り初めた。女は人々の不安を裏切つて、こんな容易な業には充分熟練してゐた。女は容易く中央まで歩いて來た。そして、そこで藝人らしく媚を含んで微笑つて見せて、日傘をつと投げ棄てるなり天井から下つた綱に細長い兩手をかけ、丁度猿を思はせるやうな恰好で素早くその綱を揺れ乍ら攀じのぼらうとした。彼女は確かに四五尺は攀じのぼつたかも知れぬ。が、あとは誰にもわからなくなつてしまつたのである！

——あゝ！——と女は確かに叫んだ。

女は不意に酷い音をたてゝその場へ投げつけられてしまつたのである。身體は投げつけられた屍體のやうに動かなくなつてしまつた。大聲が周圍に起つた。誰かゞ女のそばへ驅けつけた。續いて崖の崩れるやうな不氣味な音が、皆んなを本能的にとびあがらせた。小屋の屋根柱の太い丸太が實に思ひがけなく、一杯の觀衆を目がけて無雜作に落ちかゝつて來たのである。

あとは、もう文字通りの滅茶苦茶であつた。惡罵と悲鳴とが同時に湧きおこつた。子供達の度を失つた泣き聲が聞えた。女達は狂つて男を突きのけて走つた。小屋は脆くも崩れかゝつて來た。誰かゞ落ちかゝる柱でしたゝか背部を打たれて氣を

喪つた。死にもの狂ひの爭ひが人々の間に起つた。皆んなは小屋の出口へ潮のやうに溢れてお互を突つ倒し合つた。滅茶苦茶に罵り合ふ聲が村一體を殺氣立たせた。何が何だか分からない瞬間が來てしまつた。

——順吉だ！——と誰かゞ叫んだ。

——順吉の野郎だ！——と皆んながすぐ叫び始めた。

——殺つてしまへ！——と誰かゞ叫んだ。

——殺つてしまへ！——と皆んながその氣になつて喚いた。

群衆は亂れて村の狹い通りに溢れた。村中はもう底抜けの大騷ぎになつてしまつたのである。

順吉は啓吉の一人息子で、今年はもう十九才になる村では屈竟な若者であつた。身體は充分背高く頑丈で、一見單純で善良な若者ではあるが、どこか年に不似合な陰鬱な氣難かしさうな樣子をみせ、鋭いやうで、またどこか足らないやうな沒表情な眼を有つてゐた。彼は誰一人にも親しまないで、やはり村の人々からは餘り好意を持たれてはゐない無口の父の啓吉と、唯二人きりで、淋しく音もたてない虚ろな日夜を送つてゐた。彼等の狹く暗らい家は村外れの杉林のそばに小高く離れて建つてゐた。村の人々は彼等の家を狂人の家だと呼んで、滅多に近寄らないことにしてゐた。順吉が村の人々からは公然と狂人の順吉と呼び棄てられてゐたからである。

順吉が事實狂人であつたかなかつたかは、實際のことを言へば、村の人々にもよくはわからないのであるが、啓吉の奴が馬鹿野郎だから順吉があんなになつてしまつたのだと、今も村の人々は順吉の話をする毎に、父の啓吉を馬鹿野郎だと嘲笑ふのを癖にしてゐた。で、順吉の家は馬鹿野郎と狂人との隱れ住居だつたのである。

話はずうつと前のことに戻らなければならないのであるが、啓吉が未だ順吉の母である女を知らなかつた頃、當時二十才に足りなかつた啓吉は、或る日、彼れがこつそり掻き集め得たゞけの金をすつかり懷にし、一人寂れて老い殘つた母を廣い家に置き去りにしたまゝ、ありふれた放蕩息子と

同じやうにして故郷の村境の峠を越え、誰にもうまく見つからないので不意に姿を消してしまつたのである。

村では、一時は、啓吉は可哀さうに誰かに殺されたのかも知れないと言つて、事實附近の山々を尋ねて歩く程の大騒ぎをしたのであるが、やがて啓吉が相當な金を持つて自ら好んで村を出ていつたらしい樣子が知れると、皆んなは腹を立てゝ躊躇なく啓吉を塵のやうにうち棄て、彼をすつかり村の者ではない惡者扱ひにしてしまつた。どこかの女と一緒に東京へでも走つたのだらうと、村では若い者が時々噂にしてゐた位であつた。

啓吉は、事實、東京へ出て來た。村を急いで出た日から數日後、多少は自分の輕るはづみを後悔し、何故ともなく周圍にもの怖ぢし乍ら、彼は唯一人で　全るで見知らぬ東京の激しい雜踏の中へ半分は氣を失つたまゝうつらうつらと紛れ込んで來てしまつたのである。

彼は母親育ちの一人息子で、一緒に隱れて村を逃げやうと言ふ樣な女には知り合ひもなかつた。彼は全るで世間知らずの裸の田舍者であつた。彼がかうまで思ひつめて東京へ出て來たのは、唯極く單純な、東京の賑ひを一目でも見たいと言ふ一途な子供らしい氣持からなのであつた。彼は今日でも哀しく記憶してゐるのであるが、彼が小學校の六年級の生徒であつた時、卒業前の修學旅行に學校から連れられて、山深い榮川村を生れて初めて出、鐵道の驛があるとか言ふ二十里先きの町まで大勢で行つたことがあるが、その町で、彼は汽車の動くのを初めて見、煉瓦と石とを積み重ねた西洋式の巨大な建物を初めて見、電燈を見、キネマを見、その他の驚くべき數々の不思議を實に生れて初めて見たのである。

——榮川村を五十箇も集めたつてこんな大きな町はできない。——と、生徒を連れて人口二萬に足りない町を見物に歩かせ乍ら、彼等の年若い敎師は自慢らしく言つて聞かせた。

——先生。東京ちゆうと、これ位の町ですか。

——と、誰かゞ列を亂し乍ら大きい聲を出して訊いた。

——なかなか！——教師は實は大阪附近の田舎に生れた男なのであるが、無茶に語氣を強めて驅馬のやうな子供達に言つてきかせた。——先生の生れた大阪でさへも、こんな町の千倍位の大きさがある。東京は大阪の倍もあるんだぜ。行つて見なくちやお前達には東京の大きさは分らんよ。

——先生！——啓吉はすつかり昂奮して教師を見上げた。——日本ちゆうとこは大きい國ですなあ！

——啓吉！——教師はだしぬけに込みあげてくる嘲笑を輕うじて制え乍ら言つた。——日本ちゆうとこは大きい國ですよ！

あの頃からはすでに數年が過ぎ去り、啓吉も村では立派に一人前の若者になつたのであるが、性來の内氣な彼は唯一人の母と愼ましく親讓りの家に住み、どこのお宮にも必ずゐるやうな妙に氣ごつた田舎くさいきざな不良少年達の群にも加はらず生眞面目に畑や山の仕事に勢一杯の働きをしてゐたのである。が、時々、母の寢靜まつた夜更けなどに彼がこつそり空想しまた希つてゐたことは、一度はあの汽車と言ふものに自分も乘り、百九十里も遠方にあると言ふ東京の素晴らしい市街を、どうでもかうでも、見て來たいと言ふことであつた。村の人々が未だ一人だつて見ず、小學校の教師の二三人位がそれも極く僅かにしか知つてはゐない日本の中央を、彼はどうしても自分が先づ見て來たいものだとこつそり考へ初めてゐたのである。

幾重にも嫌やな程深く執拗く山にとり圍まれた榮川村の定まりきつた生活は、山に生れて山で育つて來た啓吉の若い心を、時々は、妙に濕つぽく重苦しく、陰鬱にした。山はいつもいつも重々しく單調で、どうにもならない絶望的な暗らい氣持を内氣な啓吉に有たせた。普通の者だつたら最後まで感づかないで過ごしてしまふ山の幽かな濕氣にさへも、啓吉は殆んど耐え難い程の不快な嫌惡を覺え初めた。せめて數年前に一度見たあの賑やかで平明な町へまでも出たいと、啓吉は遂に考へ初めた。同じ山道、同じ杉林、同じ小川、そして、笹籔のこかげの一本の小さい樹だつて、昨

日も今日も厭かずにちつとも變らない枝振りで、同じ所に、執拗く無表情に突つ立つてゐるのである！　啓吉は全るで熱病を病んだやうな苛々しさで村を脫け出る決心をかたくしてしまつた。そして、思ひつめた內氣者の並外れた大膽さで、彼は遂うとう一人の老母を棄てゝ、彼には長く怖ろしかつた道を、全然これと言ふ的も有たないで、不安な一人で、憑かれたやうに東京へ出て來てしまつたのである。

そこには、彼を充分無條件で吃驚させるものばかりが、廣い廣い底氣味の惡い程親しみ難い大きな市街に、騷いで、渦を卷いて、目苦るましく一杯に溢れてゐた。狂つて突つ走る自動車や、電車や、とても巨大で壯麗な僞ロマネスクのビルデイングやゴシツク擬ひの敎會堂や、輝やかしく華麗な宮居や劇場やホテルや銀行や商店や陳列所や、珍らしく近づき難くて妙に彼の方から不安になる程な贅美な食事や、美しい女や子供や、派手な衣裝や廣告や、だゞつ廣い街路や橋や、人を馬鹿にしたやうな齒切れのいゝ言葉などがそこにあつた。

喜びよりも怖れを以つて、滿足よりも寧ろ失意に似た空虛な惱ましい胸を抱いて、彼は金があつたゞけの月日を、色んなことを無節制に經驗し乍らも、豫期に叛いて酷く淋しく、何をするともなく唯一人で力なく東京の渦の中に生きてゐた。

彼がもうごうにもならない程窮迫して、皆んなに馬鹿扱ひにされるために再び峠を越えて故郷の村へ歸つて來たのは、彼が村を出てから二年目の秋であつた。村の人々は彼が多少は豫期してゐた以上の敵意と反感とを見せて彼には好んで近づかうとはしなかつた。二年前には彼の完全な所有であつた親讓りの山林は、すでに伯父と從兄との一家のために大半は奪はれ、老いた母は出奔した不孝者に會ひたがり乍ら淋しく死んでしまつた後であつた。啓吉は一切を諦めて、今は自らを冷たく嘲りまた勞はり乍ら、村外れの狹い家に引き籠つて、樂しまない生涯を默つて一人で送らうとしてゐた。

それから二年ばかり後の秋の或る日、村の人々が全く驚いたことには、啓吉の部室へ不意に子供

を抱いた東京の美しい女が現はれたのであつた。

――これはあなたの坊やよ。――と、女は啓吉の目の先へ難がる子供を突きつけて言つた。――坊や。これは坊やの父うさまよ。これが坊やの父うさまよ。ねえ、坊や。坊やは母あちやんと二人でどんなに長い間父う様を尋ねて歩いたでしよ。

啓吉は殆んど自分を失つて、女の冷たく白い顔を凝乎と凝視めた。彼は、初めは、こんな都會の美しい女を山奥の田舎者の自分が嘗て嘘にでも知つてゐたことがあつたのだらうかと怪しんでも見たのであるが、よく考へれば、彼が少時居た東京の或る場末の下宿屋にゐた女であることが懐ひ出された。

――これはあなたの子供よ。わたし一人ではほんとに困つてしまふ。――と、女は啓吉に執拗く迫つた。

毎日顔だけは同じ下宿で合はせてはゐたが、こんな想像もしなかつた子供が實際に自分の子供であるだらうかと、啓吉は今は醜く卑しく見み初めた女の白い顔を、悪夢をでも見るやうに、魔されるやうな氣持で呆然と凝視めた。女が希はない子供の處置に氣の毒な程困つてゐるらしいのが、彼にもやうやくわかり初めた。

彼は女の私生子の父親になつた。女は東京に置いてある荷物を片付けて必ず急いで再び村へ歸つて來るからと泣いて約束してをいて、子供を途方にくれた啓吉に殘したまゝ、逃げるやうに慌てゝ峠を越えて去り、決して再び啓吉の村へは歸つて來なかつた。啓吉は一層村のもの笑ひになり乍ら三つになつたばかりの恵まれない子供と倶に、酷く困惑し窮迫した生活を初めた。啓吉は子供に順吉といふ名をつけた。

順吉がどうにかかうにか五つになつた春、啓吉はもうこのうえどうしやうもない慘めな貧乏に耐えかねて、長い間考へ倦んだ果て、自分の所有であつた山林を奪つてしまつた從兄の家へ僅かな借金を乞うた。從兄は啓吉を一も二もなく突き離してとりあはなかつた。そこで啓吉は二度目の借金に出かけて再び冷たい拒絶にあつた歸り際に、從兄の有つてゐた小使錢を入れた大型の財布をこつ

そり懐にして、順吉への菓子を買つて自家へ歸つて來た。

その翌日は今も決して啓吉には忘れられない日なのであるが、戸外で氣嫌よく一人遊びをしてゐた順吉が、不意に痙攣けたやうな激しい聲で泣き初めたのは、朝も未だ九時頃であつた。

――この野郎だ、この野郎だ！縛つてしまへ、縛つてしまへ！――と、戸外では大袈裟な叫び聲が聞えた。

啓吉は即座に顔色を變えて裸足で戸外へ跳び出した。大人も二三日は混じつた七八人の惡戯盛りの子供達が、その邊で拾つたらしい古びた荒繩で幼い順吉を二重三重に縛りつけ、跪いて狂はしく泣き叫ぶのを面白半分に引きづつたりうちすゑたりしてゐるのである！

――馬鹿！さあ、皆んなの奴、承知しないぞ。――啓吉は跳び込んで滅茶苦茶に怒鳴りつけた。

――どうするんだい。――對手は多人數を頼んで嘲笑つた。――金を偸んだのはお前か、こら、この財布に見覺えがないとは言はさんぞ。

そばには啓吉の從兄が石の柱のやうに突つ立つてゐた。見せつけられた財布は昨日啓吉がこの從兄の家から偸んで歸つた財布である！　どうしてこんなものを順吉が戸外へ持ち出したのか、都合わるく、順吉が邪心なく玩んでゐたのを彼等に見つかつてしまつたのである。

確かにこの日から、もの怖ぢをおぼえ初めた順吉は繩を極端に怖はがり初めた。繩といふ繩、そして繩に類した細長い一切の紐や布切れを見付ける毎に順吉はしつかり顔を掩うて怖はい怖はいと泣き叫んだ。この病的な傾向は順吉が年をとるに從つて救ひ難い生得的なものとなり初め、そのいけない病勢は村の氣まぐれな惡戯者が冗談半分に順吉に繩を見せつけ、首に卷き、時としては啓吉に隱れて順吉を杉の木に縛りつけたりしたことに依つて急激に募り、今では早や、揶揄ふ者の方が反つて氣味惡るがらなければならない程の危險な狀態にまでなつてゐた。即ち、今では單に繩を怖れて顔を掩ふだけではなく、常はあんなにまで柔和に口笛など奏いて通りを歩いてゐる順吉が、一

度びどうかした調子に縄を見付けるなり、彼の方から縄の方へ血相を變えて摑みかゝり、人のもつてゐる縄はその人を突き倒してでも奪つて、鋭い歯と爪とで粉々に噛みちぎり破き棄てゝどんなに確く縛つた縄をでもきつと解いては噛み破り、村中を大聲に怖はい怖はいと叫び乍ら縄を探して歩き狂ひ廻るのである。で、村の人々は縄を解かれて垣を崩されないやうに、縄を解かれて牛を逃がさないやうに、鶏小舎を毀されないやうに、家を倒されないやうに、村の通りで帶へ噛みつかれて裸體にされないやうに、全らゆるところから縄と縄に似た一切のものとを隠してしまはなければならなかつた。座敷牢へ入れやうと言ふ相談が再三もちあがつて、今までに數度も座敷牢へ順吉を押し入れたのであるが、彼はいつもその嚴強な腕の力で釘づけにした格子を平氣で毀し、こつそり牢を出てしまふので、皆んなは唯彼に觸らないのが一番いゝことだと近頃は考へ初めてゐた。それに、縄を見ない時の内氣でもの靜かな彼の樣子が、幾分は可哀さうだとの氣が皆んなにあつたのである。

——順吉よういー！　縄よういー！

——縄よういー！　縄よういー！

曲馬團の崩れた天幕小屋を押し出されて來た村の人々の一行は、今はわけのわからない氣まぐれな群衆をも加へて、亂れて騒がしい一團となつて村外れの順吉の家へ押しよせて來た。先頭に立つた若い數人は、銘々縄と棒切れとをすでに用意してゐた。今日こそは順吉の奴を縄でしつかり縛りあげて、どこかへ投うり込んでしまはうと意氣込んでゐたのである。

落ちてうちどころの惡かつた曲馬團の女は、あのまゝ死んでしまつたのだとも傳へられ、否、姙娠三ヶ月であつた彼女は可哀さうにもあの場で苦しんで流産してしまつたのだとも、まことしやかに群衆の中で囁された。皆んなは一途に順吉親子を憎み初めた。金星團の一座の者の怖ろしい激昂をおもつて、彼等の調子はづれな激昂も二重にされた。いつの間にかこつそり天幕小屋へ忍び込んで最も大切な天井の縄を解いてしまつた狂人は、きつと順吉に違ひないと信じてしまつたからである

――どうしたんだい。靜かに歩けやい。――啓吉が異樣な物音を訝つて出て來て。殺氣立つた豫想外の群衆にすつかり吃驚してしまつた。

――どうしたんだい。靜かにしろやい。――啓吉は目早く繩と棒切れとを見つけた。――馬鹿め順吉をそんなことで嚇さうたつて駄目だぞ、馬鹿！　順吉をお前達の玩具にさせて儂が默つて見てゐやしねえぞ。順吉が殺される前に、お前達をこの儂が一人で殺つてしまつてやるね！

――それ、殺つつけろ！　ませたことを言ひよるわ！

群衆は殺倒して狹い部屋へ跳り込んだ。啓吉は其場にあつた鉞を振りあげて群衆の中へ身を投げ出した。隣の部室ではこの數日來風邪をひいて寢床にゐた順吉が、茫乎とした氣分で大きな欠伸をした。

――繩だそ、繩だそ、順吉、怖はい繩だぞ！

――繩を持つた先頭の一人が、幾分はいつもの揶揄ひ半分の氣持で、繩の太いのを順吉の目の前で振り廻して見せた。

――怖はい！　怖はい！

丁度獅子よりも素早い狂人の本能で、順吉は、即座に、その男に跳びかゝつて繩を持つてゐた腕に死にもの狂ひで噛みついた。男は脆くも押し倒された。第二の男が太い棒切れで順吉の頭をしたゝか殴りつけた。順吉はその男の不用意な胸へ石のやうな頭を突つ込んで、男を其場へ昏倒させてしつまた。あとは、もう全るで野獸の撃爭のやうな激しい戰ひが、村の人々の間に卷き起つてしまつたのである。ものすごい不氣味な叫び聲が亂れた村を一層亂れたものにした。

少時して、今はも早やすつかり疲れて怖ぢ氣立つた群衆が、十數人の重傷者を肩に運んで、この華々しい復讐の凱旋を倒れた天幕小屋の女へ傳へにゆかうと、順吉の家を引きあげてしまつた後には、順吉親子の慘らしい屍體が、着物を無遠慮に剝ぎ奪られ、首といはず胸といはず八重九重にあるだけの繩でぐるぐる卷きにされたまゝ、折れた棒切れや鼻緒の切れた下駄などの亂れた中に、獸のやうに重なつて棄てられてあつた。

時事

◉帝都の本建築促成策

復興資金の不足と建築土木材料人夫の拂底から既に着手して居なければならぬ筈の區劃整理地域外の本建築が延々となり帝都復興に遲延を來して居る又一方罹災者も經濟的に打撃を受けたから建物全部を耐震耐火的の構造にすべき所を間に合せ的建築にする傾向が見えて來たので東京市及復興局では樂てから之に一方ならず頭を惱ましてゐたが永田市長、直木復興局長官、吉田市助役等は屢々協議の結果政府の諒解を得て官民合同の大建築會社を創設し建築資金の乏しきものには年賦償還の方法で資金を會社から貸付け尚建築設計から大工、左官等の人夫、セメント木材石材等も希望に應じ會社から極めて低廉に提供して徹底的の耐震耐火構造にさせ市民の本建築を助成する方を執る事になつた

◉耐震建築新研究

東北帝大工學部機械工學科主任教授宮城音五郎博士は、今回首尾よく文部省科學奬勵補助金一千圓を得愈々破碎力の速度と物體の破碎との關係特に地震に因る建造物破壞現象に關する研究を始むる事となつたが博士は之れを理論上より又實驗上より研究せんとするもので、時節柄非常に期待されて居る、右研究に就いて宮城博士は

「地震を中心として破壞力の速度と物體の破碎との關係を學理的に實驗的に研究せんと思ふのです、御承知の通り同じ力のものを以て物を破壞する場合其の速さに依つて其の物の破壞の狀態は違ふものです、例へば同じ硝子を石で破壞する場合にしても非常な速さを以て投げつければ石が拔けて行き若し之れを緩やかに投げれば硝子は滅茶々々に壞れて仕舞ふ、——地震の跡を見ても寸分違はぬ大きさの煙突が或るものは上の方に於て或るものは中ごろに於て又或るものは根元に於て折れて居ります、即ち私は前にも述べた樣に破壞力の速度と物體の破壞との關係を研究し之れを地震に及ぼして見たいと思ふので、此の研究にして僥倖にも完成すれば家屋なり煙突なりを建造する場合餘程參考になるだらうと考へます」

◉土木建築材料品規格統一

規格統一調査會は震災復興事業着手前に土木建築其他の基礎的材料品の規格を設立する爲めに審議を急いで居たが最近調査進捗し既に總會並に用語委員會の手を經て答申を了し目下農商務省參事官の手で公示文案の字句整理を爲しつゝあるが幷は試驗片針

金薄板經厚さ及其呼稱の三項目であつて右の成文を得次第陸海軍遞信内務其他の關係省を持廻り公示すべき段取りであつて次に用語委員會に附議するもので近く其運びに至るべきものは普通煉瓦、耐火煉瓦、空洞煉瓦、鍛鋼品、鑄鋼品、銑鐵、電線、電球、ネヂ等で又本年中に公示豫定のものは

鐵材＝土木建物用、機關用、造船用、鐵道用、鋼管用

木材＝素材（丸太、細長丸太、枘角）製材＝（挽角、挽割材、板盤）

の重要品目である而して右の品目に就ては公示と同時に各省の用材規則を改正し公示規格を同一ならしめ以後諸官衙並に公共團體等の使用品は全部此規格に依る事となるので一般民間の規格に對しては別に強制力を有せざるも諸官署の製出又は買上に使用するものは尨大なる量に達する關係上民間使用品も自然此規格に從つて製出される事となるべく此處數年にして英米商等に於ける一般製造工業其他建築土木造船鐵道電氣電線電球煉瓦等に關する如く技術上に一大整理的單純化が行はるゝに至るであらうと期待されてゐる

◉出現した新東京の復興振り

十萬に近き生靈と、五十五億の財寶を奪ひ去られた、あの追憶するだに痛ましい慘禍の日から、既に滿一箇年の歳月は流れた

暫く街頭に佇立して、眼を閉ぢて靜かに默想する時、吾等の眼底に荒寞たる灰燼の跡が展開する、あの當時、住居と財寶を奪はれた痛ましさに、燒跡を訪れては腕を拱ぬきつゝ、大自然の暴威に戰慄を感じ、野天の原始的生活に、徒らに嘆聲の聲のみを洩らしつゝ全く茫然自失の態にあつた、人の子達も餘燼尚ほ冷め切らぬ我が家の跡に、燒けトタンを拾ひ集めて雨露を凌ぐに足る堀立小屋を建てた者を眼にした時、皆一樣に吾に返つて、老いも若きも、男も女も一家を擧げて、朝早くから夜遲くまで、燒跡の整理に力を盡して、我が家の建設を急いだ、トタンと木杭、針金と釘それも燒け焦げたもののみを拾ひ集めて建てた、牛式の堀立小屋ではあつたが、雨露を凌ぐには充分であつた、親戚故舊に身を寄せて氣兼れ勝ちな日夜を送つて居るよりは、如何に自由で、如何に心安かつたであらう、吾も吾もと、避難先から燒跡へ復歸する者が日毎に多くなつて、果ては大東京に見限りをつけて、故山に、他鄉に安住の地を求めて走つた者迄もが立歸つて、燒跡の營みに日も尚ほ足らぬ顔に身を碎いた、かくて、見渡す限り、大建築物の殘骸の外に眼を遮る一物もなかつた燒野原の至る處から晨に夕に炊煙が立ち昇り生活の爲めの活動が始められた、併し、此の燒けトタン張りのバラック小屋は、所詮雨露を凌ぐ假の住家に外ならなかつた、商家はいふまでもなく、たゞ住居する丈の人々に取つても、幾多の不便さと非衛生さがあつた、家らしき家をと望んだのは人間の通有性ともいふべき對他的の外見を飾る意味からではなく復興の營みに必要缺くべからざる要求であつた、商家は店舗を求めた、製作業者は工場を求めた住居する丈の人々は、復興事業に疲れた體の安息所を求めた、敎師は敎場を求めた、學童は校舍を求めた、家無き子は宿り所を求めた、日毎夜毎船車に依つて輸移入される物資は、それを假りに納むべき倉庫を必要とした、その必然的の要求に迫られて手に職ある木挽は、大工は、左官は、建具屋は我が家の改築に取り掛ると共に、他の要求にも應じた、商家も、事業家も、社會事業家も、學校も、倉庫業者も、一齊に建築業者を求めて東奔西走した建築業者は、比較的低廉なる報酬に甘んじて學理と經驗に基き、優秀なる技術者を督勵しつゝ設計に建設に、夜を日に亞ぐ犧牲的の努力を拂つて、その要求に應じた、それは帝都の復興を一日も早からしめ罹災者の心を、一日も早く安定せしめんとする、社會奉仕的精神の發露に外ならなかつた、使用に堪へぬものと自己も信じ、他も之を疑はなかつた大建築の殘骸も、卓絶せる專門家の手に依つて補强工事が施され、修理を終つて、何等の不安もなく使用し得る樣になつた、かくて滿一年ならずして、新東京は出現したが

人間本來の向上心と、愛國的精神に立脚する復興慾とは、奈邊まで進展するか豫斷を許さないのみならず、本建築の日が切迫するに從つて、建築業者を要求する聲が高くなると同時に建築業者の責任は益す重きを加へるであらう

◉小學校建築費統一

接續町村の編入問題解決と同時に家屋稅の改正を行ひ學區統一を圖る筈であつたが學區統一はなか〳〵面倒な問題なので編入問題とは切り離して學區統一を實施することゝなつて居る然し乍らかくては徒らに學區統一の時機を失する虞れがあるので之れが前提として兩成郡の各小學校の建築費を編入と同時に少くとも大阪市に負擔さすべく府では市も亦之れに反對しないだらうと觀測して居る例へば東京市は最初市内各小學校の建築標準を定めて建築費の十分の四を負擔したが十一年からは市は原則として全額を補給することになり決算に於ては約八割補給して居り名古屋市は隣接町村編入の際千草村は大して人口も多くなかつたが編入後は人口が非常に增加し從つて兒童多く爲に學校を增設す可く餘儀なくされた若し學區で凡て設備費を負擔する事にせば非常に財源に困るのであつたが名古屋市が建築費の一部分を負擔したので千草町は非常に助かつたゝして東西兩成郡の教育費は合計二百二十三萬九千七百四十五圓だが新、改增築費並に修繕費を含む建築費は十三年度に於て東成郡二十一萬五千三百八十四圓、西成郡十一萬八千九百三十四圓、合計三十三萬四千三百十八圓に過ぎない、故に編入後兩成郡の小學校建築費を大阪市で補給した處が大して重い負擔を負ふ譯でなく編入後は飛田遊廓から五萬圓の遊興稅が市の收入となり其他各工場の動力、使用稅、電柱稅等を市で新設すればこれが財源は豊富である又市内の船場、島の内等の富有區には學校が少しも增加しないが昨年度に於て天王寺に二校、鶴橋に一校、鷺洲に一校宛小學校が增加し本年になつて神津村に分教場が一校建設された斯の如く隣接町村に學校增設の傾向がある加ふるに編入後は住宅が郊外に增加し學校は益々增加する故に大阪府は右に關する準備のため五日大阪市長各區長並に東西兩成郡長宛大正八年から十二年迄の五ケ年間の各町村の小學校新築改築增築等の敷地費擴張費並に積立金其他課稅等について調査を命じた

◉區劃整理實施期

いつ出來上るか想像のつかぬものとされてゐた東京の區畫整理もいよ〳〵實行に入ることになり復興局に今度こそは豫定通り仕事が出來るといふ豫定表が出來た、復興局の豫定では九月二十日までに區畫整理設計案を全部完成する筈であつたが役人が面會攻めに疲れて病氣缺勤がたんと出來た爲一週間遲れて二十六七日頃に市内全部の換地位置が決定する筈である市の方は市長問題や何かで多少遲れるさうだがこの換地設計によつて改めて清密な測量を行ひ杭打をやつて補償審査が確定し移轉命令が出てから金をもらつて三ケ月間にすつぱり移轉してしまはなければならないのであるが整理委員會で確定してしまつた換地ならその移轉に不服なものが出て來ても私訴を起すことは出來ないが補償金が不服なら審査會で確定したものであつても民事裁判所に持ち出すことが出來ることになつてゐる、早く片づけて區畫整理の模範にしやうといふ駿河臺も補償審査の方が遲れたりして移轉命令の出るのはやはり十月になるさうである、各地區共一月以上豫定に遲れたがその代り全市一齊に片づくことになつて來たから出來上る時はさう遲れまいとのことである最も遲れたのはマキ町線の十四地區と京橋の十七地區で十七地區は未だ豫定圖が出來てゐないさうである

◉町村編入と府經濟影響

東成、西成兩郡全部を大阪市に編入した場合の大阪府經濟の影響に就て府當局の調査した所に依ると現在府豫算總額千八百五十九萬一千七百七十三圓に對し編入後は百四十二萬八千二百三十七圓を減少して豫算總

額千七百十六萬三千五百三十八圓となり而して其郡市負擔に左の如き增減を來すことゝなる(單位圓)

	現在	編入後	增減
總豫算	一、五九一、七三	一、七二三、五三六	一三二、三七 增
市部負擔	一、三三九、六一四	一、三〇五、三九	三四、二五 減
郡部負擔	七八五、五五八	四九三、九三	二九二、六二六 減

右增減を見るべき理由の主なるものは聯帶經濟より市部經濟に接續町村警察費五十三萬六千三百十五圓、道路橋梁諸費百二十一萬三百八十一圓が移管され郡部經濟より市部經濟に兩郡內に屬する住吉警察外三分署費府債費、寢屋川、神崎川兩改修費、繰戻金小學教員恩給補充費、社會事業補助費、農學校一部改築費等八十八萬三千九百二十五圓が移管し且つ道路橋梁費十四萬五千圓が大阪市に移る外兩郡役所費が廢止せらるゝ結果等に依るもので更に歲入に於ては

現在の歲入總額一千八百五十九萬一千七百七十三圓內稅收入市部四百九十一萬四千六百二圓郡部三百六十八萬八千九百七十七圓稅外收入市部五百八十二萬三千六百十三圓郡部四百十六萬四千五百八十一圓に對し編入後は歲出に伴ふて減少を來し即ち歲入總額千七百十六萬三千五百三十六圓內稅收入市部五百二十五萬五千九百六十五圓郡部二百三十七萬九千百八十二圓稅外收入市部六百九十八萬三千六百四十九圓郡部二百五十四萬四千七百三十九圓となる

而して編入の結果府稅總額に對する一戶當の增減を見るに市部に於て四圓五十二錢六厘郡部に於て一圓二十八錢一厘を何れも減少し尙家屋稅、戶數割に於て一戶當り市部七十六錢六厘郡部一圓十四錢を減少し得る見込であると

◉町村編入と公園計畫

大阪都市計畫區域內に實施すべき公園計畫に關して都市計畫大阪地方委員會にては既に候補地並に設計の調査研究を行ひ市の內外に亘つて合計十一箇所の候補地を物色し府市協調の下に計畫を進行せしめ其場所が市內に屬するものは市の經費に於て郡部に屬するものは府の經費を以て實施する方針であつたが接續町村編入が實施されて東成西成兩郡が大阪市に編入さるゝことになれば十一箇所の公園候補地中從來郡部に屬してゐた農學校跡、城東練兵場、新淀川附近股ケ池附近、聖天山、帝塚山の六箇所が擧げて市內に包含さるゝ結果之を實施する場合は市に於て市費を以て之に當ることゝなるわけである、而して此外既設公園たる住吉公園四萬坪も編入に伴ふて市域內に入るのであるがこれは町村編入の爲其管理權が當然府から市に移ることゝはならない

◉大阪市の下水設備

大阪市水道部では接續町村編入を機會に一億五千萬圓の大下水道計畫を樹てた、之によると現在の大阪市を含んだ將來の超大大阪市を四つの計畫區域に分けこれに三ヶの大下水幹線を敷設して下水を遠く海中へ放流するといふのである

東部　大阪城を起點として上町の高臺筋を南へ貫くものを分水嶺としてこれより以東

北部　舊淀川（堂島川、土佐堀川）から北へ神崎川まで

中部　舊淀川から南へ關西線と木津川に圍まれた部分

南部　それより南へ大和川流域まで

而して東部では平野川流域に沿うて北へ天滿橋の上流寢屋川まで下水の大幹管を埋め城東練兵場附近まで持つて來て、平野川の河口へ下水處理場を設け南から流れて來た下水管の汚水をこゝで淨化して舊淀川へ落す、北部では新淀川に並行して下水に幹線を敷設し河口まで持つて行つてこゝに設け大處理場で汚水を淨化して大阪灣に放流する、中部と南部は現在の道路や都市計畫の路線に並行さして水管を南へ大和川沿岸まで導き更に大和川河口に設けられた處理場を通じてこれ亦海中に放流するといふ大計畫であるが、事業の財源や着手年度はまだ決まつてない、兎に角完成すれば今日、大川筋や、澪川に等しい枝川に流されてゐる鼻持ちのならぬ屎尿や家事下水、汚水、工場汚水などは市民の眼や鼻につかずいつの間にか、地を拔けて海中へ姿をかくすことになり衛生上からいつても傳染病などよほど豫防し易くなる因に大川筋や海中へ下水を放流する際に通る淨化裝備は目下市岡抽水所に設けて實際にやつてる

役員及職員

副會頭		片岡安
理事長	理事	池田寶
主記	理事	中澤誠一郎
同	理事	今林彦太郎
主計	理事	中村琢治郎
同	理事	松本禹象
編輯	理事	佐藤彰美
同	理事	本多二郎
同	理事	伊藤正文
同	理事	田中綱
同	理事	谷口廉兒

編輯係	江村郊邨
	鷺取陽
庶務係	西谷節
	鷺取陽
會計係	田村春松
	大和榮衛

會員	三六〇	會員（地方）	一四九
名譽贊助員	七八	終身贊助員	五七
特別贊助員	三〇	普通贊助員	五二〇
合計（九月二十日現在）		一一九四	

本誌及廣告料定價表

本誌			
冊數	定價	郵稅	
一冊	七拾五錢	貳錢	
十二冊	九圓	貳拾四錢	

廣告料	種別	金額
	半頁八圓	
	一頁拾五圓	
	特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ	

大正十三年九月廿八日印刷
大正十三年十月一日發行　（毎月壹回一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一
發行兼編輯人　江村恒一

大阪市東區內淡路町一丁目廿一番地
印刷人兼印刷所　大阪活版所

大阪市北區堂島濱通一丁目一番地堂島ビルヂング
發行所　日本建築協會
電話北四二一九一番
振替口座大阪三九七五

大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店　柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八四番

日本建築協會々報

日本建築協會々則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ眞實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ事務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス

會員タラムト希望スル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第五條　本會ハ其ノ目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員トス

贊助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽贊助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身贊助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　特別贊助員―建築ニ關聯スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　普通贊助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

贊助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各贊助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽贊助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身贊助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別贊助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ノ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通贊助員タラムト欲スル者ハ會員一名以上ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スヘシ其ノ諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ第十九條ニ關スル權利ヲ享有ス

會員ハ會則ニ從ヒ義務ヲ負擔シ會費ヲ任セタルコトヲ得

名譽贊助員ハ本會ノ總會及第十九條ニ基キ相當ノ利益ヲ受ク

終身贊助員、特別贊助員及普通贊助員ハ第十九條ニ基キ會誌配布其ノ他各種ノ利益ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申込ムヘシ

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ノ會員ニシテ本會ノ名譽ヲ汚スノ行爲アリト認メラルヽ者ニ對シ理事會ノ決議ヲ經テ其ノ權利ヲ停止シ若ハ之ニ脫會ヲ勸告シ又ハ例會ノ決議ヲ經テ之ヲ除名スルコトヲ得

除名ニ關スル手續ハ別ニ之ヲ定ム

第十條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　會頭　一名

二　副會頭　一名

三　理事長　一名

四　理事　十名（理事長ヲ以テ理事ヲ兼ヌ）

會頭ハ會務ヲ總攬シ本會ヲ代表ス

副會頭ハ會頭ヲ補佐シ會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス

理事長ハ會務ヲ總理シ會頭、副會頭事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス

理事ハ會務ヲ處理シ理事長事故アルトキ理事會ノ決議ニ依リ其ノ職務ヲ代理ス

第十一條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選擧ス但シ會頭副會頭ハ名譽贊助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

役員ノ任期ハ二年トス　但シ理事長ニ付テハ一年トス

殘事ノ改選ハ每年半數トス但シ引續キ重任スルコトヲ得ス

第十二條　役員ハ會員中ヨリ例會ニ於テ之ヲ選擧ス但シ會頭副會頭ハ名譽贊助員中ヨリ之ヲ選出スルコトヲ得

第十三條　本會ニ左ノ職員ヲ置ク

一　主記　二名

二　計算　二名

三　幹事　五名

四　書記　若干名

主記ハ庶務ヲ、主計ハ會計ヲ、幹事ハ庶務ノ補助ヲ處理ス

書記ハ理事長、理事ノ命ヲ受ケ會務ニ從事ス

第十四條　主記、主計、幹事ハ理事之ヲ互選ス

書記ハ理事會之ヲ任命シ有給トスルコトヲ得

第十五條　本會ハ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員會ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長ハ委員ノ互選ニ依リ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選トス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ網羅委員トシ諮問スルコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ常任委員會ノ決議ニ依リ委員長其ノ職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ每月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但シ理事會ハ必要ト認ムルトキハ臨時之ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於テ議案其ノ他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但シ緊急事項ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第十八條　本會ハ每年秋二季大會ヲ開行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　建築ニ關スル諸般ノ事項ノ調査研究

二　調査研究報告ノ發表

三　建築ニ關スル重要事項ノ議決

四　決議事項ノ實行促進

五　會誌ノ發刊

六　建築ニ關スル講演會ノ開催

七　建築ニ關スル講演會ノ開催

八　建築ニ關スル展覽會ノ公開

九　建築ニ關スル視察

十　建築ニ關スル有志者ノ懇親會

十一　現在ノ建築ニ關スル計畫

十二　其ノ他建築ニ關スル有益ナル事項

第二十條　會員ハ會費トシテ每年金拾八圓ヲ本會ニ納出ス但シ學生ニシテ本校ノ證明ヲ經タル者ハ每年金拾圓ヲ納出スヘシ

一時ニ金參百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル

特別贊助員ハ特別贊助員會ヲ組織シ本會ニ納付スヘキ特別贊助員每年額金拾弐圓ヲ本會ニ納出スヘシ但シ六期以內ニ金ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金贊助員其ノ他ノ收入ヲ以テ支辨ス

第二十二條　本會ノ財產ハ理事長之ヲ監督ス

本會ノ財產信託義務及每月ノ收支ハ主計其ノ計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產信託義務及每月ノ收支ハ理事會其ノ決算書ヲ作リ每年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ノ變更ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ爲ス

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得



會報

一、會誌を四六倍版となすこと
社會の進化に伴ひ會誌「建築と社會」を四六倍版となす要あるを認め今回理事會に於て可決し明年一月號より改版することに決定致しました

二、會誌表紙を更新すること
豫て廣告にて御承知の通會誌表紙の圖案を懸賞募集（期限來る十月三十一日午後五時締切）を致して居ります右當選圖案により明年一月號より表紙を更新する豫定であります

三、貸商店設計圖案懸賞募集紹介
名古屋市文化創設會主催で左記趣意及募集要項により貸商店設計圖案を懸賞募集致して居ります（應募期限本年十月十五日）敷地及坪數の圖面在本協會）

趣意

今回本會は賛助員某氏より、實地の必要と加ふるに建築界振興の意味にもと左の懸賞設計圖案の募集かたの御相談を受けました。
御承知の通り本會は建築界發達のためには、聊かにても及ぶ限り貢獻を盡したいと思つて居ります、右依頼の趣旨には喜んで賛同致しました。
併して茲に本會に依つて本懸賞募集を行つた次第であります。
殘暑尚激しき折柄、折角の御靜養中を誠に恐縮でありますが、吾等の微意御慮察被下いまして、是非共貴下の御藴蔵を吾等に教示すると思召して御應募被下されん事を御願い致します。

募集要項

一、敷地及び坪數は別紙圖面通り
二、建築は市街地建築物法の適用を受くべきもの
三、構造は三階建鐵筋混凝土構造とす
四、建築物の用途及各階希望條件
（イ）第一階は各自獨立の貸商店四戸をとる
別に便所、階段室及ビ階段室の下に地下室の物置きを設くる事、尚階段室は階上室の番人室に宛つる事。
（ロ）第二階は全部本、ビルデング經營者の一戸の事務所となす。
別に階段室及事務所に附屬せる、應接室一、商人溜り一、受付一、便所一、の各室を配置する事。
（ハ）第三階は全部貸事務所とす、要所の室の大きさに其數は適宜區劃なし、別に階段室、共同湯沸場、及便所を設くる事。
（ニ）屋根は陸屋根となし、簡單なる昇降口を設くる事。
六、建築工費　約參萬圓程度とす

應募規定

一、所要圖面　(縮尺百分の一)
　各階平面圖　(同　同)
　正面圖　(同　同)
　側面圖　(同　同)
　主要部詳細圖　(縮尺貳拾分の一)
一、用紙は畫紙(寸法曲尺一尺八寸二尺六寸)
一、仕上げは墨入仕上げとす彩色自由
一、簡單なる設計概要說明書を添付する事
一、應募期限大正拾參年拾月拾五日迄とす
一、應募圖面には暗號を記入して別に住所氏名を名記したるものを添付すること
一、審査の上優秀には左記賞金を贈呈す
　壹等　貳百圓　壹名
　貳等　五拾圓　貳名
　參等　參拾圓　貳名
一、審査は左の諸氏に御委囑す
　前名古屋高等工業學校建築科長
　鈴木禎次氏
　名古屋高等工業學校建築科長
　土屋純一氏
　名古屋高等工業學校教授
　吉田鐵氏
　同　鷹栖一英氏
一、當選圖面の凡ての權利は本會の所得とす
一、選外應募圖面は御希望により返却す
一、應募投稿は名古屋市東區小市場町三丁目文化創設會懸賞係
一、審査結果は本會發行(榮ある生活)拾壹月號に發表す
　尙應募者には本誌を無代配布して審査結果をお知らせ致します
四、名譽贊助員逝去
　名譽贊助員今西林三郎氏は本年八月二十七日逝去せられ洵に痛悼に堪へません本協會よりは弔狀を送り哀悼の意を表しました

會合

○定例理事會

△日時　九月八日(月)午後五時三十分－十時
△會場　本協會會議室
△出席者　池田理事長、中澤理事、今林理事、中村理事、伊藤理事、
△議事
一、九月例會に關する件
左記事項ニ付協議可決せり
1、時　九月十七日(水)午後六時
2、所　大阪府立商品陳列所內實業會館中集會室
3、講演　塗料に就いて
　演題及演者は中村理事交涉の上決定
4、討論　問題
　本協會事業に關する意見及希望
　(當日欠席者は端書により意見及希望の大略を回答さるゝこと)
二、名譽贊助員推薦並名簿より削除に關する件
三、其他雜件
四、會員銓衡

○臨時理事會

△日時　九月十七日(水)午後五時－六時
△會場　大阪府立商品陳列所內中央亭
△出席者　片岡副會頭、池田理事長、中澤理事、今林理事、松本理事、伊藤理事、谷口理事
△議事
一、秋季大會擧行に關する件
　來る十月中旬神戸高等工業學校開校式擧行を機とし神戸に於て全國工業家大會開催に付本協會は同大會會期中十月十八日神戸高等女學校講堂に於て建築學會と聯合して通俗講演會を開催し之れを以て本年の秋季大會を兼ぬることゝし別に行はざることに決す
二、名譽贊助員推薦並名簿より削除に關する件
　原議案の通可決
三、教化委員會委員中委員變更に關する件
　變更のことに可決し次回理事會に於て具體案に付協議のことに決す
四、建築職工教化に關し聯合委員會費用支出の件　可決

五、會員銓衡

○例　會

△日　時　九月十七日(水)午後六時——九時半

△會　場　大阪府立商品陳列所內實業會館中集會室

△出席者

役員　池田理事長　中澤　理事　今林　理事

松本　理事　伊藤　理事　谷口　理事

會員　池田谷久吉　羽原　德衛　富永　眞一

小笠原　朝武田　經一　田中　寬造

高田利一郎　高橋　謙吉　竹內　綠

坪井　誠一　野呂長四郎　久保福次郎

柳下　實　前田　清二　前田　武正

小西　一良　古宇田　實　朝永國次郎

酒井勇三郎　宮川　豐藏　下浦　光衛

姫野　武管　源之助　鈴木與五郎

藤枝　貞一　伊東宗太郎　高橋　榮治

山中　茂一　島田　良馨　野村　敬一

奧野　時三　泉谷　千秋　內藤　太郎

浦　英之助

贊助員　吉本幸一　高柳壽三郎　篠崎　兼二

小林喜多次郎(次第不同)

△記　事

一、定刻一同着席池田理事長より開會を宣し講演に入るに當り同理事長より豫告せし本夕の講演者伊藤貞與氏は本日東京より來阪の途中暴風雨の爲汽車不通となり來阪覺束なき旨の電報に接したるを以て遺憾ながら之れを變更し會員內藤太郎氏最近歸朝せられしに付同氏の歐米視察談を願ふことにしたる次第を述べ拍手の裡に內藤氏登壇時餘に亘る歐米視察談あり

一、講演後二三質問ありて池田理事長より講演者に對し謝辭を述べ一同拍手を以て之れに和す

一、例會開始

1、古宇田敎化委員長より同委員會の經過報告あり序に來る十月中旬擧行の神戶に於ける全國工業家大會開催に付其の計畫大略と希望とを述べらる

右了つて池田理事長より本協會の秋季大會は行はず右全國工業家大會の開催中講演會を開き之れを以て秋季大會を兼ねたるものと承知ありたき旨報告あり

2、次に中澤主記の會務報告を終り本協會事業に關する意見及希望の題下に座談的討論に入り古宇田氏の建築材料(新製のもの陳列館の實現希望、下浦氏の都計委員會活動の希望等其他二三氏の希望意見あり

池田理事長は個人の意見をも附加して一々之れに答へ次に同理事長は缺席者の回答端書による意見及希望を讀み上げ一々說明並意見を吐露し意義ある討論會は終了す時に九時を過ぐる二十分なりき

○新入會員及贊助員

普通贊助員之部

稻原幾太君　福岡縣開司市本村町三丁目二五六四の二

○退會會員及贊助員

會　員　糸崎　周一

同　梶山佐一郎

特別贊助員　內山新之助

同　仙田大一

普通贊助員　永田　實

同　沼田敬藏

○死去贊助員

名譽贊助員　今西林三郎君　大正十三年八月二十七日逝去

○住所勤務先異動

會員之部

關　鐵男君　兵庫縣川邊郡伊丹井筒町

小原　力君　兵庫縣武庫郡今津町字辰畑

小島　淳吉君　北區芝田町一〇五

木村梅次郎君　神戶市會下山町二丁目五八

高木　與吉君　府下泉北郡忠岡村忠岡和泉紡織忠岡工場建築場大林組出張所

福井　義長君　大阪市立工業學校勤務
中村吉太郎君　神戸市坂口通四丁目三五

地方會員之部

水上　昌三君　三重縣度會郡三園村高向八一〇
時岡　好三君　宇治山田市船江町東洋紡績會社社宅
黒澤　研君　姫路市外水上村東洋紡績北社宅一二
松井　清足君　東京府荏原郡洗足田園都市（澁谷局管内）
松室　成貞君　東京府豐多摩郡野方町下沼袋一五一〇

終身贊助員之部

欅田　藤郎君　堺市材木町西二丁三

普通贊助員之部

染井　武治君　奈良縣添上郡東市村大字八島三六
北村　久男君　西區八幡屋町八五の三
杉田新五郎君　富山縣婦負郡細入村蟹寺日本電力株式會社蟹寺電氣建設所
吉岡　富藏君　西區築港八條通二丁目一五
久次米方
田原三千男君　北區澤上江町四丁目三五
倉崎太三郎君　東京市麻布區市兵衛町一丁目一
津田　知一君　東成郡鶴橋町猪飼野一五〇
吉田光太郎君　福島市榮町大林組福島出張所
古川　信治君　兵庫縣武庫郡六甲村八幡字山田四五
堀本　兵一君　西區八幡屋町七
棚橋仁三郎君　新潟縣西蒲原郡月潟
仲　彦七君　兵庫縣武庫郡西の宮東口前松原一四七

○住所並勤務先不明者

會員　高堂　德治
地方會員　廣瀨　恭
特別贊助員　今井　完造
普通贊助員　伊東　武夫
同　戸山音次郎
同　太田　四郎
同　若林　後一
同　吉本新之助
同　松興右衛門
同　植豐
同　政安　熊市
同　櫃藤　洗二
同　足立彌一郎
同　酒井紋之助
同　小枝　實
同　木越誠二郎
同　江藤　猛夫
同　永吉　國一
同　原　定
同　石津　三吉
同　地福　勇吉
同　渡部　三郎
同　吉田榮次郎
同　野々山政金
同　矢田部喜平
同　小林久之助
同　鴻上　佐藏
同　青木　立三
同　坂根　秋光
同　清原　佐市
同　茂木清太郎
同　田中　儀一
同　工藤　覺二
同　橋本　秀齊

右住所或は勤務先御存じの方は本協會事務所へ御教示を願ます

寄贈圖書

住宅　研究　七月號　文化建築社
滿洲建築協會雜誌　八號　同協會
工業評論　九號　同社
工業ノ日本　九號　工業ノ日本社
電氣と人　八月號　同協調會
都市人事　第九光　都市人社
會報　第十七號　名古屋工業會
榮ある生活　九號　文化創設會
學士會月報　四三七號　學士會社
建築世界　八號　建築世界社
朝鮮鐵道協會報　九月號　同協會
郊外生活　三號　郊外生活社
日本美術協會報告　十四輯　日本美術協會
大阪實業　一號　大阪實業協會
生活改善　二一號　生活改善同盟會
建築の普及　九月號　帝國工業教育會
朝鮮と建築　六月號　朝鮮建築會
工業之友　第一九七號　工手學校同窓會
無線電話　八月號日本無線電話普及會
セメント界彙報第九九號日本ポートランドセメント同業會
建築畫報　九號　同社
住宅　九號　住宅改良會
庭園　八號　同協會
建築雜誌　八月號　建築學會
工政　八月號　工政會
英米の社債　東亞經濟調査局
中央建築　九月號　中央建築社
大阪時論　五號　大阪時論社

第七集第十号　掲載広告一覧（掲載順）

ミドリ商会
日本エレベーター製造
大野正営業所
飾磨化学工業
大塚鉄工所
宇野耐火煉瓦
浅野スレート販売
政正
特許エレベーター製作所
二和商会
南満鉱業大阪出張所
宇野耐火煉瓦
原田商会
福田製作所
石綿スレート
浅野スレート販売大阪出張所
東洋コルク工業

山本東作商店
田村商会
建築金物商会
高田松太郎商店
駒崎化学建材研究所
金剛商会
HANKEN SEISAKUSYO
横河橋梁製作所
大平工業所
井筒政蔵商店
日本ホロタイル
鈴木商店
湯浅蓄電池製造
大阪ビトロライト工事
木下商店
野沢幸三郎商店
森川組

田中昌司商店
大福海上火災保険
大阪鉄管商会
桜興業
浅海商店
出浦建築事務所
大阪建築所
新海建築工務所
小笠原建築事務所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
松井建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所

国枝工務所
安井武雄建築事務所
柳下建築事務所
真水工務所
真水三橋建築事務所
増田清建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所
岡部建築事務所
前田松本建築事務所
船越工務所
西原衛生工業所
大阪窯業
池田勘蔵
大倉土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組

竹中工務店
長瀬組
中新
佐伯工務所
野村組
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
藤木工務店
正木工務店
岡本工務店
鴻池組営業所
有山組
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所
辰巳吉之助
森本建築社
清水組大阪支店

銭高組
油脂化工社
山田大理石製作所
矢橋大理石商店
須賀商会
大理石工業
栄進社
松尾
山本窯業商店
境川文庫
新田ベニヤ製造所
大阪青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
品川白煉瓦
日本木材工芸
高島屋呉服店
コルク工業
城口汚水処理研究所大阪支店
阿部鉄工所

ベニス工房
浜口商店
岩崎商業
小野田セメント製造
日本建築紙工大阪出張所
高田商会
米山製作所
星製薬
サカイブン建築鉄工所
関西ステインド硝子製作所
川崎工場
桐田商会
東京建鉄
大阪耐火リノリウム工業
日本工剤
内外土木建築材料
岡部商会
河村青写真調製所
日本トラスコン鋼材

山中商会
亀井商店
日本耐火スレート
日米板硝子
田中源太郎商店
極東板硝子工業
